
東方凶狂書～まるきゅー×3の夢物語～

らくな。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方凶狂書〜まるきゅーx3の夢物語〜

【コード】

N68630

【作者名】

らぐな。

【あらすじ】

時は20XX年。

人々に周知された『幻想郷』という世界は、妖怪や人間、魔法使いが仲良く(?)弾幕ごっこやらなんやらして暮らしている、外の世界から見ればユートピア、エルドラド桃源郷。

そんな幻想郷に…。

究極の馬鹿が現れたっ！！

堂・々・完・結っ！！

第二部「毛玉レベルの人が幻想入りしちゃいました」まるきゅー第
二部「」

続編です！

TOPの『まるきゅーシリーズ』からどうぞ！

そんなこんなで始まるまるきゅーx3＝夢幻大（誤字ではない）の物語！

この小説は東方Projectの二次創作作品です。

二次創作が大嫌いな方は今すぐハリウッドダイブなどで緊急回避してください。

邂逅了幻想郷入り了（後書き）

次回予告！

青年達の名前とは！？

彼等の目的とは！？

次回「キャラ紹介」

お楽しみにっ！

早苗「絶対見て下さいねっ！」

「キャラ紹介」

「キャラ紹介」

青年A「あきら」

…ひよんなことで幻想郷入りした現役男子高校生、つまりDK。

身長は3人の中で最も高く、180越えらしい。

さみしがりである。

幻想郷入りしてしまった為、いろんな世界が開けてしまっが、それはこれからの話である。

青年B「ぼつちよ」

…あきらの友達。DK。

なんか太ってそっちな通称だが、平均的な体重を保っていて、太つてるとは言えない。

テンション高い時はとことん高い。

身長は175程度。

彼もまた、幻想郷入りすることで変わっていく。

青年C「かいと」

…あきらの友達。DK。

身長は173（2センチほどぼつちょに負けている）。

誰よりも他人を気にかける性格とのこと（あきら談）

多分幻想郷入りすることで最も変わる人…かもしれない。

『東方Projectオリジナルキャラ』

東風谷 とうふうたに 早苗 さなえ

身長…詳しいデータがないため不明。身長160くらい？

スリーサイズ…不明。しかしかなりすごいとの噂。

年齢…高校生…のはず（女子高生との噂）

特殊能力…奇跡を起こす程度の能力

真面目な性格。

洩矢神社の巫女さん。そして第二の腋巫女と言われる。
常識外れな人。

好きな食べ物…ミラクルフルーツ。

「キャラ紹介」(後書き)

次回予告！

やっとの本編突入！

結局どーなったの！？

よくわかんない！

というわけで次回

「真・邂逅〜幻想郷入り〜」

あきら「作者の編集ミスで一話増えた事をお詫び申し上げます。」

真・邂逅〜幻想郷入り〜（前書き）

前回までのあらすじー！

- ・ 作者の編集ミスで一話増えた
- ・ キャラ紹介終わった
- ・ 今回から本編

読者の皆様申し訳ありませんでしたm（）ー（）m

真・邂逅〜幻想郷入り〜

「なあなあ、花映塚やんね？」

「まだフラン倒してないからパス。」

「ひじりんに会いたいからパス。」

「この薄情者が！！俺は…俺は…悲しいんだよおおおお！！！！！！」

「お、なんか神社あるぞ？」

「最近神社行ってないんだよな…神様の為に、お参りいきますか。」

「シカトするなあああ！！（涙）」

ひたすら嘆く青年Aをスルーし、青年BとCは神社の鳥居をくぐる。

…神社が歪んでいた事に気付かずに。

「あれ…？賽銭箱ないじゃん。」

「ないなー。神様に会えないじゃん。」

「おーい！俺を無視するなー！！」

「困ったなあ…久しぶりに神のご加護を受けて、シエンガ○レンを狩ろうと思ったのに。」

「シエン○オレンは火事場だろ普通（笑）」

「あいつの酸弾なめんな！一撃でピチューンなんだぞ！？」

「だーからー！俺を無視するなー…って…」

『……………けて…』

青年Aは喚いていたが、いきなり黙った。

「うん？どづしたんだ？」

「しっ！なんか声が聞こえるんだ…！」

『……………す……………て…』

「なんか聞こえるな…！」

「俺も聞こえた！」

『た…すけ…て…！』

「こつちだ…！」

3人は声のするほうに無我夢中で走った。

「助けてー！誰かー！！！」

3人が着くと、画面内でしか見た事がなかった青い巫女さんがなにか火の魂のようなものに追い掛けられていた。

「今助けに行くぴょん…！」

青年Bが何故か語尾をおかしくし、身をてゐして火の魂を追い払う。

「ふう…大丈夫かぴょん？」

「あ、ありがとうございますっ！」

巫女さんはぺこぺこ頭を下げる。

「あれ？この巫女さんって…どっかで見た事あるんだが…」

「うーん…誰だっけ？」

「おまえら！！風神録やってねえのか！！このお方はなあ！」

Bが珍しくテンションを上げて続ける。

「東風谷早苗様だぞ！！！」

「あー！！！！！！！」

「な、なんでこの人達…私の名前を…」

と早苗が小声で呟くが、2人は気付かずに口々に叫ぶ。

「やつふい幻想郷入りしたぜえー！」

「美少女を落としまくるぞー！！！」

と叫んでる2人AとCをよそに、Bは早苗の手をとって（その時に早苗は「ひゃっ！」と小さく叫んだ）、こう続けた。

「早苗さん…俺と結婚してくださいっ！！！！！！！」

「おいこら待てやこのリア充野郎がああああああ……！」

此処に、愚かな嫁戦争が始まった。

真・邂逅〜幻想郷入り〜（後書き）

次回予告っ！

幻想郷入りしたあきら達に悲劇（？）が！

め…飯がない…だと…！？

次回「洩矢神社にて」

神奈子「見ないとオンバシラ出すわよ。」

洩矢神社にて（前書き）

前回までのあらすじー！

- ・ 早苗さん告白される
- ・ 第一次嫁戦争勃発

結構衝撃的なフレーズですが、そんなにシリアスじゃないという不思議（^-^）；

洩矢神社にて

「…で？早苗、この馬鹿と残りの2人はどうしたの？」

かいとの上に座り込む女性が聞く。

かいとのはじたばたしているが…がっしりしたオンバシラの前には無力だった。

「靈力切れの私を助けてくれたんです。」

「ふーん…早苗、このあきらって人、あたしが貰っていいー？可愛いからー」

一方、つぶらな瞳をした帽子を被った少女が、あきらを引っ張る。

「やめてくれ諏訪子さん！かいとが泣くー!!」

「あきらめー!!お前、俺の嫁候補をよくも誑かせてくれやがったなー!!神奈子さんも諏訪子さんも俺のよ」「うるさい!!」

「かいとがオンバシラでピチューンしたな…」

ぼつちよは早苗の隣で冷静に状況を見ていた。

こんなに大騒ぎになったのはほんの数時間前に遡る。

早苗を助けたあきら、ぼつちよ、かいとこの3人はこのまま帰るわけにもいかなくなり

（早苗さんに会えたんだから他の嫁もいるだろうと言う邪な考えが彼等を支配していたからだが）、
行く当てもない3人を早苗は洩矢神社に招待したのだ。

…心優しいね、早苗さん。

洩矢神社には早苗の他に2人の神が住んでいる。

一人はかいとの上に乗っている神：美少女というより美女の八坂神やまか
奈子なこ。

もう一人はあきらを弄んでいる帽子の少女…だが神。 正真正銘の口
リ少女、洩矢諏訪子もじやすわこ。

「そういえば早苗ー、ご飯どーするのー？」

「そうですね…折角3人が来てくれているのに、お粥だけでは失礼ですよね…」

「何？私のお粥は食べられないって言うの？」

神奈子が食ってかかるが…

「違いますよ、お粥となにかおかずを足さなきゃまずいじゃないですか。」

「あー、そういうことね。でも何も無いわよ？」

そう、飯がない！

だがこの状況を打開する、最強の人が現れた。

「早苗さん…調味料はありますか？」

「ぼっちよ君…だっけ？奥の台所にあるけれど…」

「それさえ解れば大丈夫です。早苗さん、おかずは任せて下さい。」

「へ…?」

「最高のおかず、作りますよ(キラッ)」

その後のぼっちょは凄かった。

「あきら、じゃがいも入れて!かいと、肉は解凍したか!？」

異常なまでの速度で料理を作るぼっちょ。

そして10分後…

ぼっちょの10分クッキング、ぼっちょの肉じゃが完成!

「すげええええええ!!!ぼっちょ、料理出来たのか!？」

「一応、ね。ささ、食べて食べて!」

「じゃあ頂くわね」

まずは神奈子が一口。

「…うまいよ！これ、ほんとにうまい！」

「え！？ほんと！？じゃ私も…」諏訪子も一口。

「うんまーい！！！」

「神様2人の太鼓判だ！うまいに違いないぜ！」
あきら、かいと、遅れて早苗も一口。

「おいしー！！！」

「ぼっちょ、これマジにうまいぞ！止まらねえ！」

「これはおいしいです！」

「お粗末さまであります（汗）」

こうして神奈子特製お粥とぼっちょ特製肉じゃがでお腹一杯になった6人はすっかり満足して夜を迎えた。

深夜。

あきらは異常な光景を見た。

流石に男女分かれて寝ないとまずいという話になり、仕切り一つ隔てて横になっていたはずなのに…

ぼっちょがいない。

あきらはたまたま目が覚めて、女性陣の寝ているはずの方向を向いた。

すると…

神奈子、諏訪子、早苗が寝ている、それはよかった。

問題は…

早苗が何かを抱きしめている。

あきらは最初、神奈子か諏訪子かと思った。

が…

「馬鹿…な…！」

あきらはその正体を見て驚いた。

早苗がぎゅーっと抱きしめていたのは…

洩矢神社にて（後書き）

次回予告！

あきらはどうするー！？

こんな時、俺はどうすればいいんだー！！

- ・殴る
- ・蹴る
- ・などの暴行をした罪で
- ・逮捕されました

全て嘘です。

次回「究極の選択…？」

諏訪子「あーっー」

究極の選択…？（前書き）

前回までのあらすじー！

・ぼっちょの肉じゃが美味かった

・ぼっちょ、早苗に抱きしめられる

果たしてあきらはどつする…！？

究極の選択…？

「どつする…どつすねばっ！」

今あきらの手札にあるカードは3枚。

- ・ 放置
- ・ 無理矢理引っぺがす
- ・ 起こす

このイベントを放置するわけにはいかない、何故に俺ではなくぼっ
ちよなんだ！

そうするなら無理矢理ぼっちよを引っぺがして抹殺するか…！

いや！起こせば俺の勝ちだ！そうだ、そうしよう…！

行動に移ろうとしたあきらを止めたのはなんと…

「むにゃむにゃ…あきらひ…」

「！！？かいと！？」

「…今ぼつちよを起こすのは…まずい…」

説明しよう！

かいと「役に立ちそうで役に立たない程度の能力」の一つ、「寝言で人と話す程度の能力」！

この能力は寝ている時のみ発揮し、寝言で他人と会話出来るのだ！

「…あきら…仮に今ぼつちよを起こしたとすれば…早苗さんや…神奈子さん…諏訪子さんを起こしてしまう…」

「た、確かに！」

「女性の寝不足はかなり危険だと聞く…ここで起こしてしまうと、怒りであきらが死んでしまうかもしれない…俺達の物語は…まだ始まったばかりだ！まだ見ぬ嫁の為に…此処は耐えろ！」

かなり良い事言ってるはずなのに、動機が不純過ぎて駄目駄目である。

「…解ったぜかいと！俺は…耐えてみせるぞ！耐えてみせるぞおおおおお！」

「あきら…ぼつちよがいなくなった今だから言えるが…」

「かいと？」

なんかただならぬ様子にあきは恐る恐る聞き返すが…

「俺も嫁を探してくるぜ」

馬鹿 降臨。

「おい！？かいと、どうしたんだ!？」

「あきは洩矢神社を守っていてくれ！んじやな!」

「おいこらあ!!お前って奴はああああ!!!!!!!!!!」

仲間を二人失ったあきら。

神奈子と諏訪子は優しく慰めてくれました。

「可哀相…」

「流石に同情するわ。」

「ありがと…えっぐ…ごぜえやす…えっぐ…お二方…」

現在の状態

あきら・早苗・号泣

ぼっちょ・怒り

かいと・快樂を追いかける

神奈子・諏訪子・あきらと早苗を慰める

究極の選択…？（後書き）

次回予告！

早苗の為に駆け出したぼっちょ！

欲に負けたかいと！

…で色々不憫なあきら…

次回「分かれ始めた道」

文「見ないと寝かさないぞっ（これが外の世界じゃ流行ってるらしいんだけど…ほんとなのかな…？）」

分かれ始めた道（前書き）

前回までのあらすじー！

- ・ぼっちょよ、射命丸抹殺の為に洩矢神社を出ていく
- ・かいと、自分の嫁探しをする為に洩矢神社を出ていく
- ・あきら、自動的に洩矢神社にお留守番

3人はどうなる！？

『お知らせ』

作者の編集ミスがやっと治り始めたので、感想が書けるようになり
ました！

「俺の嫁を早く出せ」

「誤字脱字あるけど」

等ご意見、ご感想があればどうぞ！

それとお気に入り登録して下さいました皆様ありがとうございました

（涙）

これからの展開にご期待下さい！

あの憎たらしい鳥の翼！

「来たね異界人！！話、聞かせて貰うよ！」

手に握られるカメラ！

「いくらでも聞かせてやる！だが！それはお前を潰してからだああああ！！！！！！」

「面白い！幻想郷最速の私に挑むなんてね！名前、聞かせて貰うよ！」

「俺は！早苗さんの婿！ぼっちょだああああ！！！！」

「私は射命丸文！ぼっちょ君、詳しい話を聞かせて貰うよ！」

幻想郷最速VS早苗Love…今、決戦の火蓋が切って落とされた。

「かいと視点」

俺がそもそも幻想郷入りした目的は一つ。

俺は幻想郷中の美少女を落とす…

海賊、いやハーレム王に、俺はなるっ！（シャキーン！）

そのためには…

まず正妻を見つけないてはならない！

俺の物語のメインヒロイン、それは…

「伊吹 萃香！彼女以外は有り得ないっ！！！」

伊吹^{いぶき} 萃香^{すいか}。

幻想郷のとある山の奥深くに住み、数々の妖怪を従える強力な鬼。

しかし実際はほぼ毎日の如く酒を飲み、酔っ払っているロリ幼女なのだ。

ちなみに「にやははははは！」とよく笑っているらしい。

「彼女さえ落とせば俺はそれを足掛かりに更なるハーレムルートへと歩を進める事が出来る！そうさ、俺はやれば出来る子なんだ！！！」

途中からもはや中二病患者のそれと言動が似てきたが、それはスルーして欲しい。

「はっはっはー おれは、おれは未来のハーレム王」

「へえー、そーなのかー。」

「そーなんだよー、だから俺に惚れる…ってルーミアじゃねえかあ
あああ！！！！！」

彼の目の前に現れたのは、人間を喰らう事で有名な妖怪、ルーミア。

見た目はこれまたロリなんだが…

「お前って食べれる人間？」

そう、かなり物騒だ。

「俺は食べられるんじゃない！食べるんだ！（勿論性的な意味で）」

「へえー、そーなのかー。」

「というわけで、じゃあなルーミアー！」

こうして華麗にスルーすれば、あら不思議、ルーミアから簡単に生き延びる事が…

「逃がさないよ!」

…神様、そう上手くは行かないようです。

かいとを襲うルーミア。
逃げるかいと。

かいとの運命やいかに!

「あきら視点」

…ちくしょう。

ぼっちよは仕方ないとして、かいとの野郎…後で血祭りにあげてやる…!

「けれど仕方ない…!頼まれたものは仕方ないんだ…!」

「けれどこの神社なら大丈夫よ?早苗も諏訪子も、ついでに私もい

るんだから。」

「神奈子さん…」

「私達諏訪の神を舐めて貰っちゃ困るわ。」

「その台詞、あたしを倒してから言っただけいいわね！」

「…!!」

洩矢神社に衝撃が走る。

降り立ったのは破壊の悪魔。
最強にして最凶の吸血鬼。

その翼は異形であり。
その力は圧倒的であり。
その顔は狂気に溢れ。

諏訪子が冷や汗をたらして呟く…

「フランドール…スカーレット…!!」

「今日こそ霊夢を出して貰う！あいつをボロボロにするんだ！！」

「だから霊夢は居ないって！」
諏訪子が叫ぶが…

「嘘つきめ！あたしは騙されないぞ！ここにも巫女がいるじゃないか！」

「それは早苗！霊夢は博麗神社に居るの！ここは洩矢神社！」
神奈子も突っ込むが…

「…神社なのには変わらない！此处を破壊すれば、きっと霊夢が来る…！！！」

フランの右腕に現れる弓。

「さあ！全てを破壊する力、見せてあげるわ！！！」

「やめて…！！！」

早苗の悲痛な叫びが響く。

「…ほうら…やっぱりいるじゃない…巫女がねえ!!」

早苗の方向に弓を引き、フランは歪に笑いながらその力の一部を解き放つ。

「スターボウブレ…」

「待ちやがれ」

フランの小さな腕をガシツと掴む。

「何？あたしに命令するつも…」

「命令じゃねえ！要望だあああ!!…!!…!!」

フランが宙を舞った。

分かれ始めた道（後書き）

次回予告！

あきらまってこんなに強かったの！？

かいたの運命は！？

ぼっちょ、頑張れー！！

次回「変化の兆し」

フラン「見ないときゅってしてドカーンだよ！」

変化の兆し（前書き）

前回までのあらすじー！

・あきら最強化フラグ？

・ぼつちよVS文！

・かいと、お前は何をっ！

長々しいから整理するとあきらはボクシング経験者なのです、まる。

さ、戻ろうか！

見ると、フランはスツと立ち上がっていた。

「異界人だと思って舐めていたわ…いいわ、気が変わった！あなたを壊してからこの神社を壊す事にするわ！..」

そしてフランは本気を出した。

「見える…？これがあたしの力…！」

右手に握られた歪んだ細い剣…

「レーヴァテイン…！」

くっつと身体を落とし、フランはあきらみに切迫する…！！

「アハハハハハ！！もっと苦しんでよ！」

あきららは間一髪で剣撃をかわし、すかさずカウンターを打ち込もうとするが…

「（駄目だ…！隙がない…！！）」

出鱈目な攻撃のように見えるが隙が全く見えない。

故にカウンターを入れても無意味、それどころかさらにカウンター入れられて即死だと、あきらまは感じていた。

「異界人のくせになかなかやるじゃない！でもねえ！！」

今度は剣から紅蓮の炎が揺らめく！

「流石に炎は耐え切れなんでしょう！？」

剣撃をかわすあきらに加わる「火の恐怖」という重圧。

間一髪でかわすスタンスのあきらにとって火はかなり危険である。

「熱う！」

「ほらほらほらあ…！」

真一文字に剣が振り下ろされる。

あきらは何とかかわすが…

「あたしは吸血鬼だって忘れてるでしょ？」

それを完全に見越したフランの左手があきらに向かう。

「しまっ…!!」

「ぼっちょ視点」

「幻想郷最速の私に立ち向かう勇氣…それは褒めるわ。 だけどっ！」

文の姿が消える。

「私とあなたじゃ戦いにすらならないわ！」

ぼっちょの脇腹に、文の右脚がのめり込む。

「がっ……!!」

「耐えたのは上々!でもね!」

文の拳が、鳩尾に沈む。

「ぐっ……!!」

「止めよ……!!」

空高く舞い上がり、文は屈んでいるぼつちよ目掛けて踵落とし。

背中に決まり、ぼつちよは力無く地に伏した。

「一分持っただけで十分だと思いなさい!」

踵を返し、文は跳ぶ。

「ま…待て…俺は…ま…だ…」

手を延ばすが彼女には届かない。

視界が少しずつ闇に食われ、ぼつちよはびくりとも動けなくなった。

そこに通りかかった二人の少女。

「藍様ー、人間が倒れてますよ?」

「あら大変!今すぐ助けなきゃ!紫様に連絡して!」

「は、はい!」

「かいと視点」

「待てー!」

「『待て』と言われて待つ奴は一人も居ねえ!」

命の危険を感じたかいはひたすら逃げる。

「あんまり逃げてばかりだと怒っちゃうぞー!」

「ハハハ、何の冗談だ!? ルーミアが怒ったってちっとも怖くないぞー!」

「むー!怒った!」

ふっと姿を消し、ルーミアはかいたの目の前に現れた。

「なっ…!?!」

「あたしを怒らせたんだ…覚悟くらいできてるよね?」

かいたはルーミアの本気を知らなかった。

「そもそもなんであたしがこんなに幻想郷中をふらふらできてると思っの?あたしにも力はあるんだよ…?」

「何っ…!？」

「みんなあたしを雑魚扱いするけれど…あたしは本気を出してない、ただそれだけなんだからね？」

ゴウツ…!!とルーミアから異様な重圧が放たれる。

「何だ…この波動は…!？」

「あなたは死にたい？生きたい？どっちなの？」

「…やるうってのか…上等だルーミア!!」

かいとがルーミアに突撃する。

「へえー。」

が、今のルーミアにとって、かいとの動きは亀のようにしか見えなかった。

一瞬でかいとの背後を捉え、すっと腕を振る。

真紅の血が、ルーミアにびちゃりとかかった。

「あなたは死にたかったんだー、そーなのかー。」

ルーミアは「もう飽きた」と言わんばかりにその場を去った。

「…俺の…俺の物語…俺の…ハーレムが……がくり。」

変化の兆し（後書き）

次回予告！

早くも全員死亡フラグ！？

一体どうなるんだこの小説！？

シリアス成分からの脱却は何時になるのか！？

次回「早くコメディーに戻りたい」

萃香「やははははははは！」

早くコメディーに戻りたい(前書き)

前回までのあらすじー！

全員死亡フラグ

…えっ？

早くコメディ―に戻りたい

「かいと視点」

「……………い。」

何だ…？身体が…暖かい？

「……………お。」

何だろう…この安心する感じは…

「起きろー！」

何かをかけられ、かいとは跳び起きる。

「痛あー！」

「そりゃそーだよ、背中ばっさり斬られてるんだから。生きてる方

がすごいよ。」

かいは声の主の方を向いたまま固まった。

「ま、でも元気そうだから良かったよ！にやははははは！」

現在の状況を脳内処理中…しばらくお待ち下さい…

終了まで後5年と11ヶ月…

「ん？どしたの？」

強制起動、開始。

かいとがぐ、嫁にぐ、出会ったぐ。

(ウル〇ンみたいなナレーションで)

というわけで、伊吹萃香にかいとは助けられたようです。

「で、なんで俺なんかを助けてくれたんです？」

ちょうど食事時だったようで、萃香は烏賊いかの燻製をもぐもぐ食べている。

…勿論隣には酒入りの瓢箪ひょうたんがあるのだが。

「んー？私ガね、おつまみ欲しくて山下りてたらあなたが倒れてて。放っておくわけにもいかないしねー、にやはははははは！」

「（すっげー酔っ払ってるー！）」

「で、あなたの名前はー？」

慌てて答える。

「か、かいとっつて言います！宜しくお願いします、萃香さん！」

「すいかでいいよー、さん付けされるの苦手だからー。」

「そんなんですか…。」

「ねーねー、お酒飲めるー？」

「ちょっとすいか！？俺は未成年ですよ！？」

「そーなんだー…、残念だね。折角他の人と飲めるかと思ったのにー…あ！」

萃香は立ち上がり、瓶を一本持つてくる。

「こないだね、霊夢から貰ったの！甘酒！これなら飲めるでしょ！？」

「甘酒なら問題ないですね…一緒に飲みましょう！」

「やったあ！」

これがまさか、かいとに劇的な変化をもたらすとは…

萃香もかいと本人も解らなかつた。

「あきら視点」

「しまっ…!?!」

あきらに迫る冷酷な一撃。

それを防ぐ一撃が、フランを襲う!

「神祭『エクспанデッド・オンバシラ』!」

フランを上から押さえ付ける巨大な柱!

「大丈夫!?!」

「神奈子さん…!?!」

「まだまだ!土着符『手長足長さま』!」

さらに拘束を強めるべく、諏訪子が足長さまと手長さまを召喚する!

「早苗！」

諏訪子が早苗に促したのは！

「はい！準備『カンモタケミナカタ』！」

早苗の周りに集まる不思議な力！

「放せ！はーなーせー！！！」

「放してあげるわよ…！！！」

柱が消滅し、フランが自由になった瞬間…！！

「大奇跡『八坂の神風』！！！」

神が振るう風が、フランを襲う！！

「ぎゃああああ…！！！」

風に掠われたフランはそのまま吹き飛ばされていく！

「お、覚えてなさい！いずれお姉様とまた来るからなあああ！！！！」
「！」

悪役の捨て台詞と共に、フランは星になりました。

「やったね！」

「いやー、上手く行ったねえ。」

「それにしても…あきらさんって強いんですね。」

「そうねえ。洩矢神社のボディーガードになってくれれば随分楽になるわ。」

「ボディーガードお！？」

なんか大役任される予感。

「早苗だけじゃ不安なのよ…男手があれば…」

「あたしも遊び相手が欲しいしー！」

「お願いできませんか…？」

ぼっちょ、ぼっちょが早苗さんに惚れるのも解るわ…

上目使いが…マジに可愛い…！

「喜んで！（ビシッ！ー！）」

なぜか敬礼のあきら。

「そうと決まれば食料を調達しないとイケないわね。私のお粥だけじゃいずれ飽きがくるし。」

「そーだね！神奈子は早苗と一緒に行ってきなよ！あたしはあきらと遊ぶ！」

「ええっ！？」

ボディーガード以前に死亡フラグ立ちそうです。

「すみません…私と神奈子様が戻ってくるまで諏訪子様と遊んで下

せい…。」

早苗が申し訳なさそうに頭を下げる。

「遊ぶだけでいいんですか…？いや、俺ってボディーパーガーなんじや…。」

「諏訪子はね、誰かと遊ぶ事で力が高まるのよ。だから諏訪子と遊ぶのはあなたの身体強化や諏訪子の為になるの。」

「そうなんですか。」

「じゃ頼むわよ。」

早苗と神奈子は買い出しに出ていった。

早くコメディーに戻りたい(後書き)

次回予告!

嫁に出会ったかいと!

彼の野望は成就されるのか!?

そしてぼっちょはどーなった!

あきらまはいつになったら主人公らしく活躍出来るのか!?

次回「ぼっちょの悲劇とかいとの祭」

かいと「俺に惚れるなよっ!」

ぼっちょの悲劇とかいとの祭(前書き)

前回までのあらすじー！

・あきら、何とかフランを撃退

・かいは萃香と共に甘酒飲み始めた

…今回新キャラ登場…か？

ぼっちょの悲劇とかいと祭

「ぼっちょ視点」

「うにゃ…?」

「藍様ー！人間が目覚めましたー！！」

誰かの声がして…猫…いや…猫娘…?

「生きてたんだね！良かった！」

今度は…

尻尾が1、2、3…

9本…?

でなんか見た事ある耳…

「九尾化したナ〇トかあああああ……！！！！！！！！！！」

「うん？ナル○じゃないけど、九尾なのは合ってるよ。私は八雲藍^{やくもらん}。こっちの可愛い猫が私の式神、^{ちえん}橙。」

「はじめまして人間さん！橙です！」

笑顔が素敵な橙。

「あ…俺、ぼつちよって言います…」

「ぼつちよ君ね！早速なんだけど、何で倒れてたか聞かせて貰えるかな？」

ぼつちよは事の一部始終を話した。

「…よく文を倒そうなんて思ったね…彼女、ああ見えてかなり身体能力が高いのよ。」

「ええ…戦って解りました。でも、彼女を倒さなきゃいけないんで

すよ…!」

早苗さんの為に、と心の中で続けた。

その思いが通じたのか、

「解った、協力してあげる。」

「本当ですか!?!」

「紫様の訓練を受ければ、きっと倒せるかも!」

「そうですね藍様!紫様はとっても強いですからね!」

「紫…?」

「あ、紫様は私達のご主人なの。」

「ご主人…?」

なんじゃそりゃと思っていたら、どこからか聞き慣れない声が出た。

「藍？らん！」

「噂をすれば！はいー？」

「拾った人間、いるでしょー！連れて来てー！」

「どうやら頼まなくても大丈夫みたいだね、行こう！」

「ああ、はい…。」

何が何だかよく解らないが、ついていった方が良い気がしてぼっちよはついていった。

「かいと視点」

「じゃはははははー！」

「あははははははー！」

「くっく、くっく…」

「じゃはははははー!」

「あはははははー!」

その様子を窓から覗く少女が…

… 皆さんこんばんわ、私は文々。新聞の記者の犬走椋いぬはしりもみじと言います。

何が何だか解らない皆様の為に、私が今の状況を説明します。

伊吹萃香とかいととか言う青年が甘酒を飲み始めて一時間経過しました。

青年は甘酒しか飲んでいないはずなのに、顔を真っ赤にして…まるで酔っているかのようです。

一方、萃香さんは飲んでいたので酔っ払うというのは頷けますが…

「じゃはははははー!」としかもつ言ってません…。

皆様、青年が酔っ払っている理由がわかりました！

彼の足元を見て下さい！

…あれは奈良漬けです！

ちよっぴりお酒入りの漬物なんですが…

…え？ということは彼…

奈良漬け食べただけで酔っ払ったってことですか！？

…恐るべし、異界人！

椀の勘違いをよそに、事態は思わぬ方向へ転がる。

「あれ？お客さんいたの？」

あれは！？

一本の角が偉大さを物語るように凜と突き出し、にやりっと笑う鬼！

星熊ほしぐま 勇儀ゆうぎさんじゃないですか！？

「しっかしまあ、よく飲むなあー！身体壊さないか？」

「壊さないよ！あたしにとってお酒は水だから！
それより勇儀も甘酒飲まない？」

「甘酒か！珍しいなあ〜！よし、飲んでやるよ！」

どかっと座り、甘酒を一杯飲む勇儀。

「甘いねー！これが米から出来るってのが不思議だなあ！」

「あ、あのー…」

「お、見慣れない顔だね！何、萃香の知り合い？」

「今日始めてなんです…」

「お！新人か！あたしは星熊勇儀！勇儀って呼んでくれ！」

男勝りな性格ですね…勇儀さん。

ちょっと調べてみましょう！

「その記者さんも来なよ！」

え！？ばれてたの！？

「ばれてるから、観念して来な！」

「ふえええん…」

かくして、私、椀もこの飲み会に参加することになりました。

あきら死す…？（前書き）

前回までのあらすじー！

・かいとのが所が凄惨に

・ぼつちよ、紫に呼ばれる

・次回予告で急にあきらに死亡フラグが

あきら死す…？

「あきら視点」

「ミジャクジさま、いっけー!!」

諏訪子が召喚したすぐく…大きい蛇がにょろにょろによーんとあきらに巻き付く。

「す、諏訪子さん!?!?!くるじゅで…」

「なんか言ったー?」

「いや…あの…いぎが…くるじゅ…」

「楽しいんだって!ミジャクジさま、もっとやっちゃえー!」

何をどうしたら楽しいって聞こえるんだ!?

あ…やば…意識が…

諏訪子は悪気0であるが…

「今…俺の脳内が…ミッシングパワーでおかしくなった…気が…」

「何一人で喋ってんのー？」

「あ…聞こえてないみたい…（変態丸出しの脳内垂れ流しだけは回避できたのね…）」

そうだよ！

俺はあくまで常識人！

そーじゃないと展開やら何やら色んな事が危なくなる！

「であきら、『よーじょ』って何ー？」

…え？

その一言に、頭がパーフェクトフリーズする。

「あきらがよーじょがどーにかって言ってたからー。」

「のおおおおお！！！！おーまいがつつっ！！！！」

皆さん、もう俺は駄目人間みたいです。

「かいと視点」

「のまのまいえい！のまのまのまいえい！」

「すいか…そのネタは古すぎて断罪されるぞ…」

もう止められない萃香。

絶望の権。…見つかったとか、文さまにまた変なコスプレさせられるとかツイッターしてるが、まあスル！。

「あちよー、ほわたたたた、ほわったあ！！ひでぶっ！！」

かいとはなんかエア北〇の拳をしている。

…というか一人二役かい。

とにかく、サラリーマンの忘年会的雰囲気になっている…

作者も「描写につかれました」などとゆっくり、いやこっさり弱音吐いてる。

そんなこんなで陽が昇るまでどんちゃん騒ぎしましたとさ、まる。

「ぼっちょ視点」

ぼっちょが連れていかれた先には、火燵にinした紫の服の少女が…

みかんを食べていた。

「紫様ー、人間を連れて来ましたー！」

「は、はりがほね（あ、ありがとね）。」

少女はみかんを頬張っているため、何を言ってるのか理解出来ない。

「ひってひいよー（行っていいよー）。」

何を言ってるのか相変わらずぼつちよには解らなかったが、藍には解るようで、藍はいなくなった。

ごくり。

少女がみかんを飲み込む音がして、やっとぼつちよにも解るように話した。

「知ってると思うけど、私が八雲紫^{やくも ゆかり}。この幻想郷の監視をしてるわ。…まあ平和過ぎて藍に任せちゃってるけど。」

駄目人間じゃんっ！

「駄目人間じゃないわ。私だってやる事はやってるのよ？あの蓬莱の姫とは比べないで欲しいわ。」

心読めるのかっ!？

「一応補足ね。いつつも言われるから最初に言っておいたの。…さて、あなた、外からの人間よね？」

「はい…それがどうしたんですか？」

ぼつちよの質問に、紫は少し神妙な様子で答える。

「いやね、本来この幻想郷に入る為には条件を1つでも満たさないといけないのよ。

あなたが既に死人で、幽霊であること。

あなたが何らかの要因で魔法使いや妖怪になっっていること。

そして…かなり珍しいんだけど…『外の世界では本来有り得ない能力を持っていること』。

これらの条件を1つでも満たしていれば幻想郷には入れるんだけど

…」

紫は軽く溜息をついて続ける。

「本来なら更に、私と博麗神社にいる霊夢って言う子が作った結界…『博麗大結界』を越えなければならぬの。

で、普通なら結界を越えた時点で私と霊夢が気付くはずなんだけど…何故か私も霊夢も気付かずにあなたが幻想郷に入ってきた…これはおかしいの。

まるで最初から結界という壁がなかったかのようにあなたが入ってきたという事実…私はその理由を確かめたい。だからあなたには…」

紫は小さな瓶を取り出してあくまで冷静に言い放った。

「死んでもらうわ。」

あきら死す…？（後書き）

次回予告！

人間終了とまでなりかねないほど落ち込んだあきら！

ぼっちょにも死亡フラグがつ！？

何回フラグブレイクしたら気が済むんだ！？

次回「さようならぼっちょ」

藍「実際はどうなるのかは紫様しか解らないんです…」

おもしろならぼっちょ(前書き)

前回までのあらすじー！

・あきら、人間的に死亡

・ぼっちょ 命の危機

…ギャグ色がなくなってきたぞ!?

早く修正するんだ作者!!

おまじならぼっちょ

「ぼっちょ視点」

「え…？」

「だから、あなたには死んでもらうの。今私と戦って瀕死寸前に能力覚醒みたいなラノベ的展開なんて要らないの。あなたの体もボロボロだし。」

「ならいつその事臨死体験でもして貰った方が、私としてはあなたの中身が見れるから理由を知れる可能性は上がるし。」

「何さらつと恐ろしい事を言ってるんだこの人はー！？」

「要はあなたの隠された能力を見たいだけ。それ以外は何もしないわ、安心して。」

「いやいや、「死んでくれ」って頼む人を信用なんてできません！」

「後、全てが終わったらあなたの用に付き合っただけあげるわ…悪くはない取引のはずよ？」

「…そうだ、死んでる間は暇でしょうね…話し相手を呼んでおくから」

安心して。」

「え？いや、だから…」

「善は急げ…早速行くわ。」

紫に瓶の中身を無理矢理口に入れられるぼっちよ。

ぼっちよの意識は、そこで途切れた。

「…さて、あなたの中身、見せて貰うわよ。」

気が付くと、ぼっちよは川の辺に仰向けになっていた。
なんだか暖かい気がする。

「…お！おめえか、紫の用事の人は！」

視界に入る朱いとも紫だとも言えない色のツインテールの少女。

「あたしは小野塚小町おのじかこまちってんだ！宜しくな！」

「あ…はい…宜しく願います…」

「一時的にあたしはおめえを守るからな！おめえは本来まだ死なない人間だから！」

もうショックがでかすぎて驚く気にもならない。

「あ、あたしは死神やってんだよ！幽霊をあの世に持って行く仕事をやってんだ！」

幽霊を…あの世に…？

そして…ここは川…

つまり！

「三途の川かああああ!!!!!!!!!!」

「そーだよ？気付かなかった？のろいなあ。」

「気付きませんよ！死にたくなかったのに殺されたようなもんですからね！」

「ハハハ！」

「笑う所お!？」

「でもさ、あたし、この仕事柄だから人とあんまり話しないんだよ！さみしくてさみしくて！」

「そうなんですか……」

さみしい、ぼつちよにはその感情が解る気がした。

「でき、なんでおめえがこんな所に来たんだ？」

「それは…」

「…へえ、文に勝ちたいんだ。そりゃ凄い目標だね。」

「…はい。」

ぼつちよは強くなりたかった。

あの鳥を越えなければ、あの人はまた悲しむ。

…悲しむ顔なんて、見たくない。

おもむろに小町が問い掛けてきた。

「なあ、こんな話、信じるか？魂だけの人間が修業を積んで元の肉
体に戻ると、肉体にも修業の成果って奴が出るらしいんだ。」

「そうなんですか…?」

「でも誰も生きた肉体を持ってねえから証明も出来ないんだよ。でさ、ちよつとこの証明に付き合ってくれないかな?」

「それで強くなれるんですか…?」

「そりゃ解らないね、他人事みたいで申し訳ないけどさ。…でも、やらないよりはマシじゃないかな?」

確かに一理あった。

「…わかりました、やりましょう!」

「あたしも久しぶりに運動したくてね!」

小町は背中に背負った鎌に手をかけた。

「そついやおめえの名前、聞いてないね!」

「ほつちよ…!」

「ぼっちょか…良い名前だねっ!!」

小町が牙を剥いた。

「かいと視点」

「ああー、よく寝たあ…。」

すっかり陽は昇りきり、外を見るとどろろやら辱らしいことが解った。

「…けどびっくりだ…」

昨日と今日でかいとに変化が起きた。

ルーミアにやられた背中の傷がもう癒えていたのだ。

「…すっげえな甘酒パワー…」

これがかいとの能力の断片だと気付くのはもう少し後の事になる。

「…皆寝ているんだな…」

萃香、勇儀、それに権もすやすやと眠っている。

「…やべえな、俺…ハーレムルートまっしぐらじゃん。」

これが夢ではないようにと、かいとはこっそりと願った。

さよならぼっちょ（後書き）

次回予告！！

三途の川での戦い！

魂だけと化したぼっちょの運命は！？

そして人間的に終了したあきらはどうなった！？

かいとの影が薄いぞ！？

というわけで次回「あきらのトラブル…？」

小町「見ない人を渡らせたいね！」

作者「それは止めて」

あきらのトラブル…？（前書き）

前回までのあらすじー！

・ぼっちょ死亡（実際は紫の薬で臨死体験）

・かいとのハーレム計画が少し進む

PV2500突破記念、まさかの本日二回目の更新！

少しくらい調子に乗らせて下さいm（・ー・）m

あきらのトラブル…？

「あきら視点」

「ただいまー。」

「あ、神奈子おかえりー！」

「お、おかえりなさい…。」

びんぴんの諏訪子に対してポロポロのあきら。

「どう？楽しかった？」

「うん！あきは面白いよ！それにタフだよ！」

諏訪子が満面の笑顔で答える。

「そう、よかったじゃない。…あきは…言うまでもないね。」

地に伏したあきは息絶え絶えに言う。

「神奈子さん…諏訪子さんが…元気過ぎます…」

「でも諏訪子が楽しかったって言ってるのは良かったわ。最近忙しくて中々遊んであげられなかったの。」

「そう…なんですか…」

「今日はすき焼きでもしようかと思っんです！」

早苗がにこにこしながら言う。

「私も久しぶりにお粥以外のものを作るわ。あきらと諏訪子は待ってて。」

「はい！」

「はい…」

数時間後、ぐっぐつとおいしそうな湯気と匂いと共に、鍋がやってきた。

「さ、私と早苗の合作、すき焼きを召し上がれ。」

「いただきまーす！」

「待ってー！！！」

「!?!」

全員に衝撃が走る！

「私にも食べさせてー！」

と言いながら入って来たのは…

淡い青のちよつと大きい和服のようなものを着た美女。

頭にはふんわりした、ちよつとお化けが付けそうな三角の布つきの帽子。

「幽々子さんじゃないですかー！」

「そうだよ、私は西行寺さいぎょうじ 幽々子ゆうやうこ！良い匂いがして呼ばれちゃった
！うふふ！」

「（俺、凄い人に会っちゃったー！！！！）」

あきらは一人緊張感に襲われる。

「すき焼き、私も戴いていいかしら？」

「いいよー！皆で食べれば美味しいもんね！」

「ありがとね！じゃあ戴きましょ！」

思わぬ客（実はそう思ってるのはあきらだけなのだが）が来たが、その程度で終わるすき焼きパーティーではない。

あきらは幻想郷の中でも大物と食事をする事になった…

「おいしーい！」

ほんとに純真無垢な笑顔ですき焼きを食べる幽々子。

「美味しいに決まってるじゃない、だって早苗と私が作ったのよ？」

「そうなの？神奈子と早苗ちゃんが作ったんだったら美味しいのも頷けるね！」

「でも幽々子が来るなんて珍しいね。最近は来なかったじゃない。」

「忙しかったのよー、ごめんね？」

「そうなんだ。まあ今日は楽しみましょっつ？」

「そっねー！」

「早苗ー、玉ねぎー！」

「はいー！」

鍋に追加される玉ねぎと肉！

「…お肉は戴きたいね…！」

「…肉…！」

「お肉ー！」

「さっきから食べてないんですよ…！」

心なしか皆の目が暗く光った気がした。

…そして、お肉戦争が始まった！！

「ぼっちょ視点」

「うりゃあ…！」

頭上を斬る鎌。

「危なっ！」

「でえやああああ！！！！！」

拳が小町に迫る！！

「しっかたねえなあ……」

小町の姿が消えた！

そして少し離れた場所に現れる！

「まさかあたしの能力を使わせるなんて……正直見くびっていたけど、やるじゃん。」

何故当たらなかった？

ぼっちよにはそれが解らなかった。

「あたしの能力……距離を操る能力さ。」

距離を操る……？

「当たると痛そうだから離れただけなんだけどね！」

再びぼつちよに迫る小町。

しかし今度は自身の能力を使い、一瞬で距離を詰める！

「そこ！」

鎌の先がぼつちよを捉えた。

間一髪、ぼつちよの服だけが切れる。

「ちくしょ…！」

あきらのトラブル…？（後書き）

次回予告！

ついに不憫なあきらに幸運が！

な…なんだ…と…！？

かいと、お前は何処に居るんだ！？

というか超展開じゃないかこれ！？

というわけで次回「ぼっちょは一話お休みします」

幽々子「お腹へったー！」

作者「早いですよゆゆさまー！」

ぼっちょは一話お休みします（前書き）

前回までのあらすじー！

・ぼっちょVS小町

…今回はとにかくカオスかもしれません。

ぼっちょは一話お休みします

「かいと視点」

こりゃあ凄いな。

つてのも、あれから俺は萃香達と一時的に別れ、新たな嫁を手に入る為に紅魔館って言う所に行ったんだが…

端的に言つと、好みの人が多過ぎて絞り切れないんだ。

アウトドアな性格の美女にして巨乳な人、ほんめいりん紅美鈴。

主人に従順なメイド、俺も彼女の主人になりたいな…じゅうろくや十六夜咲夜。

眼鏡かけさせりや間違はなくストライクゾーンの病弱という男性の琴線に触れまくる美少女、パチュリー・ノーレッジ。

小悪魔？あの子はいくまでサブヒロインだ、サブのそのまたサブだよ。

そして！

吸血鬼姉妹というメインがいるんだよ、君！

紅魔館の当主にしてロリ担当その1、お持ち帰り候補にまで入る美少女パワー！

レミリア⇨スカーレット！

引きこもりなんて可哀相なレッテル貼られてるが、実際はロリ担当その2、俺の心まできゅっとしてドカーンしてくれる破壊力！

フランドール⇨スカーレット！

彼女達を落とせば、ハーレムの極みまでぐつと近付く訳ですよ！

でも欲張っちゃいけないんだ、欲張り過ぎたら待ってるのは破滅だけだからな。

だから2、3名くらいに絞りたいんだが…

皆素敵すぎて絞れない…！

あ、因みに俺はロリが好みだが、巨乳でも美女でも可愛かったらなんでもloveley!!

…ん？文法がおかしい？気にしない気にしない！

というわけでその君達にお願いがあるんだ、2人が3人でいいから好きな人を選んでくれ！

俺は選んでくれた人を全力で落とす！

…って言いたいんだけど、他力本願じゃハーレムは築けない。

くそう、どーしたらいいんだー！！

「あきら視点」

なんか変態の叫びが聞こえた気がするが、気のせいだろう、きっと。

そんな訳で、俺はなんと幽々子さんと仲良くなってしまい…

「ねえ、あきら君をちょっとだけ預かっていいかしら？」

「どっして？」

神奈子が聞くと…

「妖夢と会わせてみたいの。彼女の反応が見てみたくて。あの子もいずれ恋をするから、男性つてものをちよっぴり教えてあげなきゃね。」

うふふと、幽々子さんが微笑む。

…可愛いなあ…

「それはいいかもね。彼女、生真面目過ぎるし。」

「真面目過ぎても楽しくないしね、たまには羽目を外してみるのもいいよね？」

「そうだね、早苗、別に数日くらいなら大丈夫よね？」

「そうですね、数日くらいなら。」

「あきらも大丈夫よね？」

「ええ…というか俺でいいんですか？」

寧ろ俺でいいんだろうか、それが激しく不安だ。

「いいよー！」

あ、よかった…って軽い！

「そしたらついていきます。」

「ほんと！？ありがとうございます！」

幽々子さんは嬉しそうな表情を見せた。

「じゃ、今日は遅いから、明日の朝に行きましよう？」

「そうですね。」

そうそう、お肉戦争は…

幽々子さんの完全勝利でした。

彼女の能力『なんでも食べれる程度の能力』により、お肉があつという間に幽々子さんのお腹に入ってしまったのだ。

個人的には『なんでも食べれる程度の能力』というより『なんでも美味しく食べれる程度の能力』だと思うのだが…

「お腹いっぱい！」

幽々子さんは幸せそうだから皆文句は言えない。

お客さんでもあるしね。

「早苗ー、お風呂溜めたよー？」

暫く姿が見えなかった諏訪子さんが帰って来た。

お風呂か…ゆっくり浸かりたいね。

「諏訪子様、ありがとございます。というわけでお風呂、入りませよー！」

よしよし、まずは女性陣が入ってから一人で入りますか…

「あきらー、一緒に入るよねー?」

…なああっ!?!?

「実はお風呂と言っても露天風呂なのよ。だから混浴くらいどうだって事はないのよ?」

…あっちの世界じゃ絶対有り得ない事ですね…

というわけで、なんと美少女・美女と混浴というびっくりだが嬉しいイベントが起きました。

…ぼっちよ、ごめん。

先に早苗さんのすべすべ肌を見てくるよ。

ぼっちょは一話お休みします（後書き）

次回予告！

宣言通り一話休んだぼっちょ！

今度こそぼっちょの運命は！？

あきら…生き残れよ…！

かいとは…変態路線に走りつつあります…

というわけで次回

「きつとベタなテンプレ覚醒」

パチュリー「むきゅ？むきゅー！」

レミリア「何言ってるのパチエ…？」

きつとベタなテンプレ覚醒(前書き)

前回までのあらすじー！

・あきら、混浴イベント

・かいと、新たな嫁探し

新キャラマジで登場！！

きつとベタなテンプレ覚醒

「ぼっちょ視点」

鎌をひたすら避け続ける…つまりグレイズを繰り返しているぼっちょよ。

「ほらほらほらあ！！もっと攻めてきなよ！！」

攻めれていたらこんな事していませんよ、小町さん！

どうすれば…どうすればいいんだ…！！

ふと、さっき(?)紫さんに言われた事を思い出す。

「あなたには隠された力があるかもしれない」

隠された…力…

もしあるとするなら。

もし自分に力があるのなら。

彼女を守れるかもしれない。

…守りたい!!

「!?!」

石に躓いて体勢が崩れる。

「そこだあ!!」

鎌が迫る!!

「しまっ…!!」

『天盾…』

頭に浮かぶ謎の言葉。

しかしぼっちょはそれを唱えた!

「天盾『八咫の鏡』！！！」

「なっ…！？」

小町の鎌は、突如現れた盾によって弾かれた。

「す、スペルカード！？」

「ついに覚醒したわね…しかし、珍しいね…攻撃能力がほぼないス
ペルなんて。」

紫はその様子をスキマを通して見ていた。

「（彼に仮に能力を名付けるなら…）」

「解りました…僕の方…！それは…！」

「『誰かを守れる程度の能力』…！」

「（でもおかしいわ…となると、ぼつちよには結界を破る力がないという事になる…つまり…別の力が働いた…？）」

「やるねえ！でも…！」

小町はぼつちよの後ろに回る。

「盾は真正面しか守れない！」

「解っていますよ」

ぼつちよの背後に一瞬見えた透明な壁！

「短守『ミニミニ結界』…！」

「きゃあっ!!」

結界に鎌を弾かれ、よろめく小町。

結界は壊れ、破片が舞う!

現在パッシブモード。

頭に浮かぶそのアナウンス。

「アクティブモード!!」

盾が展開され、小さな盾と剣に分かれる!!

「何…!?!」

「誰かを守る為には…力が要るんだ!!」

小町の懐に入るぼっちょ!

「これが最大の力だ！矛盾『不殺の剣』！！」

結界の破片が小町に降り注ぐ！！

「うわぁっ！！」

土煙が煌々と上がり…

小町は倒れていた。

「強いな…ぼつちよ…」

「いや…一歩間違えたら僕がやられてました。」

「でも…久しぶりに動けて楽しかった…！ありがとなっ！」

へへっと笑う小町。

「こちらこそ…ありがとうございます…！」

ぼっちょの身体が、突如浮かび上がる。

「え、うえ…？」

「戻る時だよ！また何時でも来なよ！」

「ま、また会えますよね！？」

「ああ！何時でも来なよ！」

小町の姿が遠くなり…

ぼっちょは紫の所に戻ってきた。

「う…紫…さん…?」

「ぼつちよ君、帰って来たばっかりで悪いけど一つだけ質問ね。あなたと他に誰か幻想郷に入った人はいる?」

「僕の…友達…あきらと…かいとだけですが…」

「端的に言うわ。あなたは能力を持っていただけで、結界を突破する力はなかった。」

「え…?」

「つまりあなたのお友達…あきらとかいと、この二人の内どちらかに結界を突破する力があると考えられるわ。」

「という事は…!」

「彼らにも接触しなきゃいけなくなっただわ。でも急ぐ事じゃない、ゆっくりと確かめなくちゃ…」

その頃。

「にゃーにゃーにゃー　なーなーななー」

鼻歌を歌いながら歩く一人の青年。

不意に、青年は男の妖怪にぶつかった。

「…おい、どこ歩いてやがる？」

威圧感たっぷりの不良妖怪。

「いやいや、すみません。ぶつかっちまいました。」

へらへらと笑ってその場をやり過ぐそうとする青年。

「俺様にぶつかるたあいい度胸だあ！ぶっ殺すぞ！！」

青年に殴り掛かる妖怪。

「えーきさん、この場合、相手ぶっ殺しても罪には問われませんか？」

誰かに話し掛ける青年。

『ええ。ただ殺すと後々面倒になるわ…白なものには変わりないけれど。』

妖怪と青年以外誰もいないはずなのに別の声が。

どうやら若い女性のように。

「了解。」

彼は歪んだ笑みを見せて妖怪の拳を受け止めた。

「な…！？」

「あなただを殺したくないからスペルカードでぶっ飛ばす事にするわ。」

そして彼は唱えた。

「神劍『ラグナロク』」

瞬間、妖怪が斬られる。

「ぎゃあああああ……!……!……!」

妖怪は血を噴いて倒れた。

きつとベタなテンプレ覚醒（後書き）

次回予告！！

かいとにもついに見せ所が！

そして妖怪をボコボコにしたこの青年は誰なんだっ！

というわけで次回

「感動の再会（という名のネタバレ）とVS咲夜」

咲夜「お嬢様もこの小説には『感動した』とおっしゃっております
た」

かいと「嘘だろそれ」

感動の再会(という名のネタバレ)とVS咲夜(前書き)

前回までのあらすじー！

・謎の青年登場

…やばい、ギャグ色が消滅しかけてるぞ作者！！

感動の再会（という名のネタバレ）とVS咲夜

「????視点」

「えーきさん、あれでOK?」

全てが終わり、青年はまた空に問い掛けた。

『OKだけど…やり過ぎよ?』

「あちゃー、やっぱりそうっすか。」

頭に手をやる。「ミスったなあ…」と呟きながら。

『でも構わないわ。懲りてくれたならそれでいいの。』

「…ならいいんですが。」

『で…あの子とはいっつ会っつの?』

「まあ直に会えますよ。」

『…ごめんなさい…あの時、私があなただを黒と断罪しなければ…』
声色に後悔の念が混じる。

「こつちにも落ち度がありました。えーきさんが謝る事じゃないっ
す。」

だが、青年はそれを気にしていなかった。

『でも…!』

いいや、青年は首を振り、こつ返す。

「えーきさんは俺に再びチャンスをくれた…おかげで、あの子を傷
付けずに済んだ。さらに仕事までくれたんだ…もう、えーきさんは
やる事やったんです。それでいいんですよ。」

『…ありがとう…』

「じゃ、俺はあの子に会いに行きます。…約束を思い出しました。
…300年振りの再会って言うのも悪くはないですね。」

『あの子の事…頼んだわ。』

「りょーかいつす!」

青年の顔には清々しさが溢れていた。

「…」

かつて狂気に身を任せるしかなかった彼女は何時もの通り、彼女の部屋に居た。

しかしあの時と違った事は、檻が無くなっていた事である。

そして彼女には笑顔が。

「…今日は良い事あったなあ…魔理沙と遊べたし、霊夢とじゃれ合
いできたし！」

「それは何よりだね。」

彼女は声のする方向に思わず振り返った。

…そこには、初めて来た時と同じ恰好の彼が立っていた。

黒いタキシードに、耳までかかる漆黒の髪。

紫の瞳は、優しく彼女を捉えていた。

「え…!?!」

「久しぶり、フラン。…友達はいっぱい出来たかい？」

彼女は無言で彼に抱き着いた。

「…いっぱい…いっぱい…出来たよ…皆…仲良く…してくれてるよ…!」

彼を見た彼女の顔は、涙でくしゃくしゃになっていた。

「…「ごめんね、フラン。さみしかったよね…?」

「ううん…ぜったい…絶対帰ってきてくれるって…約束してくれたから…!」

「…そうだね、約束は守らなきゃね…。」

「…ごうごういう時…ごうごう言っただって、咲夜が教えてくれた…」おかえり『…!』

「ああ…『ただいま』…!」

「かいと視点」

…俺は散々考えた。

で、俺が採った策…!

「おじゃあ…!…!」

扉を破壊！！

無理矢理にでも嫁を手に入れるっ！！

「レミリアく、フランく！！俺だー、結婚してくれー！！」

それを遠くから見ていた二人。

「咲夜…あの異界人怖い…」

ふるふる震える蝙蝠。

しかも運命が読めないときた。

彼女…レミリアの能力『運命を変える程度の能力』を以ってしても、あの異界人の運命が読めない。

「わかりました。あの異界人をしばきますね。」

隣に居たのは、銀髪のメイド…そう、十六夜咲夜である。

「ちよい待ち。俺も手伝う。」

「あ、貴方は…!?!」

フランと共に現れた青年。

「…なんとなくだが、あの異界人、危険だ。動きを止めるなら今のうちだな。」

「そうですね…妹様とお嬢様は…?」

「俺の空間断絶を使って一時的に分離する…相手が相手だ、最大レベルで分離する。」

「解りました…時間稼ぎは私に任せて下さい。」

「あいよ。」

フランとレミリアの周りを包む透明な壁。

「フラン…相手がどんな奴か解らないから、結界を張っておいた…
仮に破られる事があつたら、レミリアと一緒に逃げてくれ。」

「えっ…？でも…」

「まあ咲夜がいるから大丈夫だろうが…念のためだよ。」

「…解った！」

「おっ…あれはレミリアとフランじゃないか！神は俺に力を貸してくれている！」

かいとと真つすぐフランとレミリアの所に向かっが…

かいとに飛ぶナイフ。

「うおっ！！誰だこんな事したのは！！？」

「貴方こそ、何のつもりなんです？？」

かいとの正面に居たのは…あの銀髪のメイド、咲夜である。

「…こりゃあ辛そうだな…！十六夜咲夜のお出ましか…！」

「なんで貴方が私の名前を知ってるのかは知りませんが、お嬢様と妹様に危害を加えるのなら…」

咲夜はナイフを構えた。

「…貴方を殺します。」

感動の再会（という名のネタバレ）とVS咲夜（後書き）

次回予告！

かいとVS咲夜、戦いの行方は！？

そして不毛過ぎる戦いも今始まる！！

というわけで次回

「ロリコンとペドフェリアって似てるよね」

霊夢「いつになったら出演出来るのかしら」

作者「多分後10話後くらい、実際は解らない（汗）」

ロリコンとドブヘリアって似てるよね(前書き)

前回までのあらすじー！

・かいとVS咲夜

PV3000、4000突破！

ありがとうございます！

ロリコンとペドフェリアって似てるよね

「かいと視点」

「…やるか…!!」

かいとは武器を持つふりをした。

だって持ってないもん。

「最初から本気を出しますよ…幻世『ザ・ワールド』」

「D○○かつ！」

と言う間もなく時間が止まる。

灰色の世界で、咲夜は大量のナイフをかいとの周りに設置する。

「一度言ってみたかったの…」そして時は動き出す『「

かいとの目前には無数のナイフが。

「やばっ…!?!」

咄嗟にしゃがんだかいと。

頭上をナイフが斬り裂く。

「…危ないじゃないか!?!」

「ええ、だって殺したいもの。」

物騒だっ、とつても物騒だっ!?!

「ちつくしよ…嫁候補にこんな事、こんな状況でやりたくないんだが…!?!」

かいととは咲夜に一直線に向かう!

「真正面から突破しようとするの…?」

またナイフが飛ぶ。

だがかいはそれをかわし（途中「痛っ！」と聞こえた気がした）、
咲夜の真後ろに回り込む。

「しまった…！」

「いつけえ、俺…！」

かいはフラン達には向かわず、なんと…!!

もみっ。

「ひゃっ…！」

咲夜の胸に、手が。

「やはりな…！」

「え、ええええええええつ！！！！！！！！？」

フラン、レミリア、そして今まで空気と化していた青年が一齐に叫ぶ。

「ちょっと…貴方…何を…ひゃあっ…！」

胸をひたすらに揉むかいと。

これだけ見れば18禁である。

だが、かいととは衝撃的な言葉をさらに発する…！

「…皆…！！咲夜はなまちだぞっ…！！…そしてDだっ…！！」

…はあっ…！？

心の声が一致した。

実は。

こんな駄文に今まで付き合ってくれている読者ならご存知だろうが、多くの東方Project二次創作作品では、『十六夜咲夜』パッド装備』という方程式が成り立っている。

詳しくは某笑顔大百科なり何とかペディアで調べて欲しい。多分今から書く事より正しいから。

咲夜が初出演した作品『東方紅魔郷』では咲夜は巨乳（めーりん程ではないと推測されるが）だったのだが、それ以降の作品では（確か花塚塚？）何故か胸が紅魔郷よりさびしくなっており…

パッド装備という悲しいレッテルが貼られてしまったのである。

それ以降、パッドだかPADだか叫ぶ異界人を沢山ピチューンしてきた咲夜だが、咲夜本人も「パッドじゃなく生」と必死に訴えているのだ。

そして、かいとはそれを知っていた！

まあ異界人だからね！

さらにこんな所ではピチューンしたくない、そう考えたかいは、
咲夜の胸を揉み、生、そしてDだと表明したのだ！

「ああ…やっぱり生だったのね…」

レミリアがそう呟いた。

「…良かった…！やっと疑惑が晴れた…！」

胸を揉まれているにも関わらず、咲夜は何故か笑顔！

それだけ言われ続けていたのね…咲夜さん。

「ほんとによかった…！」

咲夜は座り込み、ひたすら喜びを見せていた。

…咲夜さん、戦闘不能です。

「なんだかよく解らんが、どうやら次は俺の出番かい？」

青年がかいとの目の前に立つ。

かいとは青年を見てまず一言。

「このペドフェリア野郎ううううううううう！……！……！……！」

青年はカチンと来てこっ返す。

「てめえに言われたくないわこのロリコン野郎があああああ……！……！……！……！」

「お姉様……ロリコンって何……？」

「フランにはまだ早いわ……」

ロリコンVSペドフェリア（かいと談、実際は違うからね）、不毛な戦いが始まった。

「さっさと消えるこの人間のクズが！」

「だったらてめえは何なんだ！？クズどころかチリか！？」

「それはチリの人に失礼でしょう！」

「お前の発言の方が失礼だろうが！！」

青年はかいとに光弾を発射する。

「あーらよつとー！」

かいとはひょいひょいかわす。

咲夜のナイフに比べれば、こんな弾は止まって見える。

「…（そろそろ頃合いか…）」

ロリコンとペドフェリアって似てるよね（後書き）

次回予告！！

空気となりつつあるあきら、ぼっちょが帰って来る！

あきら果たして理性を保つ事が出来るのか！？

ぼっちょはどうなる！？

というわけで次回

「あきらの困惑」

紫「読まないって話はもうないよね？」

橙「なんでですか？」

紫「読まないとスキマ送りするから」

橙「紫様、凄いですね！」

あきららの困惑（前書き）

前回までのあらすじー！

・咲夜はなまちち、D（かいと談）

・なぜかペドフェリアと言われた青年

・青年VSかいと

今回はかいとに休んで貰います。

かいと視点は次回！

あきらの困惑

>あきら視点<

…なんか久しぶりな気がするが…

まあ一言で現在の状況を説明すると。

…美女・美少女と混浴中です、まる！

というわけで。

…今俺は大ピンチです…

いや、嬉しくないわけじゃないんだよ？男としてはすっごく嬉しい、夢にまで見るようなシチュエーションだからね。

…でもね…

これで仮に暴走しちゃったらただの変態だからね？

誘惑は今も俺を襲っているんだ。

明らかにでかいと思われろ、というか湯に浸かっているにも関わらず少し見えてる胸の膨らみ。

…それが3つもあるとかマジ勘弁。

理性を維持するのがやっとだ。

それに、全員肌がこれまたすべすべしてそうなんだ。何、すっげー若々しいんだけど。普通に元の世界で言えば可愛い女子高生レベル。

…いや、触った事なんてないから引かないで。

そんな理性と認めたくないが性欲との狭間で耐えている俺をよそに、諏訪子さんがくっついてくる。

「あきらー!」

…彼女に悪気はないんだ…解ってる、解ってるけど…!

…ここじゃ迷惑だ…

ここで変態方面に走っちゃいけない…そしたら俺は確実に人間として終わる。

そして永遠に蔑まれるだろう。

…あれからかなりの時間が経った…今更元の世界には戻れない。

この世界で卑下されるような存在にはなりたくない。せめて、普通らしく。

「あきらー、どうしたのー？」

「逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ…！」

「なんかあきらがおかしくなってるよー？」

邪念を払え、悪霊退散！！

「私に任せて！」「どういつ時はっ！」

あれ……？幽々子さん、なんで「っ」ち？

「えいつ！」

ちよ、そんな、いきなりくっついたら……

あああああ……！！！！！！！！！！！！

<早苗の補足>

幽々子さんいわく、「すっごく可愛かったから抱きしめてみたら
血の噴水ができちゃった」とのことらしいです……。

あきら君大丈夫かなあ…？

>ぼつちよ視点<

「あ、紫さん。」

僕はあれから暫くの間休養していた。

なんでも紫さんが言うには、「半ば無理矢理に能力を覚醒させたから見た目以上に疲労している」らしい。

「どつ？調子は良くなったかしら？」

「ええ。随分楽になりました。」

そりゃ毎日藍さんや橙（ちえんと呼んでくれと本人から言われたので呼び捨て）が靈力を回復するという薬膳やくぜんを作ってくれたので、日に良くなったのだ。

ちなみに普通の異界人には靈力は殆どないが、臨死体験をしたので靈力が付いたんだと、紫さんが話してくれた。

「…紫さん。今なら…射命丸を倒せますかね？」

「正直微妙だわ。彼女は幻想郷最速の妖怪…その速さを生かした肉弾戦はかなり得意だから。」

「でも…突っ込んでくるだけなら盾を使えば…」

それに、紫はぴしゃりと返した。

「彼女は新聞記者よ？最初の一回はどうかなるかもしれないけれど、二回目以降は成功しないと思うわ。新聞記者故の観察眼は伊達じゃない。」

「そうですか…」

「でも…もしかしたら上手くいくかもしれない…」

紫がぼそりと呟いた。

「え？」

「貴方には霊力がある…仮にそれを増幅し、尚且つ攻撃の幅を広げる事が出来たら…もしかしたら…」

「そんな事、出来るんですか!？」

「攻撃の幅を広げるといふのは貴方次第だから、頑張ればどうにかなるかもしれないけれど…霊力増幅はかなり骨が折れるわ。」

「どうやるんですか…!？」

「霊力増幅に関してはある人の力を借りなきゃいけないわ…だから此処じゃ出来ないんだけど…でも攻撃手段を増やすのなら出来るわ。」

「攻撃手段…」

「その前に、貴方にスペルカードとは何なのかという事を教える必要があるわ…見るだけでいいから。」

紫は一枚のカード…ちょうどトランプくらいの大きさのカードを取り出した。

何か絵が描かれている。

あきらの困惑（後書き）

次回予告！

青年の名前がやっと明らかに！

能力とかも明らかに！

それでもはや悪者のかいとはどうやって青年に立ち向かうのか！？

性欲と性欲と夢を心に秘め、今、かいとは覚醒する！

というわけで次回

「『エデンの林檎』^{エデンズシード}1」

作者「今回は中二病患者の本気のようなものと一部パクリがありますので中二病的展開が嫌いな方はスルーをしてください…」

ただスルーされると青年の名前が解らなくなりますのでざっとでも読み流して下さるとありがたいです。」

『エデンの林檎（エデンスシード）1』（前書き）

前回までのあらすじー！！

・あきら、鼻血出して気絶

・スペルカードについて語られた

今回は中二病的展開MAXなので嫌いな方はスルーしてください。

『エデンの林檎（エデンスシード）』1

>ぼつちよ視点<

カードを見せて、紫の説明が始まる。

「これがスペルカードよ。本来はいざこざを解決するための手段として使うんだけど、今はどこでも使えるわ。で、これの良い所。それは自分の霊力や妖力を消費せずに発動出来る事よ。」

「自分の霊力を消費せずに…!？」

そりゃ凄い話だ。

「ただし、事前にカードに力を込めてなきゃいけないわ。それに貴方が小町との戦いで使ったものより威力や防御能力は落ちるの。」

「それは解りますが…」

じゃゲーム版東方の皆さんは…真の本気じゃないのね…

それで弾幕いっぱいとか…どういふことなの…

「一つ注意ね。スペルカード一枚で一つの技を発動出来るんだけど、使い捨てよ。」

つまり、今貴方がスペルカードで盾を出して、何かしらの理由で盾

を消した場合、次の戦いではもう一枚スペルカードを使わないと盾は再利用出来ないの。だから盾とか何回か使いそうなものは常にスペルカードを複数持つておくといいわ。

もう一つ。一回の戦闘で同じスペルカードは複数使えないから気をつけてね。

ただ、イメージによる能力発動によるものなら何回でも使えるわ。霊力は消費するけど。」

「つまり…」

・能力発動には二つやり方があって、自分のイメージで創り出すのと、事前にスペルカードに封印しておいてそれを使うのがある。

・スペルカードは使い捨て、よく使うスペルカードは複数持つておくことよ。

・一回の戦いで同じスペルカードを複数使う事は出来ない。ただしイメージによる同じ効果を発揮する能力発動は可能。

「そういうことよ。なんだ、物分かりいいじゃない。此処まで解ればもう大丈夫。後は…」

紫は何も描かれていない無地のカードを取り出した。

「これに貴方の力を込めてやればスペルカードの完成よ。カードを持ってイメージするだけでいいわ。」

ぼっちょは無地のカードを持った。

「…」

目を閉じ、あの時の盾をイメージする。

「…もういいわ、目を開けてみて。」

ぼっちょは目を開けてみた。

…無地だったはずのカードに絵が描かれている。

銀色の盾の絵だ。

「…天盾『八咫の鏡』…?」

「これでスペルカードの完成よ。」

紫は微笑んだ。

…まるで親のようだな、ぼっちょはそう感じた。

「かいと視点」

「…そのロリコン異界人、逃げるなら今のうちだ。」

「逃げる訳ないだろペドフェリア!!」

「…OK。じゃ死ね。」

青年は一枚のカードを取り出した。

「切札『無時空間・虚空』」

かいとの周りに突如現れた無数のナイフ。

「なっ…!!?」

「行け」

ナイフが一斉にかいとに向かう。

「やべっ…!」

かいはしゃがんだりしてかわすが、ナイフが掠り、皮膚が切れた。

「さて、最後の勧告だ。諦める。」

「…諦めるかよ…!」

この台詞だけとれば立派な主人公だが…動機が不純過ぎる主人公と
いうのも考えものである。

「どこまでも頑固な奴だな。よかろう…せめて一撃で殺してやる。」

青年はさらにもう一枚、スペルカードを取り出した。

「最後に教えてやる。俺の名は双月奈落^{そうげつならく}。…地獄から蘇った者だ。
神剣『ラグナロク』」

右手に握られるまがまがしい剣は、斬るべき者を映す。

「（なんだ…ありやあ…！？）」

一瞬の気の揺らぎが命取りになる、奈落はかいとの後ろに現れた。

「…斬る。」

これで完全勝利。

背中を斬って、奴が力尽きるのを待つか。

奈落は剣を振るった。

ガキン！！

「何…！？」

なんと剣が弾かれた！

「へへへ…切り札は最後まで取っておくものなんだぜ？」

違う、結界か！

奈落は距離を取る。

「（良かったぜ…距離を取ってくれて！）」

かいたにも、ほっちょと同じ覚醒が起きていた。

ただし…

「たった一発こっきりだぜ…！」

かいは奈落に手を向けてこう叫ぶ!!

「俺にも必殺技はあるんだ!! 拒絶『エデンの林檎』エデンズシード!!!!!!」

かいは自分の手から光が溢れる事を視認した。

目の前が、光に包まれた。

『エデンの林檎（エデンスシード）1』（後書き）

次回予告！

続編「エデンスシードエデンの林檎」2

奈落「やっと俺の名前が…」

フラン「やっと名前呼べるねっ！」

かいと「このペドフェリア野郎が…！」

奈落「ぶっ殺すぞロリコン…！」

『エデンの林檎（エデンスシード）』 2（前書き）

前回までのあらすじー！

・かいとに謎の力がっ！

・エデンスシードって何よ？ 今回ここに触れます。

中二病的展開にもう少しお付き合い下さいm（・）m

『エデンの林檎（エデンスシード）』 2

> 奈落視点<

「あの異界人……!!!」

奴が能力持ちの異界人だったのも驚きだが、それ以上に最後の一撃……拒絶『エデンの林檎』の威力が余りにも大き過ぎた。

俺は咄嗟に咲夜、フラン、レミリアに空間断絶（一時的に空間を切断出来るようにし、安全を確保する結果）をし、さらにエデンの林檎による爆発を無理矢理反らす為に自身の能力……空間を操る程度の能力』を発動した。

「うおおおおおおお……!!!……!!!」

…結果から話そう。

確かに爆発の威力を減らす事には成功したが…

紅魔館の半分が吹き飛んだ。

幸いにも、吹き飛んだ建物には人がいなかったらしい。

…つまり怪我人は居なかった訳だが…

「はあっ…はあっ…」

俺の右腕が焼けた。

…どうやら治療が必要みたいだな。

「…フラン達は…？」

俺は結界を張った方向を見る…

結界は破壊されていなかった。

つまりフランやレミア、咲夜は無事だ。

だが問題は…異界人の行方だ。

…しかしその疑問もすぐに解決し、異界人は仰向けになって倒れていた。

容態を確認する…脈はどうやら正常、つまり気を失っているだけらしい。

「…ふう…」

誰も酷い怪我じゃなくてよかった。

ふと奈落はある思いに駆られる。

…仮に此処が俺とあの異界人以外に誰もいない空間だったとしたら、俺はあのエデンの林檎を回避できただろうか。

…今までかなりの修羅場をくぐってきたつもりだったが、ここまでの爆発は見た事がなかった。

「っつー!!」

右腕に痛みが走る。

…どつやら俺はかなりの重傷のようだ。

俺は結界を解除し、壁の方にふらふらと歩き、壁にもたれる。

「…また永遠亭に行かなきゃいけないみたいだな…」

俺はゆっくりと歩き始めた…

瞬間。

「こんにちは。」

そこには傘を挿した紫の服の女性が。

「…紫か。」

「酷い怪我ね…大丈夫なの？」

「気にかけてくれるのはありがたいが、なら永遠亭まで連れて行ってくれ。ご覧の通り重傷だからな。」

「…解ったわ。」

紫は俺と一緒に永遠亭に行ってくれた。

…多分紫が居なければかなりまずい状態になっていた…ここは紫に感謝だな。

「はい、手当てだけはしておきました。」

「済まない。」

「しかし、貴方に怪我をさせる者が居るなんて珍しいわね…紫ではなさそうですし。」

俺の右腕を治療してくれた女性…迷いの竹林にある『永遠亭』という建物に居る賢者…八意やじこる永林えいりん。

紺と赤の帽子、同じ模様のワンピース。

銀髪である。

「何があったのです?」

「実は…異界人の攻撃を受けてこうなった。」

「異界人…？そんな力を持った人が居るのですか？」

永林は疑うような表情をする。

「ああ…それについて質問だ。『エデンの林檎』という言葉聞いた事があるか？」

「エデンの林檎…？まさか、エデンズシードの事ですか？」

どうやら心当たりがあるようだ。

「ああ。確かに異界人はそう言っていた。」

「なら貴方が怪我するのも解ります…エデンズシード…まさかこの幻想郷にもあるなんて…」

「エデンズシード…それって何なんだ？」

「エデンズシード…それは一つの世界を吹き飛ばしかねない力の事です。エデンズシードを完全に扱える者は神に最も近いと言われます。」

「だが異界人はそのエデンスシードを必殺技だと言っていた…どう
いうことなんだ？」

「…ならばその異界人の能力が確定します。月にも昔、エデンスシ
ードを扱えた者がいました…その者の能力は『全てを拒絶する程度
の能力』…自分にとって不利な事をなかつたことにする能力です。
ただし、余りにも強大な力故に一日一回しかこの能力は使えず、エ
デンスシードは五日に一回しか使えないと、その者は語っていまし
た。」

世界を吹き飛ばしかねない力…エデンスシード。

それが何故にあの異界人に？

「そんな力をばんばん使われたらやってられないな…対策はないの
か？」

「…あるにはあるのですが…」

永林はそう言ったきり口を閉じてしまった。

『エデンの林檎（エデンスシード）』 2（後書き）

次回予告っ！

また続編『エデンの林檎^{エデンスシード}3』

永林「このままじゃ読者の皆さん飽きますよ？」

作者「次で終わりなのでもう少し待って下さいm(・)_・(m」

『エデンの林檎（エデンスシード）』 3（前書き）

前回までのあらすじー！

・どうやらエデンスシードには制約があるらしい

・紅魔館半壊

…今回で中二病的展開にはお別れですのであと少しお付き合い下さい
い…

『エデンの林檎（エデンスシード）』 3

> 奈落視点 <

「あるにはあるのですが…それは、エデンスシードの力を制限することです。」

「しかし、俺はその異界人じゃないんだ、エデンスシードの制限なんてできないぞ…?」

「だから、エデンスシードを扱う本人に制限させるのです。そうすれば被害は大きくなりません。」

「…それで上手くいくのか…?」

「上手くいきますよ。きっと。」

「…だがどうやって…」

> かいと視点 <

「…っ」

周りが破壊され尽くした紅魔館を見つめるかいと。

「すげえな…『エデンの林檎』。…っと、それより俺の嫁は…」

かいとは咲夜、レミリア、フランを探す。

「…無事か…」

3人は爆発の影響か、気を失っていたが無傷だった。

「…そしたらっ！！」

かいとは咲夜に近付く。

「…まずは布団で休ませるべきだろう。」

かいとは咲夜を背負い、紅魔館を彷徨う事になった。

奇跡的に布団を見つけ、レミリア、フラン、咲夜を寝かせ、かいと
は座り込んだ。

「ふう…流石に疲れるな…」

…。

エデンの林檎を発動した瞬間、かいと頭の頭に浮かんだ風景。

空から何か来る…それだけしか覚えていないが、妙に気になった。

…何なんだろうな、あれは。

かいと目は閉じた…

> 第三者視点 <

「ここだ…」

「慧音、ここに何かあるのか？」

「…異常な力を感じる…それが何かを確かめたいだけ。」

「解った。行こうか。」

「この人から力を感じる…妹紅、彼を連れていける？」

「ああ…いけるけど、ほんとにこいつなのか？」

「…解らないわ。でも可能性は高い…」

「…まあ慧音が言っんならそうだろうけど…」

妹紅と呼ばれた少女はかいとを抱えて、鳳凰を呼ぶ。

「慧音、いつでもいけるよ。」

「（レミリア…フラン…咲夜が彼にやられたと言っの…？少なくとも紅魔館が破壊されたのは彼の仕業だとは解るけど…）」
慧音は布団に横たわっている3人を見て、そう感じた。

「慧音？」

「あ、ごめんなさい、行きましょつ。」

>あきむ視座<

「…」

「そうなの！ちょっとやって貰いたい事があるのよ！」

「やって貰いたい事…？」

「あのね、私の家に庭師がいるのよ…妖夢って言うんだけど、彼女…真面目過ぎて…真面目なのは良い事んだけど、たまには息抜きしないとつか変になっちゃうわ。だから、あきら君に会わせてみたいの。」

…俺のような奴に会わせてやりたいって…幽々子さん優しいなあ…

「真面目過ぎるって…どういことなんです？」

「あのね…融通が効かないって言えば解るかな？将来的にも損ですよ、そんな性格。」

「ああー…」

いたな、俺のクラスにも。

くそがつく程真面目過ぎて、近寄りがたい雰囲気を出している奴が。確かに損だ、特に人間関係を円滑にするためには、なるべくその性格は出さない方がいい。

「あ、そろそろ着くよー！」

見ると、明らかに由緒正そうな建物があった。

「すみません…もう大丈夫なんで。」

かなり距離があつたかもしれないのに、疲れた様子一つも見せない幽々子に、あきは申し訳なく思った。

「ほんと？無理はしちゃ駄目よ？」

「はい。でも男がいつまでも女性に背負われてるわけにはいかないのよ。」

「…別にいいんだけどね…」

「？なんか言いました？」

「なんでもないよ！さ、行きましよう！」

『エデンの林檎（エデンスシード）』 3（後書き）

次回予告！

やっと3人それぞれに触れる時が！

白玉楼であきらに待っているのは！？

ぼっちょは新天地へ…？

かいとは妹紅に連れられ何処へ！？

というわけで次回

「一段落っ！」

慧音「そろそろ目次も2ページ目に移りますから注意してくださいね。」

作者「はい！」

妹紅「お前がそうしたんだろ……」

一段落っ！（前書き）

前回までのあらすじー！

・かいと、慧音たちにさらわれる

PV6000、ユニーク1000突破！

ありがとうのじゅんごです

一段落っ！

「あきら視点」

「あ、幽々子様！」

扉の前には刀を差した白い髪の少女が立っていた。

後ろでふわふわしてるのは…幽霊？

「妖夢っ！」

幽々子さんが手を振る。

「あれ？お客さんですか？」

「そうなの！異界人のあきら君！」

「あ、始めまして。」

頭を下げるあきら。

「…」

だが、妖夢からの返事がない。

「?どうしたの?」

「いい加減出て来たらどうです?」

「…あやー、ばれちゃいましたねえー。」

影から現れた黒い翼の女性。

カメラを構えていた。

「…射命丸文…!」

「あいつが…!?!」

ぼっちょの敵、射命丸文。

「見つかったやいでしたが、いいものが撮れました…明日のネタになりそうです。」

「ちょっと待ちなさい。」

幽々子の冷静な対応。

「これは幽々子さんじゃないですか！珍しいですね！」

「取材許可は取ったのかしら？」

「許可がないから、こうして外から撮影してるんじゃないですか。」

「…射命丸文、あなたはもう一つ忘れてる事があるわ。…お土産
!?!」

「「「…え?」「」」

文、あきら、妖夢の声が一致した。

「取材するなら、取材される人にお土産要るでしょ!」

「…あー…」

そこなんですか。盗撮とかじゃなくて、お土産なんですか。

「礼儀つてものをちゃんとしないと新聞記者として生きていけないよ!」

「は、はあ…」

文はまさかの説教にどうしていいか解らない様子だ。

「というわけで出直しなさい!今度はちゃんとお土産持ってきて!」

「…はい。」

あ、完全に出鼻挫かれた。

文はとぼとぼと帰って行った…。

…これから、文は幽々子さんに取材を申し込む際はお土産（という名の美味しいもの）を持ってくるようになったのはここだけの秘密である。

>かいと視点<

「うおっ！寝ちまったー！」

俺は慌てて跳び起き…

ありゃ…？

ここ…何処…？

そして誰もいない…？

「…家の中みたいだが…人は…？」

俺は部屋を出て人を探す事にした。

「もこたんかあいよもこたん…はあはあ…」

「慧音！？何を！？…ひゃっ、飛び付くなあ！！」

なんか声が聞こえる。

…よし、行ってみるか。

俺は声のする方へと近づき…

「すみません…ってえっ！？」

ドアを開けた瞬間の映像がこれだ。

「
…」

「
…」

しばらくの沈黙。

状況は…

慧音・妹紅…素っ裸
かいと…事故

「す、すみませんっした!!」

光速の土下座。

「…まあ、寝てた人を放っておいたのが悪いね…さ、早く出て。今
回は許してあげるから。」

「く、く、い…」

かいととは早めに出た。

「絶対…怒ってる…よね…?」

かいととは正直、死を覚悟した。

しかし、殺される事はなかった。

> 妹紅の気持ち<

別に見られても滅るものじゃあないからいいや。

> 慧音の気持ち<

裸見られたより寧ろ妹紅とじゃれ合ってたのを見られた方が恥ずか
しかった…変だと思われたよね…? ?

>ぼつちよ視点<

「うん、ここまで出来れば当分スペルカードは作らなくていいと思
うわ。」

ぼつちよは大量…合計30枚のスペルカードを創り…

かなり疲れた。

内訳説明

天盾『八咫の鏡』…8枚

短守『ミニミニ結界』…5枚

矛盾『不殺の剣』…3枚

さらに自分のイメージで創りだし…

矛盾『守らずの盾』…3枚
護法『神秘の護り』…5枚
矛盾『盾爪』…3枚

護法『アンカーシールド』…3枚

「はあ…はあ…」

「でもこれだけでは足りないわ。次は霊力増幅よ。」

「そう…ですね…」

「紅魔館に行ってみなさい。そこにパチュリー・ノーレッジという人がいるの。彼女に霊力増幅のやり方を教わるといいわ。」

「…解りました…」

「でも、今日は休んで。万全な体調で受けて貰いたいから。」

「…はい…！」

一段落っ！（後書き）

次回予告っ！！

まさかの外伝！

あの男の過去が少し明らかになる！

というわけで次回

「記憶 300年を越えた約束 1」

かいと「ありゃ？俺の出番ないの？」

『外伝』記憶 300年を越えた約束 1（前書き）

これは外伝です。

本編とは関係ありません…

ある男の過去が描かれています。

『外伝』 記憶 300年を越えた約束 1

「あの…」

紅い瞳をした紫の髪の兔が、彼に話しかける。

「ん…？」

「あなたと師匠…それに姫様はお知り合いのようですが…」

「ああ。そういやまだ説明してなかったな…少し長くなるから、俺の横に座って話を聞いてくれ。」

軒端に座る兔の少女。

「あれは350年くらい前の事だ…」

俺は350年くらい前にこの幻想郷に来た。

何故ここに呼ばれたのかはよく解らないが、どうやら俺には何か力があったらしい…八雲紫がそう言っていた。

立派な異界人だから右も左も解らなかったが、心優しい妖怪たちが俺を助けてくれた。

…俺は人間にも関わらず。

ある日、俺は突然能力に目覚めた。

というのも「長く歩くのが面倒だからどうにかなんかないかな」という何の意味もない思いがなぜか現実になったからだ。

博識な妖怪が教えてくれたのだが、俺の能力は「空間を操る程度の能力」

…自分が居る空間を自在に操る事が出来る能力だ。

俺は空間を操り、いろんな所を訪れた。

…白玉楼…紅魔館…とにかくいろんな所に行つては人々の営みを見ていた。

…皆生きてるんだな…俺はそう思った。

…俺はある事を考えた。

…俺は誰かに助けて貰うだけで、誰かを助ける事はなかった。

どこかで誰かの助けになりたい。

いつの間にか、俺は人を助ける仕事をするようになった。

…仕事に慣れ始めたある日の事だ。

俺は仕事を終え、たまたま紅魔館の近くを通りかかった。

…妙な感じがしたんだ。なにか解らないが、とにかく妙だった。

俺は紅魔館に入って行った…

誰かが泣くような声がした。今思えばただの気のせいだったかもしれない。

俺は声のした方向に歩いていった…。

…そこには、檻に閉じ込められた幼い娘がいた。

「…いつも此処にしか居られなくてつまらない。」「しきりにそう呟いていた。

…もう解るだろう、俺が見たのはフランドール「スカーレット」…狂気と戦う少女だ。

俺はいてもたってもいられなくなって、彼女に会いに行った。

檻に閉じ込められているんだから、真正面から行っただって無駄だといふのは薄々予想出来た。

此処で俺の能力が役に立った。

空間を操り、俺は彼女のもとに行った。

彼女は暫く俺に気付かなかった。

俺が「やあ。」と声をかけてようやく気付いたくらいだ。

彼女は震えていた。

「あなた…誰…？」なんて聞くから、素直に自己紹介して彼女の警戒を解こうとした。

彼女は段々とだが、俺に自分がこうなった理由を話してくれた。

自分は狂気に喰われ、何もかもを破壊したい衝動に駆られるんだと。

でも、破壊してもなにもスッキリしない。

それを食い止める為に、自分の姉は私を此処に閉じ込めたんだと。

…だが、俺はそれは間違っていると考えた。

俺のように、色んな人と関われば変われるかもしれない…いや、きつと変わる。

だから。

俺は空間を使い、彼女を外に連れ出したんだ。

「えっ…でもフランはずっと閉じ込められてたんじゃ…!」

兎のその質問に、彼はこう答えた。

「…それはある事件が原因でね、そういう事にされたんだ。」

あれから俺とフランは毎日のように外で遊ぶようになった。

最初こそフランは俺を殺す気で来たが、当時の彼女の意識じゃそれが遊びだったんだ。

でも、それは段々となくなっていった。

…けれども。

ある日、彼女を襲おうとした妖怪たちが現れた。

…当然俺は彼女を救う為に妖怪たちを追い払った。少々手荒な事を
してしまっただが。

だが、それが警官に見られていたらしく…

俺は現行犯で捕まった。

『外伝』記憶 300年を越えた約束 1（後書き）

次回予告！

「『外伝』記憶 300年を越えた約束 2」

全3部構成であります！

記憶 300年を越えた約束 2（前書き）

外伝第2部です

PV7000、ユニーク1000突破！感謝です

ご感想やご要望などありましたらどうぞ！

記憶 300年を越えた約束 2

現行犯で捕まった俺は、事情聴取を受け、全て正直に話した。

フランが多数の妖怪に襲われた事。

フランはまだ不安定だから、俺が代わりに妖怪たちを追い払った事。

だが、それは聴き入られず、ついに俺は裁判にかけられることになった。

「…確かに俺は妖怪たちを怪我させた…だがそれはフランを守る為だ！怪我させたくてしたんじゃない！」

…俺の裁判の担当は四季映姫・ヤマザナドゥ。

当時彼女は裁判官の頂点、最高裁判長になったばかりだった。

「判決を言い渡す。」

「被告人、あなたは黒だ！」

「被告には懲役300年を言い渡す!!」

…まさか他人を守るのが有罪だとは思いませんでした。

俺は地獄の檻に幽閉され…

ひたすら酷使された。

正直、地獄での生活は思い出したくもない。

が…少しだけ思い出す。

能力封印の為に首輪をさせられるのだが、それでいつも監視されている。

…食事は一日に白飯一杯あればかなり贅沢だ。

基本的に飯粒10粒程度が相場。

それ以外は何もなし。

長時間の過剰労働。

飯には期待出来ない。

そんな中での生活は最悪極まりないな。

…ただ、罪人に会いたいという面会依頼が来た時だけ、飯が多く与えられ、服装などが綺麗になる。

…俺にも来た。

フランからだった。

フランは自分を責めていたようだ。

でもフランに罪はない…だから、俺はフランを励ます為にこう言っ

たんだ。

「大丈夫だよ、俺は必ず帰るから。…だからそんなに悲しまないでくれ。」

俺がいなくてさみしいだろうけれど、フランにも友達が出来ればさみしくないよ。」

「…約束だよ？絶対帰ってきてね…？」

「ああ。約束だ。」

…そうすれば、フランを少しでも元気付けられると思ってな。

だがそんな俺に待っていたのは…

フランが捕まったという知らせだった。

聞いた話によれば、フランは友達を守るべく力を使い…
相手を殺してしまったらしい。

「…あの時の俺じゃないか！」

俺は何も出来ない自分がとても悔しかった。

本当に悔しかった。

俺は無力だ、フランを助ける事すら出来ない。

…そうなるなら、俺は死んだ方がまだマシだ、そう思って何度も自殺しようとした。

…だが、その度にフランの笑顔が浮かんできた。

俺が死んだらフランはどうなる？

…フランの事を考えれば死ぬに死に切れなかった。

何日経っただろう。

ある日…

突然地獄に現れた四季映姫・ヤマザナドゥ。

地獄の監視員はあたふたしていたが、四季映姫はそれを無視して真っ先に俺のもとに来た。

「…双月奈落ね？」

「…はい。」

「あなたに頼みがあります。」

俺は四季映姫に連れられ、檻を出た。

地獄と裁判所を繋ぐ通路があつて、そこで俺は四季映姫にこう言われた。

「…あなたに一回だけチャンスをあげます。…いや、貰って欲しいのです。」

「何故です?」

ここで、俺は予想しない言葉を聞く事になった。

「…あなたと…そしてフランドール、スカーレットの二人に、無実の可能性が出てきました。」

…私はあなたに間違つた判決を下してしまった…しかし、一度下してしまつた判決は覆せない…でも、たった一つだけ、出来る事があるわ。」

四季映姫は一枚の紙を取り出した。

「あなたに依頼があります、フランドール「スカーレットをどんな手でも良いので救って来て下さい。」

「…ですが俺は能力が使えない…それに魔力もありませんよ？」

「大丈夫です。魔力に関してはこれを…」

四季映姫は俺に小さな袋を渡した。

「これは枯渴した魔力を復活させる薬です。ただし、10分が限度です…そして首輪も、10分限定で解除します。タイムリミットは10分…それまでにどんな方法でも構いません、フランドール「スカーレットを助けてあげて下さい。」

「…助けられたらフランはもう無罪放免なんだろうな？」

「はい。裁判長さえぶっ飛ばせば無罪確定です。後は私がどうにかします。」

「…乗った。四季映姫様も、派手なのが好きなんですね。」

「映姫でいいわ。…これは私の罪滅ぼし…あなたに不幸を与えてしまったことへの…」

映姫さんは辛そうな顔をしていた。

「いいや、映姫さん。それは違うね。」

「…え？」

驚いた顔をした映姫さんに、俺はこう言った。

「…あの子に希望を与えられるんだ、これ程良い役回りはないですよ。」

「…切札を見せて、最高のシヨールを見せますよ。」

記憶 300年を越えた約束 2 (後書き)

次回で外伝(一時の)最終回!

「記憶 300年を越えた約束 3」

キャラ崩壊の恐れあります…(^ - ^) ;

記憶 300年を越えた約束 3 (前書き)

外伝最終回！

… キャラ崩壊、かなりぶっ飛んでますのでご注意下さい…

PV8000突破です、ありがたや…

映姫さんの協力もあり、俺はフランを助けられそうな体調になった
…準備は万全だった。

「裁判は明日：私が合図をします、同時にフラン救出作戦：『コー
ドN・N』を開始してください。」

「了解。」

「なお、合図はあなたに渡した通信機を通じて行います…存分に暴
れて下さい…」

「はい……」

そして翌日。

『…奈落…聞こえる?』

「はい。オールグリーン。」

俺は裁判所の内部に居た。

『では合図をします…合図を聞き次第突入…裁判長をぶっ飛ばして下さい。』

「了解。」

映姫さんは傍聴席からその時を待っていたらしい。

「…被告人、前へ。」

フランが前に出される。

「被告人に判決を言い渡す。被告人は…」

そして『その時』は来た。

「GO！」

「双月奈落、コードN・Nを開始する！！！」

薬を飲み、扉を破壊した！

「なんだお前は！？此処は裁判所だぞ！？」

「裁判所？知るか。」

近くにあった壁を能力で破壊し、俺はこう言った。

「今の俺はとーっても機嫌が悪いんだ（ニカツ）」

そして俺は駆け出す！

近くに居た警備官が一斉に俺に攻撃を仕掛ける！

「空間断絶!!」

警備官は何か見えない壁に当たったかのようにぐしゃっと音を立てて気絶する!

「ついでだ...!!」

傍聴席に居た人達に影響がないよう、空間断絶をかけて隔離する!

「ボサツとするな!被告人を連れていけ!!」

「させるかよ...!!」

強引に引っ張られるフランの両脇目掛けて袖に仕込んでおいたナイフを投げる!

両脇のフランを引っ張っていた二人が同時に倒れる!

「フラン、大丈夫か!?!」

「え！？あ…うん！」

「今枷を外す！ちょっと待ってくれ！」

空間能力を応用し、枷を破壊する！

「はいよ！これで自由だ！」

「あなたは…！？」

フランの声に、俺はこう返した。

「通りすがりの英雄です、と！」

「貴様…！許されると思っているのか！？」

裁判長が、怒気を交えて叫ぶ。

「許される？ハッ、それはテメエが決める事じゃねえ！」

ビシッ!!と裁判長を指差し、決め台詞!!

「俺（と映姫さん）が決めるんだ!!」

「…よかるう、ならば戦争だ」「消えろや!!」「」

裁判長を殴り飛ばす!!

「待て!私の台詞が」

「さっさと決める!フラン、レーヴァティンを!!」

「うん!!」

フランがレーヴァティンを創り出す!!

「映姫さん、ぶっ飛ばすなら今の内っすよ!!」

「解ったわ！罪符『彷徨える大罪』！！」

大量の弾幕が、裁判長を襲う！！

「フラン、レーヴァティンをこっちに！！神剣『ラグナロク』！」

レーヴァティンとラグナロクを携える奈落！！

それはまさに…

処刑人！！

「や…やめてくれ…私はまだ…」

恐怖に怯える裁判長を、奈落は歪んだ笑みで返す！

「無理！既にテメエは真っ黒だ！ルーミアも真っ青なくらいなあ！
」

「ひいっ！」

「判つ、決つ!!!」

レーヴァテインで斬り上げ、ラグナロクでさらに重ね斬り!!

「テメエは、死刑!!」

ピチューン!!

「ついでにもつーつーフラン、君は白だ!!」

「..」

「…もう行っちゃうの…?」

フランがさみしそうな顔をして聞く。

「ああ…俺は罪を償わないといけないからね。」

「…私、待ってるからね!ずっと待ってるからね!」

「ああ!友達、いっぱい作れよ!」

「うん!」

フランを見送った後、奈落は映姫のもとに戻っていった…

「奈落…これからのことなんだけど…」

「フランを助けられたんだ…俺はもう幸せですよ。」

奈落に、さらに幸せが届けられた。

「いえ…実はね…あなたも無罪が確定したの。」

「無罪!?!」

嘘じゃないよね!?!

「妖怪に対する傷害に関しては無罪、刑もなくなるわ。…そのかわり…」

心なしか映姫が笑った気がした。

「そのかわり?」

「裁判所を見事にぐちゃぐちゃにした事に関しては紛れも無い黒だから、…と言っても私もしちゃったんだけど…
裁判所の掃除、そして向こう150年の私の部下…『代理処刑人』
としての仕事に就く事を命じます。」

「…つまり？」

「もうしばらく私のお世話をしてね」

映姫は満面の笑みで言った。

「…はい！」

記憶 300年を越えた約束 3（後書き）

次回予告！

ついに本編再開！

ぼっちょ in 紅魔館！

新たな力を得る為、ぼっちょは紅魔館の扉を叩く！

というわけで次回

「紅魔館の人々」

咲夜「ありきたりなタイトルですね…」

作者「文章思い付くのにタイトル付けるの難しいんです」

レミリア「じゃ私のカリスマっぷりを10連続で語りなさい」

作者「無理っす…」

紅魔館の人々（前書き）

忘れかけた本編のあらすじー！

・ぼっちょは紅魔館に行く事に

・あきらは白玉楼

・かいとは妹紅と一緒にてけーね先生が言ってた

∴ 血迷った作者の一日3回更新！

いや∴明日ちょっと忙しいので更新出来るかどうか微妙なもので∴

紅魔館の人々

>ぼつちよ視点<

翌日。

「紅魔館に行く際の注意ね。まず、門には美鈴という門番がいるわ。…彼女、寝ぼけて襲い掛かってくるかもしれないから、油断はしないで。」

もう一つ。…フランドール「スカーレットからは全力で逃げる事。今のあなたじゃ瞬殺されるわ。」

最後に。怪しい行動はしないこと。紅魔館の主、レミリア「スカーレットに嫌われたら死ぬと思いなさい。」

「…はい!」

「じゃ、近くまで送ってあげるわ。」

スキマ世界が開かれ、ぼつちよと紫は中に入って行った…。

「ここでお別れね。」

紅魔館の近くで、紫は言った。

「今までありがとうございました。」

ぼっちょは深々と頭を下げた。

「いえいえ、私はやるべきことをやっただけよ。…気をつけてね。」

「…はい！」

紅魔館の門の前。

ぼっちょは恐る恐る門をくぐるうとしていた。

とうとうのも、美鈴は…

すーすーと寝ていた。

「…どうしよう…」

「どうなされましたか？」

そこに居たのは…

「私は十六夜咲夜。この紅魔館のメイドを務めております。」

「あ…僕はぼつちよって言います…あの、パチュリー・ノーレッジ
さんに会いたいんですが…」

「パチュリー様に…？」

不思議がる咲夜。

「霊力増幅のやり方を知っていると聞いたので…」

「そういうことでしたか。では案内致します。…少々お待ち下さい。」

直後、美鈴にナイフが刺さり、「痛いですよ咲夜様！」という悲痛な言葉が聞こえた。

…え…？

紅魔館つて…こんなにボロボロだったっけ…？

「ぼつちよ様、実は数日前に紅魔館に謎の異界人が入り込み…その異界人が紅魔館を爆破したのです。」

異界人…か。

僕もそうなんだけどな…

「最初にお嬢様にお会いしてもらいます。」

「はい。」

大きな扉を、咲夜は叩く。

「お嬢様、お客様です。」

扉の向こうからすぐに返事がした。

「解った、入れ。」

扉が開き、中に入ると、小さな黒い翼：蝙蝠のような感じの翼だ…を生やした少女がいかにも豪華な椅子に座っていた。

まるで寝具のようなドレスと帽子。

ドレスと帽子は淡い桃色だ。

眼は紅く、髪は水色。

「客よ…私はレミリア＝スカーレット…この紅魔館の主。客の名は？」

明らかに僕より幼いが、その視線は高圧な大人以上に鋭い。

「僕はぼつちよと言います…外の世界から来ました。」

「…つまりぼつちよ、お前は異界人…そういうことか。」

「そうなりますね。」

「…ならば一つ聞く。つい数日前だが…異界人がこの紅魔館に入り込み…紅魔館を爆破するという愚行を行った。問題はその異界人だが…調べさせた所、どうやら名前はかいとと言うそうだ。」

「えっ…!?!」

なんでかいとが紅魔館を!?

レミリアは口の端を吊り上げ、こつ続けた。

「知っているようだな…ぼつちよ、かいとについて洗いざらい話して貰おうか…拒否権はないぞ?」

…正直に話すしかない。

「…かいとは僕の友達です。それ以外は何も言う事がありません。」

「…ふむ。どうやら嘘はついていないようだ…気に入った！咲夜、ぼっちょをもてなしてあげなさい！」

「かしこまりました。お嬢様、パチュリー様はどちらに？」

「図書館の奥で魔導書の解析をしてると思っわ。」

「ありがとうございます。」

咲夜とぼっちょは部屋を出た。

…レミリアはふと考えた。

「（ぼっちょ…彼も、かいと同じ『境界から外れた者』…ならば、彼は出来るだけこちら側に入れておきたい…そうすれば、こちらは圧倒的に有利になる…暫くは彼のご機嫌取りね。）」「

紅魔館の人々（後書き）

次回予告！

あきらの白玉楼生活！

白玉楼での生活はどんなものなのか！？

次回「あきら、イノベーターに」

あきら「ならないからねっ！？」

作者「いいじゃんなくても」

あきら、イノベーターに(前書き)

前回までのあらすじー！

・ぼっちょは紅魔館に

・かいは知らん(おい!)
次回に回しますのでお待ち下さい…

PV9000突破やつふいー

いつもありがとございますー！

10000突破したら何か記念に書きます！

あきら、イノベーターに

>あきら視点<

白玉楼に入ってからというものの、俺は何をしていいのか解らず…
ぼーっとしていた。

この白玉楼の庭を綺麗にしている人は魂魄妖夢さん。
なんでも庭師兼幽々子さんのボディガードらしく、庭を綺麗にし
ては木刀を素振りして身体を鍛えている。

妖夢さんいわく、「背中にふわふわ飛んでるのは私の半身」らしい。

250

一方幽々子さんは…

「すー…すー…」

お茶をすすりながら眠るといふ器用な事をしている。…いや、湯飲
みを手を持ったまま眠るのなら解るのだが…

「あの一…妖夢さん…」

「うんっ？どつっ…したの…？」

素振りしているから言葉が途切れ途切れだ。

「あの…俺…何をしたら…」

「あきらはそのままいて。そのうち幽々子様から何か来ると思うから。」

実は妖夢さんと俺は見た目から見てほとんど同じ年のようだ。

実際は解らないが…

だから妖夢さんは俺をあきらと呼ぶ。

「いや…俺すっごく暇なんです…」

「…うーん…解った。あきら、じゃ私に付き合ってくれろ？相手がいるとこないとでは違うから。」

「…でも妖夢さん、俺は武器も何も持ってませんよ？」

「…困ったなあ…」

「そんなあなたに！」

ひょっこりと出て来た緑の服の少女。

どこから出て来たのかは秘密。

「あ、にとり！」

「おひさ、みよん！で、この人は？」

「異界人のあきらよ。」

「あ、始めまして。」

「あきらね。あたしは河城かわしろにとり！宜しくね！で、あきらに早速試して貰いたいものがあるの！」

にとりはガサコソと鞆を漁り、何か機械を取り出した。

「これ！にとりの芸マシン！！」

…なんか色んな意味で危ない気がするが…

「これを頭につけてスイッチを押すと！なんと！
能力覚醒しちゃうと言うすっごいアイテムなのだー！」

「ほんとにそうなの？」

「理論上はそうなるんだけど……やってみるのが1番！さ、つけてつけてー！」

あきらは芸マシンを頭につけてみた。

「いっくよー！スイッチ、おーん！！」

キューーン…

あきらの頭に浮かぶイメージ。

…拳…

…なんかよく解らない鎧…

…何だこれ？

「よし！これでOK！」

にとりは芸マシンをあきらから外し、笑顔で言った。

「…え？何も変化ないけど？」

「じゃあ、あきらに本気で木刀振ってみて。」

「…いいの？」

「…いいよー！」

「…解った。」

妖夢は本気であきらに木刀を振るった。

普段なら直撃レベル。

「…!?!」

あきらはなんと、木刀を素手で受け止めた!!

「やった!成功したよ!」

「…凄い…木刀を受け止めた…!」

「…にとりさん…ありがとうございます、お陰で俺の能力が解りました…」

「?」

「…俺の能力は『心を具現化する程度の能力』…今は『危ない』と思っただけで妖夢さんの刀を受け止めることが出来ました…」

「凄い…!」

「思ったより凄い能力なんだね!」

「そうですね…妖夢さん、この力、試してみたいですか？」

「…そうですね。」

妖夢は木刀を再び構え直した！

あきららは拳を握りしめ…

同時に飛び出した！！

妖夢の木刀はまさに神速！！

残像を残し、相手を叩くべく唸る！！

が、それを紙一重というリズムでかわすあきら！

「（…俺の反応速度が上がった気がする…能力の影響か？）」

だがかわすだけでは能力を試す事にはならない。

あきらは「刀を受け流せる武器が欲しい」と思った。

瞬間、あきらの両腕にみよんな感触がした。

「…トンファー…?」

トンファー…腕に装着し、腕の動きとリンクして相手に打撃ダメージを与える武器。

ただ、今回は木製だ。

「…良い武器だっ…!」

あきらの反撃が始まる…!

あきら、イノベーターに（後書き）

次回予告！

かいは…何してたっけ？

空気となっていたかいたの近況が明らかに！

次回「紅魔館爆発事件の真相」

諏訪子「あたしの方が空気なんだけど…」

魔理沙「私なんて名前だけだぜ」

霊夢「いい加減出なさいよ」

作者「…ファンの皆様申し訳ありません…」

紅魔館爆発事件の真相（前書き）

前回までのあらすじー！

・あきら、にとりの芸マシンで能力覚醒

あきら「俺の覚醒シーンだけ適当だよな！？」

作者「違うよ、主人公だから見せ所はもう少し先に送っただけなんだよ」

あきら「…そっぴゃ今日は忙しいんじゃないのか？」

作者「…と思ったらそうでもなかったというオチ」

あきら「読者の人達を大切にしろよ…」

紅魔館爆発事件の真相

>かいと視点<

「…あなたはかいとって言うのね。」

「はい。」

「ふーん…」

俺はどうやら、凄い2人に気に入られたよう…かなあ？

一人は上かみしらさわ白沢けいね慧音。

全身青に包まれたその衣装は、知的さを滲み出す。

今は寺子屋…学校の先生をしているらしい。

だがここ数日休みらしく、家に居るんだそうだ。

もう一人は藤原ふじわらの妹紅もこう。

なんでもかの藤原氏と関係があるらしい。

…ところが「別に凄い事じゃない」とのこと。

赤と白のもんぺ（でいいよな…？）を身につけている。

たまーに慧音に付いて行って子どもたちと遊んでいるらしい。

「…で、かいとに聞きたい事があるんだけど。」

「何です？」

「『紅魔館爆発事件』についてよ。」

紅魔館爆発事件。

どうやら文々。新聞からの情報らしい。

紅魔館から突如光が天に昇ったかと思うと、紅魔館が爆発し、紅魔館が半壊したということだ。

…俺の『エデンの林檎』のせいだ。

「実は私達、事件発生直後に紅魔館に向かったの。何かおかしい気がしてね。」

そしたら、レミリア、フラン、咲夜の3人が寝てて…しかも無傷で。近くにはあなたがボロボロの状態で眠っていたの…

正直に教えて。あの事件の犯人…あなたは知ってるよね？」

「…はい。」

と…というか全部俺なんだけどね。

「誰なの？」

「…俺です。」

「えっ、お前がやったのか!？」

「…はい、俺はあの時…」

「そうだったんだ…」

「で、その奈落って奴は何処に行ったんだ？」

「解らないんです。」

しかし、ここで慧音の頭の良さが冴える！

「…いや、どこかは予測出来るわ。永遠亭よ。」

「永遠亭…!?!?」

「かいとの話が全て本当なら、その奈落という人は間違いなく怪我をしているはずよ。」

…そしたら手当てをしなきゃいけない。この幻想郷で手当てを出来るような場所はたった一つ…永遠亭よ。そこに行けば間違いなく手掛かりが得られるはずよ。」

「さっすが慧音！」

妹紅が笑う。（妹紅は敬語で話されるのが一番嫌だと言うので呼び捨てで呼ぶ事にした。）

「でもどうやって行ったのかしら？妹紅の案内なしに永遠亭まで行くのは至難の業…兎たちが案内したのかしら？」

「でも永遠亭に行けば手掛かりは得られるんだろ？じゃ行こう！ついでに輝夜を今日こそボコボコにする！」

「待って妹紅。一つ忘れてるわよ。…かいはスペルカードを一枚も持っていないわ。それにかいと的能力もまだはつきり解っていないよ？『エデンの林檎』だけじゃ、奈落どころか兎も倒せない。怪我人に喧嘩をしかけるんだから、当然兎たちや永林も反撃してくる…私達だけでは対応しきれないわ。」

「…そうだね。」

「でも、手立てはあるわ。…かいと、しばらくあなたには妹紅の相手になって貰います。」

「えっ…!?!？」

このExtraボスとやり合えと!?

「今のあなたに必要なのは実戦とスペルカードよ。」

スペルカードは妹紅に教えて貰えれば簡単に出来るわ、でも実戦不足じゃいくら能力が高くても意味がない。

あなたの能力を確定させて、スペルカードの使い方を学び、『エデンの林檎』についても説明しなきゃいけないわ。

…『エデンの林檎』については私が文献で調べてみるから、あなた
は実戦力を高めるのよ。」

「慧音：勢いでかいとを殺しかねないけど、いいのか?」

妹紅が心配そうに聞く。

「大丈夫、問題ないわ。寧ろその方がいいの。そうすれば間違いない力はつけられるから。」

「解った!かいと、本気でかわせよ!」

「…うそおおおおおおおん!!!」

…どつやら俺はもうすぐ死ぬようです。

紅魔館爆発事件の真相（後書き）

次回予告！

ぼっちょに課せられた試練…それは!？

え…それだけ？

というわけで次回

「ぼっちょin図書館」

パチユリー「私の出番ね」

霊夢「私の出る幕ないね」

作者「第2章を待て」

霊夢「夢想封印!!!」

ピチューン!!

作者はピチューンされました…

ぽっちょい図書館(前書き)

前回までのあらすじー！

・もこたんVSかいと…ってけーね先生が言ってた

PV10000突破したので次回はPV10000突破記念特別話！

ありがとうございます！

> 奈落視点<

「…予想以上に怪我が激しいですね…もう暫くここに居て貰います
が、よろしいでしょうか？」

永林が包帯を奈落の腕に巻いている。

「ああ。体調は万全にしておきたい。…あの異界人は間違いなく俺
を追うだろう…治療はしておかないとな。」

「解りました。」

「奈落。」

後ろから声がした。

「ん…？珍しいですね、輝夜姫がいらっしやるとは。」

そこには、美しい着物を着た女性…黒い髪が腰までさらりと伸びた、
まさに絶世の美女。

ほつらいさん かくや
蓬萊山輝夜。

「例の異界人の『エデンの林檎』…あれの威力は？」

「…とにかく異常です。私の右腕が焼けたんです。能力を使ったにも関わらず。」

「…やはりあの時の威力は健在なのね。」

「そうですね…姫様。」

「神の力の断片…まさか月の民ではなく、異界人に宿るなんてね…予想外だわ。」

「…しかし、その異界人の一挙一動でこの幻想郷の未来が決まる…それだけは何とか回避したいですね。」

「…そうね。永林、いつでも戦えるようにしておいて。異界人が来た事が解り次第、その異界人を討つ。」

「かしこまりました。」

「それと奈落…」

「はい？」

「あなたも出来るだけ早く動けるようにしておいて。」

「…はい。」

>ぼつちよ視点<

「…ぼつちよ様、この先にパチュリー様がいらっしゃいます。」

「図書…館…？」

『図書館』と書かれた看板が置かれている。

「はい。申し訳ございませんが、ここから先はぼつちよ様お一人でお探し下さいませ。私は用がありますので…」

「…はい、ありがとうございました。」

ぼっちょは頭を下げた。

「では、また後で…」

咲夜は一瞬で姿を消した。

「…よし！」

ぼっちょは扉を開け、中に入った。

異常な数の本が並んでいる。

本の世界に迷い込んだみたいだ。

「ここどこかに…パチユリーさんが…」

数々の本棚。

「広いなあ…」

「あれ？お客様ですか？」

そこに居たのは、まさに小さな悪魔であった。

赤い髪、ちょこんとした羽。

「あなたは…？」

「私、小悪魔です！」

まんまですか。

「あなたの名前は？」

「ぼつちよって言います。あの、パチュリー・ノーレッジさんを探しているんですが…」

「パチュリー様を…？」

「はい。」

「…解りました。ではこちらに。」

ぼっちょは小悪魔についていった…。

「あの…」

小悪魔は小さな声でぼっちょに話し掛けてきた。

「パチユリー様は今、魔導書の解析を行っていて、疲れているんです…なるべくそつとしてあげて下さるとありがたいのですが…」

つまり、怒らせるようなことはするな、という 것인가。

「はい。」

特に怒らせる為に此処に来た訳ではないので、指示だけ聞いていければ怒らせる事はないだろう。

「良かったです、解って下さる方がいて。」

小悪魔はニコッと笑った。

そんなこんなで、パチュリーの下に着いたぼっちよ。

「あの…パチュリー・ノーレッジさんでしょうか？」

「むきゅ？…そうだけど？」

…「むきゅ？」がすっごく可愛かったのは秘密。

「あの…靈力増幅のやり方を教えて貰いたいのですが…」

「あ、あなた紫が言ってた異界人ね。確か…ぼっちよだっけ？」

「はい。」

パチュリーさんの服はネグリジエのような薄手のドレス。

ほのかなピンク色をしている。

頭には三日月のアクセサリが。

紫色の髪と瞳は綺麗だ。

「霊力増幅…それは精神を統一し、瞑想を行う事で霊力を高める技術…でもそれは、長期的にやる場合よ。」

今回は時間がないみたいだから、少々手荒な方法をするけれど良いかしら？」

「はい！」

「ではやり方を簡単に説明するわ…ぶっちゃけると、『私に触るのが目標よ。』」

「へ？」

パチュリーさんに触るだけ？

「私は結界を張るわ。あなたはスペルカードや能力を使わずに私に触ればいいの。…結界を破れるだけの霊力を出すのが目的よ。」

そもそも結界は魔法…霊力を上手く操れば結界を中和出来て、私に触れる。」

ただ、霊力は集中しないと力を発揮しない…あなたの霊力で破れる強さの結界を張っておくから頑張りなさい。

私は魔導書の解析をしているわ…何時間、いや何日で破れるかしら

「？」

…面白さ！

「…！おもしろさ！」

ぼっちょiノ図書館(後書き)

次回予告!

「PV10000突破記念特別話」

ぼっちょ「…何するの…?」

作者「それは秘密」

PV10000 突破記念特別話（前書き）

PV10000 突破記念特別話であります

PV10000突破記念特別話

あきら「ん？PV10000突破記念…？お、もう10000行っ
たのか！」

ぼっちよ「10000じゃなくて77777だったら良かったのに」

かいと「なんで？」

ぼっちよ「そりゃ僕の早苗さんのた「拒絶」『エデンの林檎』…！」

ピチューン！

かいと「さて、憎きリア充を消した所で」

奈落「PV10000突破記念、キャラ設定裏話！」

かいと「おい奈落！俺の台詞パクりやがって！今日こそぶっ飛ばし
てやらめ！」

奈落「やれるものならやってみる！」

青年戦闘中……………

あきら「さ、さて、気を取り直して今日は俺達がどうやって生まれ
たかを作者のまるきゅーに聞く事にするか！」

作者「まるきゅーってどーいうこった」

あきら「ま、いいじゃないか！で、どうやって俺達が生まれたんだ
？」

作者「最初の軽いプロット段階では、『3人の人が幻想郷に入り込
み、いろいろ馬鹿をやる』って設定だったんですよ。

つまりあきら達3人が女子高生だった可能性も少なからずあったわ
けです。

でも女性だと他の東方Projectオリジナルキャラと差別化し
にくくて…

ぶつちやけちやうと『霊夢・魔理沙・萃香主人公でよくね？』って
程のレベルだったんですよ。」

あきら「それは作者の描写力が足りない証拠だろ」

作者「それは言わないでくれ…」。

で、やっぱりこのオリジナル主人公出す以上、主人公を前に出さないと小説が成り立たないですね。

というわけで、楽に差別化を図れる男性3人にしたわけです。」

ルーミア「へえー、そーなのかー。」

あきら「それ言いたいだけだろ!？」

かいと「何、ようじょ!？」

奈落「やっぱりテメエはロリコンか!?!」

ぼっちよ「もう一つ。能力はどう考えたんですか?」

作者「真っ先に浮かんだのはかいとです。かいとはキャラコンセプト上、『ハーレムを目指す最強キャラ』っぽくしようと思いました。

ですが最強(チートとも読むが)過ぎてもつまらないので『全てを

拒絶する程度の能力』は一日一回限定、さらに『エデンの林檎』は五日に一回しか発動出来ないようにしました。

で今度はヘタレと化してしまった為、ある設定を足したのですが、それは本編をお楽しみに。」

ぼっちょ「僕は…？」

作者「ぼっちょはかいと対照的な感じにして、防御型の能力を持たせ、さらに一途な性格にしました。

…当初ぼっちょが惚れている相手の候補として

霊夢・早苗さん・咲夜さん・幽々子さん

だったんですが、悩んだ末に早苗さんにしました。

まあ決めた理由は早苗さんが女子高生という二次設定があったからですが。」

あきら「俺はどうなんだ？覚醒シーンはすっごい適当感があったんだが…」

作者「あきらは最も悩みました。

というのもチートなし主人公が大前提だったので、チートじみた強さを持たず、尚且つ主人公として生きるくらいの能力を考え出すのがかなりきつかったです。

それに能力がかなり抽象的なので、バトルシーンで覚醒というよりそれ以外の何かで覚醒させた方が良い気がして、にとりにやっつけて貰いました。

それが適当っぽく見えたらすいません…」

霊夢「私が名前だけ出演ってどーいうことよ」

作者「霊夢・魔理沙の2人は本当は第一章で出演する予定だったのですが、第二章のキーパーソンにした方がオリジナル主人公らしくなるのでそうしました。」

そのかわり第二章で活躍しますよ。」

奈落「俺は？」

作者「実は奈落は最初は登場させない予定でした。」

奈落「え」

作者「でも、客観的に見て、3馬鹿視点だけでは不十分だと思い、緊急に登場させました。」

そして書いている途中で、先のプロットを書き換える要因にもなりました。

奈落はとりあえず、物語に欠けてはならない存在になったとだけ言っておきますね。」

かいと「そっぴや聞きたかつたんだが…作者は誰が好きなんだ？」

作者「みよん」

奈落「…ロリコン。」

作者「違う！みよんはロリ担当じゃねえ！普通の女の子だと信じてるっ！それに他のキャラもいるわ！」

かいと「へえー…」

作者「咲夜さんとか」

あきら「まあ妥当か」

咲夜「作者さんは私の事…」

作者「なまだと信じてやまない」

ぼっちょ「その他は？」

作者「ゆゆさまとか」

幽々子「うん？呼んだ？」

あきら「きつと」なんでも食べられる程度の能力』に惹かれたんだろ
うな…後は可愛さか。」

作者「パチュリーとか」

パチュリー「むきゆ？」

ぼっちょ「『むきゆ？』だな絶対…」

作者「ざっとそのくらい？」

あきら「…意外に普通だな…」

かいと「作者もロリコンかと思ったのに」

作者「ロリコン違う！」

ぼつちよ「妖々夢と紅魔郷キャラか…そういや作者の成績はどーなのさ？」

作者「妖々夢が初東方、一応ルナまでクリア、でもルナノーコンは無理、ゆかりん撃破

紅魔郷、フラン撃破、けどルナは未クリア（最後のレミリアでピチユーンする）

花映塚もやったけど、えーき様強い

その他は体験版の「プレイ動画しか見てない」

あきら「にわかめ」

かいと「にわかは嫌われるぞ」

作者「仕方ないじゃん、時間ないもん！」

これからも変わらぬご声援をお願い致しまして、今回はお開きとさせていただきます。」

PV10000突破記念特別話（後書き）

次回予告！

本編に戻りますよ！

あきらVSみよん！

あきらの能力とは！？

ぼっちよの試練に進展はあるのか！？

というわけで次回

「なんか皆リア充だね」

妖夢「斬れないものなんて、あんまりない！」

なんか皆リア充だね（前書き）

前回までのあらすじー！

・おかげさまでPV10000突破したので記念を

…最近真面目なシーンばかりですが、これはとんでも展開の布石ですのでもうちちょっとお待ち下さい…

なんか皆リア充だね

>あきら視点<

「はあっ!!!!」

木刀を左腕で防ぎ、右腕を妖夢に振り下ろす!!

「甘いつ!!」

右腕の攻撃を流し、そのまま突き!

あきらは威力の大きさに耐え切れず、軽く吹っ飛ぶ!

「...流石ですね...!」

腹にずきんと痛みが走る。

「だがっ!!!!」

流されるのならば流されない武器を使えばよい。

あきらはトンファーではなく…

「っ！？ブーメラン！？」

「うりゃあっ！！」

ブーメランを放り投げ、さらに肉薄する！

「じじは…！」

戦略的後退、妖夢はそう考え、ブーメランに注意を向けながら距離を取る。

「…かかりましたね、妖夢さん。」

「えっ…！？」

ブーメランが…ない!?

「あなたを捕らえさせて頂きました。」

妖夢の右足に絡み付く鎖!

「やられた…!」

「そこっ!」

妖夢の懐に拳が!

「きゃっ!」

咄嗟に木刀で防御するが…

「チエツクメイト」

後ろにはブーメランが!

「コッソッソ！」

「痛っ！」

ブーメランは妖夢の頭にぶつかり、地面に墜落した。

「……やりますね……」

「妖夢さんこそ、刀一本で……武器を複数使わないとこちらがやられました。」

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

頭を下げる二人。

「……でも、武器を複数使える人と戦えば、私もいろんな方向からの

攻撃に気を配れるようになれる。
…良い経験が出来そうね。」

「そうですね…俺も勉強になります、明日も手合わせしましょう！」

「はい！」

>ぼつちよ視点<

「何だこの結界は…！？」

さっきから触っても押しても殴ってもびくともしない結界。

「普通に触っても無駄よ。霊力を扱いなさい。」

霊力って何だ…！？

「スペルカードが作れるなら霊力も扱えるわ。頑張りなさい。」

「スペルカードを作れるなら霊力も…？」

考える。

スペルカードを作るにはイメージ…

仮に霊力とスペルカードが同じとするなら…？

「そうか…！」

イメージ。

腕から霊力を出し…結界に干渉…

「（まさか…！？もう掴んだの…！？）」

後は結界を溶かすイメージ…

結界を切り開き…

腕を伸ばす！

とんとん。

「…成功しました！」

「…そうね…（何て事…たった2時間で結界が破られるなんて…！）」

パチュリーは正直驚いていた。

もしかしたら私は恐ろしい者に関わったのかもしれない。

「…此処まで出来ればもう大丈夫。後は靈力を常に身体から出すイメージをすること…心を強く持つことさえ出来ればいくらでも靈力は増幅できるわ。」

「…は？」

「靈力つて、言ってしまえば精神力なのよ。つまり精神を強く保てば靈力なんて無限に出るわ。」

精神力を引き出すのに最も効果的なのはイメージ。ほら、よく『出来ると思えばうまくいく』って言うじゃない？自己暗示がかなり精神に影響をもたらすの。

逆に言えば、精神を強く持てなきゃ霊力なんて扱えないわ。さて…正直思った以上に上達しているわ…少々荒いけど、仕上げに移りましょう。」

パチュリーは魔導書を開き、こう言った。

「私を倒さない。そうすれば合格よ。」

「…はい！」

「残念ながら手加減は出来そうにないわ…死なないように頑張りなさい！」

大量の弾幕が、ぼつちよに降り注いだ。

「…かわしたのね。」

パチュリーは土煙が消えるのを待たずにさらに弾幕を創る！

「そこよ！」

弾は本棚に当たり、本が宙に舞う！

「…まだ一発も当たってないのね。」

そこでパチュリーは、一枚のスペルカードを取り出した。

「日符『ロイヤルフレア』！」

パチュリーを中心として、放射状に広がる赤い輪！！

「（あれはかわしきれない…！！）」

ぼっちょは試してみることにした。

なんか皆リア充だね（後書き）

次回予告！

かいとの修行！

そしてぼつちょVSパチュリー！

バトル物ならではの修行シーンだ！

というわけで次回

「図書館の錬金術師」

小悪魔「なんとなくアウトな気がします」

パチュリー「気にしない気にしない」

図書館の錬金術師（前書き）

前回までのあらすじー！

・とりあえず皆修行中

…必ずどこかでカオスに持っていきますので…

「くっそ…！（まだ『エデンの林檎』は発動できない…！スペルカードの一枚や二枚ありゃ…！）」

「諦めたのか！？じゃ止め！滅罪『正直者の死』！」

密度の高い弾幕が迫る！

「一か八かだ…！なんか来い！」

爆発はしなかった、そのかわり…

「何だありゃ！？」

かいとの周りに浮かぶ5つの小さな光！

「マジで来た…！適当に名付けるぜ、拒絶『D・T・レーザービック』」

光からさらにレーザーという光が放たれ、弾幕を相殺する…！

『「エデンの林檎」自己防衛機能発動、指示を。』

「防衛機能が…！なら近接武器、剣とかはないのか!?!」

『剣…「D・T・ソード」があります。』

「よっしゃ！それを！」

『了解』

かいとの左手に握られる剣！

「レーザービット、弾幕相殺を！」

『了解』

「もこたんINさせてやんよ!?!」

かいとはそのまま妹紅に剣を向ける！

「舐めてもらっちゃ困るよ！不死『火の鳥 鳳翼天翔』！」

さらに厚い弾幕と、炎の翼をはためかした妹紅は、かいとに突っ込む！

「うりゃあっ！！！」

剣を振るが、妹紅にかわされる！

「はあっ！！」

妹紅はカウンターを決める！

腹に入ったかいとはよろめく！

「そこ！パゼストバイフェニックス！！！」

かいとが前を向くと、そこには巨大な鳳凰が！！

「さっば」

ピチューン！！

「よし、これで5戦5勝！」

「ばたんきゅん……。」「

「あらあら…また負けたの？」

慧音がくすくす笑う。

「もこたん強すぎだもん！」

かいとが文句を言うが…

「異界人に遅れをとるわけにはいかないもの！」

妹紅は無視。

「…でも最初はまさに一瞬で勝負が決したけど、まさか5分持つようになるなんて…なかなかだと思っわ。」

「あいつをぶっ飛ばすにはまだまだですよ…！妹紅、もう一本！」

「解った！早速パゼストバイフェニックス！」

「ぎゃああああ…！！！！！」

かいはまたまた燃え尽きました。

現在…

妹紅：6勝0敗
かいと：0勝6敗

>ぼっちょ視点<

「試してみるか…！」

光の輪をかわしながら、ぼっちょはスペルカードを出す！

「矛盾『守らずの盾』…！」

盾を装備したぼっちょは盾を構えながらパチュリーに突っ込む！！

「考えたわね…！火符『アグニレイディアンズ』…！」

炎がぼっちょを包む！

「崩壊」

盾が粉々に割れた！

「えっ…！？」

そしてぼっちょの姿が見当たらない！

「矛盾『盾爪』！！」

右腕に鋏のようなものを装備したぼっちょがパチュリーの結界に干渉する！

「後ろ！？」

結界は破られ、パチュリーは鋏をギリギリでかわす！

「…まだだ！」

ぼっちょは構える！

鉄に霊力を…

流れを…掴む！！

鉄がさらに大きくなり、パチュリーは驚きを隠せない！

「もうそこまで…！？」

「イクリブスクラッシャー霊矛『喰盾爪』…！！」

鉄が猛獣のようにパチュリーに噛み付こうとした、その時！

「火水木金土符『賢者の石』…！！」

それを防ぐ土の壁！

「…まさか異界の知識が役立つ時が来るとは…思いもしなかったわ。」

…あれは！？

「出来るかどうか微妙だったけれど…理論は正しかったようね。」

パチュリーの真下に描かれた…

「錬成陣!?!」

「ええ。後はこれをこうして…と!」

パチュリーが手を合わせた瞬間、槍が飛ぶ!!

「錬金術じゃないですか!?!」

「だってこれ、賢者の石よ?」

「マジかよ…!」

エルリック兄弟の真似までできるんですか。

図書館の錬金術師（後書き）

次回予告！

パチュリー戦に終止符！

あきらの目の前に現れた意外なキャラ！

かいと、とにかくやられまくり！

というわけで次回

「エブリデイナイトフィーバー」

衣玖「（シャキーン！）」

謎の歓声「キャイクサーン！！」

エブリデインナイトフィーバー（前書き）

前回までのあらすじー！

・なんかかいたが凄い事に

・パチユリー、賢者の石を使って図書館の錬金術師に

新キャラ登場！

エブリデインナイトフィーバー

>ぼっちょ視点<

「はあっ!」

土が盛り上がり、火が竜のように舞い、水が襲い掛かるといっばっ
ちよにとっては最悪の展開。

だが、ぼっちょは小町との戦いで学んだ。

確実に当たりそうな攻撃だけをかわせばよい。

「短守『ミニミニ結界』!」

一撃だけ無効化できる結界を張り、そのままパチュリーに特攻。

「うおおおおお!...!...!」

ぼっちょは正面から鉄を突き付ける！

「くっ…！」

パチュリーは手を合わせる！

土の壁が、ぼっちょに立ち塞がる！

「壁ごと…いけるか!?!」

ぼっちょはさらに霊力を鉄に込める！

そしてパチュリーと壁を同時に包む！

「なっ…！」

「…合格をいただきます！」

鉄が、爆発した。

「…もう少し頑張れば、きっとかなり強くなれると思っわ。」

パチュリーは魔法で崩れた本の山を直している。

「…文に勝つつもりなら、霊力を身体強化に回すべきね。彼女、身体能力は全妖怪で最高クラスだから、流石としか言えないわ。頑張るなさいな。」

「ありがとうございます！」

「いえいえ…またいらっしやい、今度はもう少し深い所を教えてくださいわ。」

ぼっちょは図書館を出た。

「お待ちしておりました。」

扉の前には咲夜が。

「お食事の時間です。こちらへ……」

>あきら視点<

あれから三日。

「はぁっ」

俺と妖夢さんは稽古と称した本気の戦いをしていた。

…そつでもしないと鍛えられないのだ。

「あ、今日も稽古なの？」

「はい、戦いの経験は積んでおきたいので。」

「頑張つてねー！」

妖夢さんとやり合い、幽々子さんの手作りの食事が待っている…

俺、まさかリア充？

そっか。

「えーいー！」

突然ドリルが。

螺旋状のねじのようなそれがキューインなんて音を立ててるから間違いない。

「何だこりゃあ!?!」

土から出て来た、エブリデイトナイトフィーバー!

別名…

「きゃーいくさーん!」

「誰だ今の声!?!」

なんか遙か彼方からそんな言葉が聞こえた気がしたが…

「（シャキーン！）」

…ドリルの人がなんかポーズ決めてる…

右腕を天に向け、さらに右手の人差し指は完全に上を指し、左手は腰に！

「（…なんかかつこいい…！）」

妖夢が心の中でこつこつ呟いたのは秘密。

「…ってそうじゃなくて！あなたは誰なんです！？」

「…祭なげえと聞けば例え火の中水の中、何処へでも行く祭いくが生き甲斐の…
永江衣玖！

…まあ以後お見知りおきを！」

…ってそのポーズのまま言われても…

「最近祭がなくてフィーバー成分が足りないの…だから今から…」

右腕にドリルが!!

「戦いという祭よっ!!」

謎の多い衣玖さん!

あきらはどつなる!?

>かいと視点<

「ギャース!!」

ピチューン!

「弱いな!私の勝ちだ!」

現在の成績…

妹紅：15勝0敗

かいと：0勝15敗

「ぜえ…ぜえ…」

おっさんみたいな荒い息だが、ノンストップで走り回った（逃げ回った）んだから仕方ない。

「…凄いわね……かいと……」

正直、不老不死である妹紅相手に連続で15戦も仕掛けるだけの体力がある事に驚いた慧音。

「…まだやるのか？」

軽く息が上がる妹紅。

「ああ…やってやん…」

突如、操り人形の手繰り糸が切れたかのように倒れたかいと。

「おい！かいと！？」

「…体力の限界が来ただけよ。今日はこのくらいにして休みましょう。」

慧音がかいとを背負い、家へ帰って行った…

かいとが目覚めた時、全身に電撃が走るような激しい筋肉痛に襲われたのは言うまでもない。

永遠亭殴り込み作戦、決行（前書き）

前回までのあらすじー！

・衣玖さん登場

・かいとばたんきゅー

もう少しで第一章終了！

永遠亭殴り込み作戦、決行

>ぼっちょ視点<

「ぼっちょ様、こちらに…」

ぼっちょはやたらと広い、ライブをやれるような広さの大広間に案内された。

導かれるがままにテーブルに座ると、既に美味しそうな匂いを広げる食事が待っていた。

どうやら今回はステーキなどがある所を見ると洋食のようだ。

回りを見渡すと、既に美鈴・小悪魔・レミリアが座っていた。

美鈴は小悪魔の顔をむにゅと引っ張ったりして遊んでいる。

数分して、咲夜とパチュリー、それに一人の少女が来た。

「…？誰…？」

金髪の少女はぼっちょに聞く。

「フラン様…この方はぼっちょと言つ方で、異界人です。」

「ふーん…あたし、フランドール…スカーレットって言つて言つての…！フラ
ンって呼んでね！よろしくね！」

そうしてフランはぼっちょに右手を伸ばす。

「僕はぼっちょです…よろしく。」

ぼっちょは違和感を感じた。

…紫さんは「フランは危険」と言っていたが…いざ本物と会ってみると、危険という理由が解らない。

「さ、ご飯食べよー！」

会食という珍しい形式に少々面食らったが、とにかくご飯は美味しかった。

「ところでぼっちよ。」

レミリアが話し掛けてきた。

「はい？」

「あなた、文を倒したらどうするの？」

「…洩矢神社に戻ります。待っている人がいるので。」

「…待っている人？」

「ええ。…今も待つてくれています。その人の為にも、僕は明日にでも射命丸を倒しに行きます。」

…彼の瞳に迷いは映っていなかった。

取り込むのはまだ早い、そう思ったレミリアはこう提案した。

「…そう。なら、私からも一つ頼んでもいいかしら？」

「何です？」

「射命丸文を倒したら此処に一回戻って来て欲しいのよ。貴方にや
つて貰いたい事があるわ。」

「…でも何時戻れるか解りませんよ？」

「構わないわ。とにかく戻って来なさい。そうじゃないと話になら
ないから。」

「…はい。」

>かいと視点<

るわ。」

「ああ…アドレナリンっすか…」

大丈夫だ、問題ないって奴ね。

「私、妹紅、かいとの3人で永遠亭に殴り込みに行くわ。かいと、あなたは『エデンの林檎』で先制攻撃をしかけて。出力は気にしないでいいわ。」

私と妹紅で輝夜と永林を止めるわ…かいと、あなたは奈落を。」

「了解！」

こうして、後に新聞にまで取り上げられるとんでも事件その2…『永遠亭の悲劇』が起きるのだ。

〈永遠亭付近〉

「見えたよ！」

妹紅が建物を指差す…。

「かいと…頼むわ!」

「あいよ!…ぶっ飛びやがれペドフェリア野郎!拒絶」エデンの林
檜』!」

永遠亭が、爆発した。

〈永遠亭内部〉

大地を揺らす爆風が、永遠亭内部を襲う。

「来たか…! 姫様、永林、外へ!」

「ええ!」

永林は弓を構え、輝夜と共に外に出る。

「優曇華うどうんげ！てゐ！君達は輝夜姫の援護を！」

「「はい！」」

2人の兎は輝夜を追い掛ける。

「さて…戦いの時か…!!」

く 永遠亭付近く

「…妹紅！輝夜と永林が来たわよ！」

「解った！慧音は永林を頼むわ！」

妹紅が飛び出し、炎の翼を広げて飛翔する！

「…かいと、なんとか日没までやり合って…そうすれば勝てる…！」

「日没までって…まだ陽は傾き始めたばかりっすよ！？」

「そうして疲れさせるのが目的よ！…かいと、『D・T』は使える…？」

「あれはいつでも！」

「なんとか永林だけは倒したい…！私が永林とやるから、かいとは奈落を！」

「はいっ…！」

永遠亭殴り込み作戦、決行（後書き）

次回予告！

かいとがとにかくすっごい事に！

これはとにかくまずい！

パクリのオンパレード！

というわけで次回

「ハーレム王ガイガイガー」

てゐる「どうしてこうなったの…」

うごんげ「…作者に聞いて…」

ハーレム王ガイガイ（前書き）

前回までのあらすじー！

・かいと軍団VS永遠亭メンバー

…今回はカオスを目指しました！

やっとカオスに持っていった…！

ハーレム王ガイガイガ

>かいと視点<

「来たね妹紅…！今日こそあなたを倒す！」

「それはこっちの台詞よ！輝夜、覚悟しなさい…！」

…まあ結果は皆様ご存知の通りです。

不死VS不死、しかも同じくらいの力なもので…

結局スタミナが物を言う訳です。

さ、別の戦いをご覧に入れましょう。

「八意永林ね…！」

「上白沢慧音：何の用で？」

「双月奈落：彼の身柄をこちらに引き渡して貰います。」

「彼はまだ怪我人ですよ？怪我人を引き渡せと？」

「…あなたが付いてくるくらいなら構わない。あくまで話を聞きたいの。」

慧音は譲歩してみた。

「…『エデンの林檎』を持っている異界人の仲間には引き渡せないわ。何されるか解らないもの。」

「（やはり『エデンの林檎』の事を知っていた…！）…そう。どうやら私達は決して交わる事がないようね。」

「…そのようですね。でしたら…」

永林は弓を構える！

「力付くで頂きましょう。」

「全力で守りましょう。」

緊張が高まり、2人が同時に駆け出した瞬間！

「拒絶『D・T・レーザービット』!!」

永林を襲う細い光の筋！

「なっ…!!」

「かいと！奈落は!？」

「奴はまだ出て来ていません！なら先に永林を倒すのが普通でしょう!」

「そうね…!!」

慧音の横に立つかいと！

「2対1…それは不利ですね…ですが！」

永林の左右に現れた二人の鬼！

「てゐ、優曇華…援護を頼みます。」

「はい！」

「…慧音先生、永林を頼みます。俺はあのつさちゃん達にお仕置きしてきます！」

「…かいと、あの紫の髪の娘…優曇華院って言うんだけど…彼女の眼は絶対見ちゃ駄目よ。」

「…ええ！」

「てゐと優曇華院は任せるわ！あなたの力…見せてあげて！」

「おっ…！」

「これぞ空前絶後、最強のハーレム王の為の力！ガイガイガーだ！」

「…我ながら凄いアホな提案しちゃったわね…」

慧音は誰にも見られないようにこっそり頭をつなだれた。

何故慧音がこんな行動をしたのかは後ほど。

「行くぜ！！ブrouクン…ナツクル！！」

「なんか腕が飛び出したー！！！！」

鋼の拳は、てゐに直撃、そしててゐは気絶！！

「て、てゐ！？…何て力「ブrouクンナツクル！！」きゃあああ！！」

優曇華ももう一つの拳に直撃し気絶！！

「な…私の弟子が…瞬殺…!?!」

もはやクールな永林は何処へやら、展開が解らず冷や汗が止まらない。

「永林!!俺は許さねえ!!」

…あきらの為に、ぼつちよの為に!

俺はあんたを討つ!今日、ここで!!」

もはや突っ込み切れないが、勢いに任せようか。

「今こそ見せてやる…本当のハーレム王の力を!!」

そしてかいとは両手をがっちり組んだ!!

「エデンスシード!フィールド展!!開っ!!」

碧い光が、空を包む!

「あ…あんな力…見た事…!」

ピチューン!!

「あ…ああ…」

永林は力無く倒れた。

「ウイン!!」

「「待て待て待て!!」」

遠くで戦ってたはずの妹紅と輝夜が同時に突っ込んだ。

ハーレム王ガイガイ（後書き）

次回予告！

なんじゃあのガイガイって！？

ガイガイの秘密が、今明らかに！

というわけで次回

「一人買収しました」

輝夜「何このタイトル…」

一人買収されました(前書き)

前回までのあらすじー！

・ハーレム王ガイガイー

…うん、これだけなんだ、ごめんなさい。

一人買収されました

『慧音先生の百科』

こんにちは、上白沢慧音です。

本日はかいたの『ガイガイガー』について説明しましょう。

かいたといわく、「なんか夢に出て来て、ピンチになったらそれをやったらいいよってちっちゃなロリ神様に言われた」らしいガイガイガー。

ガイガイガーは主に4つのパーツで成り立っています。

背部に漂う『レーザービット』。これは推進エンジンになったり、防御を担当します。

胴体に付けられた『プロテクトアーマー』。これはエデンスシードの莫大なエネルギーから身を守る為にあります。

そして両腕に装着された『ブロウクングローブ』。これは後に解説するブロウクンナックルやデスアンドライブ等に活用される装備です。

そして最後に『エデンスシード』。これはメインエネルギーです。

これらは全てエデンスシードの自己防衛機能の応用なんだそうです。

…某勇者王のパクリ？気にしない気にしない！

そして現在判明してる技は2つです。

・ブロウクンナックル

これはブロウクングローブを飛ばし、相手を殴る技です。とにかく威力が高いです。

・デスアンドライブ

エデンスシードより発生するフィールドを展開し、それによって動けなくなった相手を超高速の突進的な感じのものでピチューンするという凶悪な技です。

「必殺技名を適当に決めて欲しい」と頼まれたので寺子屋の男児がよく言っていた必殺技をちょっと^{もじ}捩っただけなのに…

我ながらセンスないな…なんて思ってしまいました。

以上、慧音先生の大百科でした。次回をお楽しみに。

> 本編 <

「「待て待て待て！！！！」」

妹紅と輝夜が突っ込む！

「何なのガイガイガーって！？なんかのロボット！？」

「それに、『エデンの林檎』は五日に一度しか使えないんじゃないかな？
つたのか！？」

「ガイガイガーはロリ幼女の味方です。そして神は言った…『まだ
死ぬ時ではない』と…
エデンの林檎はガイガイガーになった時に2回まで使用できます。」

「なんだそのチート的性能は！？そしてロリ幼女の味方って…なん
なんだー！」

「全く…妹紅、俺はちゃんとうさちゃん達とついでに永林を戦闘不能に追い込んだんだから褒めてくれよ。」

「あ…そういえば…！色々とおかしな所があったけれど、ちゃんとやる事やったのか！」

「というかこんな外見の奴…雑魚のパターンなのになんで永林をボコボコに…あ、これが初見殺しって奴なの！？」

輝夜は何かに悟ったようです。

「おいおい…俺がない内に何が「ピチューン…！」」

何か居たような気がするがスルーで。

「あ、満月だ」

「うおっしやあ…！」

慧音先生、覚醒。

というわけで、奈落とか言う奴はこの場にいなかった事にしておいでください。

「え」

あなたは慧音先生に『永遠亭に居た』という歴史を喰われたんですよ。

「くくく…」

さて、作者の一匙で一人を泣かせた所で。

物語はさらに展開します。

「…くつ、3対1だなんて…でも、私は不老不死…負けるはずがない…」

「そっかな？」

「!!」

目の前には、満月によって覚醒した慧音、ガイガイガーかいと、そして妹紅が！

「くっ…!!」

「…逃がさねえぞ輝夜！」

「恨みはねえけどぶっ飛べ蓬莱の二ート!!」

「…さあ、彼について洗いざらい吐いて貰うよ！」

最強と化した3人を相手にするには力不足だった。

「ひえええええええ！」

輝夜は人生初の降伏をする事になりました。

「で！輝夜、あの奈落とか言う人間の居場所を吐きなさい！」

ぐるぐるにロープを巻かれた輝夜が、バタバタしながら衝撃の一言を告げる。

「も、妹紅？すつごく言いづらいんだけど…」

「え？」

「その奈落…あなたの後ろに…」

「ふえ！？」

「しくしくしく…」

振り返ると、未だに泣いている青年が。

「…この人が…奈落？」

「…すっごい…イケメンね…」

「で…彼に聞く事があるんじゃない…」

「そつだ！奈落！あなたに聞きたい事があるわ！」

「しくしく…え？」

「あなたに紅魔館爆発事件の真相を教えて貰うわ！」

「え？あ…はい…。」

意外にすんなりと全てを話した奈落。

そして、奈落が止めてなければ紅魔館は吹き飛んでいたという事実も判明した。

一人買収されました(後書き)

次回予告!

第一章最終話!

最終話的雰囲気全く0の話ですが、どうかご覧下さい!

というわけで次回

「第一章完結! 結局出演出来なかった霊夢と魔理沙」

霊夢「ちゃんと私…第二章に出るのよね…?」

魔理沙「いい加減出して欲しいぜ」

作者「ちゃんと用意しますからもう少し待って下さいな」

第一章完結！結局出演出来なかった霊夢と魔理沙（前書き）

前回までのあらすじー！

・ガイガイガーがなんかチート性能

第一章完結！

第一章完結！結局出演出来なかった霊夢と魔理沙

>あきら視点<

「えーい！地球の裏側まで貫けー！」

ドリルをひたすらかわすあきら。

「む、このままじゃかわされるばかりか…そしたら！」

衣玖さんのスペルカードが光る！

「魚符『龍魚ドリル』！」

なんとドリルが2つに！

「穴掘り、穴掘りでレッツファイバー」

「どづいづことだぁぁぁ！…！？？」

「それはアウトですよー!？」

「ん?今からやるんだよ?」

「うそおおおん!？」

衣玖さんは慣れた手つきでニ〇テ〇ドード〇を起動する!

「さ、レッツファイバー」

数分後…

「衣玖さん強すぎ…」

「やった (シャキーン!)」

まさかぶよ〇よをやり込んだ俺が負けるとは…

ファイバー力強すぎ…

「よし！楽しかった！でも疲れた！幽々子、お家に泊めてー！」

ちよ、衣玖さんは幽々子さんと仲良かったっけ！？

「いいよー！」

軽い、軽いぞ幽々子さん！

「わーい！さ、泊まるぞー！」

「もういいや…」

突っ込みに回るのは疲れました。

「…解るよ、その気持ち…」

妖夢も同じ思いをしてたようだ…

数少ない突っ込み役、大事にして欲しいものだ。

>ぼっちょ視点<

「ありがとうございます。」

「射命丸は多分妖怪の山にいるわ、ただあそこは強力な妖怪がかなり居る…死なないようにね。」

とパチユリーに教えられた。

「ぼっちょ様…一つお願いがあります。小悪魔を連れて行って貰えませんかでしょうか？」

「へ？小悪魔を？」

あの図書館に居たあの娘を？

「そろそろ小悪魔にも名前、そして力が必要になってきます…ぼっちょ様と共に行けば、もしかしたら…」

「ああ、そういうことですか。大丈夫ですよ。」

「ありがとうございます。」

「待ってー!」

小悪魔が飛んでくる!

「小悪魔、今日からあなたはぼっちょ様の下僕よ。足を引っ張らないように頑張りなさい。」

「ふえ?あ…はい!」

「元気のある良い娘だ。」

「ぼっちょ様…小悪魔を頼みます。」

「はい!」

「…咲夜様…」

不安を隠せない小悪魔に、咲夜は笑顔で返した。

「いつてらっしゃい。」

「…はい！いつてきます！」

…こうして始まったぼっちょと小悪魔の冒険。

彼等に待つものとは！？

エピソード

射命丸文を追い、妖怪の山へ行く事になったぼっちょと小悪魔。

あきらめはなんだかんだとうまくやりながら生きる。

かいとはチート性能まっしぐら！

さて、3人の運命はどう傾く！

そして未だに名前だけ出演の博麗霊夢と霧雨魔理沙は一体いつにな
つたら出演出来るのか!?

『東方凶狂書〜まるきゅー×3の夢物語〜』第二章!

かみんぐすーん(言ってみただけ)

第二章予告

揺れる幻想郷。

暗躍する者達。

馬鹿×3!

早速新キャラ出演!

一体誰なのか!?

そしてこの小説は何処に行くのか!?

第二章 『幻想異変編』

…かみんぐすーん(二回目)

第一章完結！結局出演出来なかった霊夢と魔理沙（後書き）

次回予告！

第二章突入前にまとめ！

これを読めば登場人物だけは全部解る！…はず…（自信なくした

というわけで次回

「第一章完結時点の出演キャラ大解剖」

紫「ぶつちゃけるとキャラ紹介なのよね？」

作者「それは禁句」

第一章完結時点の出演キャラ大解剖（前書き）

第二章突入前に出演キャラまとめです！

第一章完結時点の出演キャラ大解剖

・あきら

能力

「心を具現化出来る程度の能力」

自分の思った事が現実になる事がある。ただし自分に関する事象のみ有効。

例：「危ない」と思えば相手の攻撃を回避出来ることがある。

「剣が欲しい」と思えば剣を手に入れる事が出来る。

スペルカード所持数：0

性格：突っ込みキャラ。

特記事項

- ・現在白玉楼にて幽々子・妖夢・衣玖と同居中。
- ・トラブルに見舞われやすい。

ぼっちょ

能力

「誰かを守れる程度の能力」

そのまんまだが、防御力は高くなっている。
スペルカードも防御型が多い。

スペルカード所持数（種類のみ）： 8枚

天盾『八咫の鏡』

短守『ミニミニ結界』

護法『神秘の護り』

護法『アンカーシールド』 矛盾『不殺の剣』

矛盾『守らずの盾』

矛盾『盾爪』

霊矛『喰盾爪』

性格：一途。早苗さんLOVE。

特記事項

- ・早苗さんを愛する。
- ・料理が上手い。
- ・現在小悪魔と共に妖怪の山へ向かっている。
- ・霊力を扱える。

かいと

能力

「役に立ちそうので役に立たない程度の能力」

とにかく無駄としか言えない能力を使える。「寝言で他人と話せる程度の能力」が確認されている。

「全てを拒絶する程度の能力」

一日一回限定で自分に不利な事象をなかったことに出来る。

スぺルカード所持数：2枚

拒絶『エデンの林檎』

拒絶『D・T・レーザービット』

性格：ロリコン。ハーレム万歳。

特記事項

・身体に『エデンの林檎』というものを宿している。ただしエデンの林檎は五日に一度しか使用不可能。

『エデンの林檎』

かいとに宿った『世界を破壊しかねない力』。
自己防衛機能も備えている。

自己防衛機能

『D・T・レーザービット』

『D・T・ソード』
『ブロウキンググローブ』
『プロテクトアーマー』

自己防衛機能は一日に何度でも使用可能。

力の一部

『エデンの林檎』

∴ 大爆発を起こし、周りを破壊する。

『ファイナルフュージョン』

∴ 自己防衛機能を扱い、『ハーレム王ガイガイガー』に変身する。

(エデンの林檎による大爆発を起こした後でも使用可能)

ガイガイガー時には『エデンの林檎』の力を一日に二度まで使用可能になる。

ただし一週間に一回限定。

・ガイガイガー

かいとが『エデンの林檎』の自己防衛機能を総動員して変身した姿。

ロリの為なら全てを破壊出来る。

・必殺技

『ブロウクンナックル』

ブロウキンググローブを飛ばし、相手を殴る。結構強い。

『デスアンドライブ』

エデンの林檎の力を一回分使い、特殊なフィールドを形成。動けなくなった相手を超高速の突進でピチユーンする。

双月奈落

能力

「空間を操る程度の能力」

自分が存在する空間を操る事が出来る。
爆発を無理矢理捻曲げたり出来る。

スペルカード所持数：2枚

切札『無時空間・虚空』

神剣『ラグナロク』

性格：他人思い。

特記事項

・ペドフェリア（嘘）

- ・結構不憫な状態に
- ・かいととは因縁関係…？

今まで出演した東方Projectオリジナルキャラ

(ちゃんと本編で台詞があるキャラのみ記載)

- ・早苗さん
- ・神奈子
- ・諏訪子…あーうー
- ・ルーミア
- ・文…あやややや
- ・妖夢…みよん
- ・幽々子
- ・衣玖さん
- ・レミリア
- ・フラン
- ・咲夜
- ・小悪魔
- ・パチュリー
- ・美鈴
- ・萃香
- ・勇儀
- ・桜
- ・慧音
- ・妹紅
- ・輝夜
- ・永林

・てゐ
・うごんげ
・にとり
・紫
・藍
・橙

第一章完結時点の出演キャラ大解剖（後書き）

次回予告！

緊急座談会！

この小説に出演していないキャラ達が反逆する！

というわけで次回

「緊急座談会！」

アリス「私達を早く出さないよ」

作者「次回弁解します」

緊急座談会！（前書き）

とにかく緊急だった！

緊急座談会！

霊夢「やっと二章突入ね」

魔理沙「やっと私達の出番が来たぜ」

作者「はい」

霊夢「…でもね、忘れちゃいけないことがあるわ。…私達以外にも『名前すら出てこないキャラ』っているでしょ？さらに最近空気になっちゃったキャラとか。」

魔理沙「そうだな」

ルーミア「そーなのかー」

霊夢「例えばルーミアとか。最初の方でかいととか言う人を瞬殺したくらいしか出番なかったじゃない。」

ルーミア「出番なかったのだー」

魔理沙「まだ居るぜ。洩矢神社の神奈子と諏訪子だって最初だけの出演じゃないか。」

神奈子「そうよ、早苗はちよろちよると出てるけど、私達は出番なしよ。」

諏訪子「早く出たいー!」

霊夢「紫は出まくってるからいいとして」

紫「呼んだ?」

霊夢「あ、紫。ちょうどいいわ、藍と橙を呼んで。」

紫「解ったわ、少し待ってて。」

シユン

霊夢「萃香もだよね?」

萃香「そーだよ！あたし、何時になったら出れるんだよー？」

勇儀「いや…あたしもだね。」

椛「私もですー！」

魔理沙「こう考えると、一瞬しか出てこないキャラっていっぱいいるんだな…」

藍「私もそんなに出てないよ。」

橙「私もー！」

霊夢「あ、藍が来た」

魔理沙「…これくらいだっけ？一瞬だけ出たキャラって？」

四季映姫「…あの…私もなんです…」

所変わって…

アリス「私は名前すらないんだけど」

幽香「そうね。紫や幽々子を出しておいて私を出さないなんて…作者にはお仕置きね」

アリス「（…なんか怖いオーラが…！）さて、此処は私達『小説に出しやがれ前線』の本部なんだけど…」

大妖精「…えっぐ…」

チルノ「大ちゃん大丈夫…？というかなんでさいきよーのあたいと大ちゃんが出てないのよ！」

プリズムリバー三姉妹「私達も出てないよ」

3 サニールナ・スター
妖精「私達も…」

地霊メンバー（勇儀・パルスィ以外）「いや…私達も…」

星蓮船メンバー「…」

パルスィ「私を出さないなんて…妬ましい…！」

アリス「（まとまりがないな…）ま、まあ私達で作者に訴えればちやんと答えてくれるはずよ！行きましよう！」

リグル「…永夜抄メンバーで出てない僕は…」

みすちー「…リグル、私もよ…って置いてかれたー！」

メデイスン「待ってー！」

天子「…私は忘れ去られてるのね…」

作者の家

アリス「ちょっと来なさい！」

作者「何その喧嘩前の呼び出しみたいなの……って、うわあああああ
！……！！」

幽香「紫、ありがとう。」

紫「私も作者という馬鹿を見てみたかったからお安い御用よ。」

アリスの家

アリス「さて！何で私達は名前すら出て来て来ないの！？教えなさい
！」

幽香「早く教えないと一枚ずつ身ぐるみ剥ぐわよ？」

作者「……あのー……」

アリス「？」

作者「現実問題ですけど、第一章で全キャラ出すのは流石に無理があるでしょう。…第一章だけでどれだけ話数を広げるつもりですか？」

アリス「確かにそうだわ…」

作者「それに、第一章でスポットライトすら当たらなかったキャラは第二章以降でちゃんと当てるようにプロット組んでるんですよ？結構大変なんですよ？

例えば、リグルは第二章冒頭で」

リグル「出るのは嬉しいけどネタバレやめてえええ！」！

幽香「私は？」

作者「…どうしても聞きたいですか？」

幽香「是非聞きましょう。」

作者「それはまだ言うなああああああ！……！！！」

こいし「あれ？私…凄い良い役だ！」

空「うん！…うん？」

燐「うにゃっ！？私の名前がない！」

さとり「違うわ燐。ここにあるじゃない。』おりん』って。」

燐「あ、あった！」

聖「でも私の名前が…」

星蓮船メンバー「…（ずーん）」

作者「星蓮船メンバーの皆さんはもうちょっと待って下さい…」

みすちー「私…雑魚扱い…（ずーん）」

作者「ま、まあ、私も頑張っていますのでそれで勘弁してください
……」

天子「許さない！マグニチュード最大でその身に刻め！！」
『全人類の緋想天』！！」

作者「ぎゃあああああ……！！！！！！！！！！」

聖「……えっと……」
『こんな馬鹿の作品はおかげさまで第二章に突入出来ました。読者の皆様には御礼を申し上げます。第二章にご期待下さい！』……だつて。
だつたら私を出しなさい！！！！！！！！！！」

緊急座談会！（後書き）

次回予告！

第二章突入！

悲願のあの人が出演！

というわけで次回

「プロローグ 異変の始まり」

奈落「お楽しみに！（まともな予告だな…）」

プロローグ 異変の始まり (前書き)

第二章突入！

皆様お待たせしました！

ついにあの人が出演です！

プロローグ 異変の始まり

プロローグ

「はあ…やっと出演なのね。」

此処は幻想郷にあるもう一つの神社…博麗神社。

そこで毎日の日課、神社の掃除をしている紅白の巫女が。

元祖腋巫女、博麗はくれい霊夢れいむ。

今日も霊夢はせつせと箒で地面を掃いている。

「…今月の収入…ほぼ0…」

霊夢はがっくりと肩を落とした。

神社運営において、お賽銭の額というのはかなりその後の神社運営に大きく影響を与える。

そしてお賽銭の金額… 1000円。

たった1000円では神社運営なんて到底無理だ。

「…また妖怪退治しなくちゃ…」

実は霊夢は、博麗神社の巫女だけでなく妖怪退治もやっている。

…お賽銭よりこの妖怪退治の方が収入が安定してるとは、他人には絶対言えないのは秘密。

「おい、霊夢ー！」

空から声がしたかと思うと、声の主は既に霊夢の前に降り立っていた。

「魔理沙じゃない。どうしたの？」

そう、いかにも「私は魔法使い」と言わんばかりの黒と白の服。片手には箒。

この少女こそ霧雨魔理沙である。

「仕事、見つけてやったぜ！これだ！」

「ほんと！？やったわ！」

霊夢は魔理沙が持っていた一枚の紙を取って読んだ。

「…え？」

霊夢は呆気にとられた。

これが問題の紙に書かれていた内容だ。

【依頼…『謎の異界人を討伐せよ』】

【難易度…ルナティック】

【依頼人…いつも寝てる大妖怪】

「最近幻想郷中を荒らし回るとんでも異界人がいるの、この間は紅魔館が吹き飛んで、次は永遠亭。」

もう許せないわ！お金なら幾らでも積むから、奴を倒して！」

【報酬：1,000,000円】

「ひゃ、100万円!!!?」

「私はもう受注したぜ！でもな…なかなか見つからないんだよ…」

「相手の特徴は？」

なぜか霊夢、本気モード。

「今の所、名前はかいと、異界人つくらしいしか解ってないんだ。」

「異界人なら慧音に当たってみなさい。何か知ってるかもしれないわ。…さて、私もこの依頼、受注するわ。」

「それはありがたいわ。」

霊夢が後ろを向くと、そこにはいつも見る紫が。

「紫…！」

「その異界人を倒さないと…幻想郷が壊れるかもしれない。」

「そこまでの奴なの…！？」

「ええ。だから私は依頼したのよ。幻想郷中の力さえあれば…彼を倒せる！」

「…解った。私も探してみるわ。」

幻想郷を壊しかねない力を持つ存在とは何だろうか。

霊夢は幻想郷を壊しかねないというその存在に一瞬だけ興味を持った。

だがその思いは消え、霊夢は魔理沙と共に行動に出た。

一方。

「ふう……」

青年は大地の遥か下、地底にいた。

「……これが『凶狂書』か……」

彼は一冊の堅く封じられた本を持っていた。

「まさか、本当にあつたとはな……だがこれがあれば、俺はさらに強くなれる……!!」

そこに、2人の少女が現れた。

「侵入者発見！侵入者発見！迎撃を開始する！」

「あなたは私とどうしたいの…?」

まるで噛み合っていない二人だが、強さはほぼ同等である。

一人は黒い翼を拡げ、右腕が何か棒のようなものになっている。

もう一人は目が虚ろな感じで、首から下げている何かは目を閉じている。

丸っこい帽子をしている。

「侵入者！名前を言え！」

「双月奈落だが…そういう君達は？」

「私は靈鳥路空れいじゅうくう！な…お前を倒しに来た！」

名前すら覚えてくれていないのか。しかもさっき言ったのに。

「私は古明路こめいじいし…」

「空にこいしか…まあ…」

奈落は戦闘体勢をとった！

「相手には不足はないな！」

プロローグ 異変の始まり (後書き)

次回予告！

あの3人は今どうしてるのか!?

そしてかいと、なんか狙われてるぞー!?

というわけで次回

「一体何故かいととは狙われているのか？」

魔理沙「大暴れするぜ！」

作者「やめてー！」

一体何故かいとは狙われているのか？（前書き）

前回のあらすじー！

・ 霊夢、魔理沙登場

・ 奈落…何やってるの？

今回までプロローグみたいなものと思って下さい。

一体何故かいとは狙われているのか？

> かいと視点 <

あれから一週間。

「永遠亭の悲劇」が起きてから今日でちょうど一週間。

俺は慧音の家に居る。

…何故かって？それは…

【回想】

俺が永遠亭を破壊する為にぶっ放した『エデンの林檎』。

その光、さらにガイガイガーにファイナルフュージョンした際のいろんな爆風なりなんなりが見られていたらしく…

ついにあの八雲紫の逆鱗に触れてしまった。

八雲紫は幻想郷中に「依頼」と称して俺の討伐を命令。

そして幻想郷中の妖怪や魔法使いに追い掛けられる始末。

道中でリグルとかいう妖怪と、アリスとかいう魔法使いをボコボコにした、というかせざるを得なかった。

慧音はその事態を鑑みてくれて、今妹紅と共に俺を匿ってくれている。

以上、回想終わりっ！

「…困ったな…今やかいとを討伐しただけで100万円なんて…」

この幻想郷では、100万円あれば一生食事には困らないくらいだ。

「慧音、今からかいとを潰す？」

「ひいつ!？」

俺よりお金が大事なんですか!？

「そんな悪い冗談はやめなさいよ妹紅…でも、何時此処がばれるか…時間の問題だわ。」

慧音は「うーん…」と呟いたきり黙ってしまった。

やばい…慧音の考える姿…

濡れるっ！

違う、萌えるっ！

結構そそのめるものがある…殺傷力は異常だな。

「…でもさ、なんで紫はかいとを倒そうなんて考えたんだろうな？」

「それは簡単な話よ。」

この幻想郷は言ってしまうえば八雲紫の庭みたいなもの…。

自分の家の庭を荒らされて普通でいられる？そういうことよ。」

「ふと思ったんですが…この幻想郷で最強って言われる人って誰なんでしょうか？」

そのかいとの疑問に、慧音は答えた。

「…候補は4人ね。」

一人は幻想郷を創り出したと言われる張本人…境界を操る大妖怪…八雲紫、あなたを追ってる人よ。

もう一人…孤高にして花を愛する妖怪…彼女の怒りを買った瞬間、待つのは死…かきみ ゆうか風見幽香。

今の幻想郷を支える人間…数々の異変を解決した博麗神社の巫女、博麗霊夢。

幻想郷中を飛び回り、霊夢と共に幻想郷の異変を解決した第二の英雄…魔法使い、霧雨魔理沙。

多分4人ともあなたを追い掛けるわ。出会ったら全力で逃げなさ

い。」

「何てこった…」

何処行っても追い掛け回されるのは辛い。

「…そうだ！妹紅、貴方に頼みがあるの！」

「え？どうしたの？」

「あのね…」

>あきら視点<

白玉楼生活…もう何日目？

とりあえず俺は衣玖さん、妖夢、幽々子さんのお世話になっている。

毎日、妖夢と手合わせしているのが幸を奏したのか、最近反応速度が格段に上がった。

さらに、自分の能力についても理解を深める事が出来た。

どうやら能力を使って作れる武器は…

鎖（主に相手の行動を制限するのに使う）・剣・トンファー・ハンマー・槍

のようだ。

そんな中、衝撃的なニュースが飛び込む。

「かいとが追われてる!？」

「ええ。…どうやら懸賞金までかけられてるみたい。かなりまずいわね。」

幽々子さんは神妙な顔をしてそう言った。

「…どうすればいいんですか…!？」

「懸賞に参加するの。」

「…え!？かいとを捕まえるんですか!？」

「やーねー。違うわ、かいと君を匿うのよ。この白玉楼なら、きつとやり過ごせるわ。」

でも、情報がないと見つけるにも見つけれないでしょ？だから参加するのよ。そうすれば最新情報は掴めるわ。」

「ああ！」

幽々子さん凄い！

「まずは応募ね！マヨヒガに行けば出来るわ！」

「…はい！」

「一体何故かいは狙われているのか？」（後書き）

次回予告！

あきら、ぼっちょの近況が判明！

さて、彼らはどう動くのか！？

というわけで次回

「守られる者と疑惑の依頼」

霊夢「見て欲しいわね」

早苗「そうですね！」

ルミア「そーだねー」

守られる者と疑惑の依頼（前書き）

前回までのあらすじー！

・あきら、かいと討伐依頼に参加（勿論助ける為）

・かいと、慧音の家に

守られる者と疑惑の依頼

>ぼつちよ視点<

…妖怪の山への旅を続けている僕と小悪魔…流石に名前がないのが
かわいそうで「こあちゃん」と名付けたが…。

僕たちはひたすら射命丸文を探している。

少し話を聞いて欲しい、僕はこあちゃんのお守り、そして練習相手を
を引き受けたわけだが…

流石、悪魔と言うだけあり、霊力は普通に僕より上だ。ただ扱い方
がわからないようで、霊力に振り回されている感じが否めない。

だから少しずつ霊力をコントロールする練習をしているが、少し前
に弾を撃てるようになってからこれっきり変化はない。

霊力のコントロール出来る量は間違いなく増えているはずなのに。

そのせいかこあちゃんは落ち込んでいる。

僕はきちんとこあちゃんに向き合って練習に付き合うことしか出来
なくて、歯痒い思いをしているのは本人には言えない。

「…こあちゃん、落ち込む事はないんだよ？ゆっくりやっていけば、
いずれ上手いくよ。」

「…そう…ですよね。」

「焦ったら何にもうまくいかない。だから…」

「…」

困った。

どうすればよいものか。

そこに…

「ん？おいしそうな人間だー！」

黄色の髪、赤い目の少女、ルーミアが現れた。

「この近くは妖怪の山なのだー、人間は入っちゃいけないのだー！」

「ルーミア、場合によっては僕たちは妖怪の山に入らなくて済むかもしれない。射命丸文が何処にいるか、知ってるかい？」

ルーミアが文の居場所を知っていれば危険を回避できるかもしれない。

「烏天狗？知らないのだー。」

「解った…ごめん、ルーミア。どうやら僕たちは妖怪の山に入らなきゃいけないみたいだ…」

「駄目なのだー！入るんなら食べちゃうぞー！」

突如、ルーミアが大量の弾幕を放つ。

「天盾『八咫の鏡』！」

弾は盾に弾かれ、地面を砕く。

「スペルカード使えるのかー？」

「ああ、少しねー！」

「面白い人間だー！」

弾がぼつちよを襲う！

「くっ…！埒があかない、矛盾『盾爪』！！」

ぼつちよの右腕に鉄が現れる！

「はああああ！！！」

ルーミアに向かって跳躍、鉄をルーミアに向ける！

「わぁー、危ないのだー！」

ルーミアはかわす！

そしてそのまま逃げていった。

「今度会ったらボコボコにしてやるのだー！」

「はあっ…はあっ…」

こんな戦いが連日続き、ぼっちょはかなり消耗していた。

「大丈夫かい、こあちゃん？」

「…はい…」

こあちゃんは顔を背け、そう返した。

>こあちゃん視点<

…また私の為に、ぼっちょは戦ってくれた。

…まだ弾しか撃てない…それに連射も出来ないから、正直役立たずだ。

能力にもまだ目覚めていない…霊力もそんなに扱えない私。

そんな私を守るのにボロボロになったぼっちょよ。

…私はそれを見てると悲しくなる。

自分が非力なばかりに、守られる事しか出来なくて…

>あきら視点<

「此処で待てばいいのか…?」

俺は何の変哲もない草原に居た。

周りには沢山の妖怪や人間が居た。

「あの人間を殺せば100万円だろ?ちやらいちやらい!」

「俺が捕まえてやるよ!」

…依頼主とはどんな人なのだろうか。

と思った瞬間、空が裂けた。

中から舞い降りたのは紫のワンピースを着た、妖艶な女性…いや少

女？

歳はかなり若そうだが…

傘を差し、蝶結びの飾りがある帽子を被った、金髪の人だ。

「お集まり頂きありがとうございます。私が依頼主の八雲紫よ。」

紫とか言う人が話し始めた時、周りに緊張が走ったのが何となく解った。

「紫様が…！？」

「それほど事態は深刻なのか…！？」

そんな小声があちこちで散らばった。

「知つての通り、かいとと言う名の異界人が今、幻想郷を破壊しようとしているわ。」

彼は紅魔館を破壊し、さらに先日、永遠亭も破壊した極悪人よ。」

「なっ…！？」

いくら何でも、かいとがそんな事を自分の為だけにやるような奴ではないことを、あきらは重々解っていた。

「とうわけで、この幻想郷の未来の為に…かいとを討つよ。情報文が通達するわ…皆はそれを元にかいとを探しだし…殺しなさい。」

「…」

しかし、何故かいとを殺す？

幻想郷はかいとが壊せる程脆いものなのか？

「…きな臭いな…」

あきらは誰にも聞こえないようにそう呟いた。

守られる者と疑惑の依頼（後書き）

次回予告！

かいとの状況に変化が！

慧音の頼みとはっ！？

そしてあきら、紫と邂逅！

一触即発の緊迫した状況で、あきらはどう動く！？

というわけで次回

「逃亡の旅」

紫「…（なんか冷たいオーラが）」

藍「紫様、なんか言っておさいよー！」

紫「あ、ごめん藍、次回の台本を基に練習してたのよ。」

藍「…びっくりさせないで下さい…」

逃亡の旅（前書き）

前回までのあらすじー！

・あきら、紫という存在を見る

今回少々アレなシーンがありますが、コメディーっぽくしてるので大丈夫でしょう。∴大丈夫だよね？

逃亡の旅

> かいと視点 <

「…で妹紅？どうして俺達は慧音を置いて行ったんだ…？」

俺と妹紅は薄暗い道を走っていた。

「あのね…」

…慧音の家に居続けても、いつかは俺の存在はばれる…そう考えた慧音は、俺と妹紅を逃がし、「かいとは何処にいるか」という質問に「そんなもの知らない」と言い張ると言うのだ。

「それじゃ慧音は…！」

「かいとを守る為にそうしたんだ…それ以外に方法はなかった。」

「くそっ…！」

慧音は真面目な人間だ、嘘をつくような人じゃない。だがそれをすると言っただ、相当な覚悟が必要だ。

「…今は逃げるしかねえのか…！」

待ってる慧音…今は無理だが、俺は必ず助けに戻るから…！

俺と妹紅は丸3日程道を行った…逃亡の旅だ。

けれど、流石にもう限界だ。

妹紅も元気そうに振る舞っていたが、疲れが見て取れた。

「一回休もう。このままじゃ追っ手が来ても振り切れなくなる…」

俺はそう提案した。

妹紅は最初は反発していたが、考えを理解してくれたのが、「解った。」と返してくれた。

俺は妹紅が水浴びしている間、追っ手が来ないか見張っていた。

…幸いにも物音一つせず、暫くして妹紅が帰ってきた。

「久しぶりにスッキリしたー！」

「おう、そりゃ良かったな…っ!？」

何気なく妹紅の声をする方へ顔を向けたのが間違이었다。

…もこたんすっぱだか！

「うなきやふたよあしにみ!？」

「言葉になってないぞ…っ！か裸見ただけで何そんな顔を真っ赤に

してんだ？タコみたいだぞ。」

あの、妹紅さん、こっちの世界じゃこれは危ないんですよ！

「だ、だって…すっげー…とにかくすっげーんだ…」

…色気が。

「…ま、私の裸でそこまでなるんなら、生粋のロリコンじゃないんだな。」

「…」

…何だろう、凄く負けた気がする。

しかし妹紅のあれは凄かった、それだけは確かに言えた。

>あきら視点<

俺が八雲紫から指名手配書みたいな紙を貰い、早速かいとを探そうとした時だった。

「待って。」

突然呼び止められた。

「…何です？」

「あなた…異界人ね？」

その言葉は、あきらの身体を締め付けた。

「!?!」

何故解った!？

「私が自己紹介した時…周りはざわついていたけれど…あなただけ私の目をずっと見ていたわ。…私の力を知らない証拠ね。」

「…だとすれば、八雲紫、あなたはどつするんです？」

威圧されては負けだ…だがこれは賭け。

相手がどれだけ俺を知っているか…場合によっては俺がかいと友達だつて知っている恐れがある。

精一杯、自分を奮い立て、俺は強気に出た。

「…別に何もしないわ。ただ珍しいと思つてね…『自分の友達を倒す』なんて事、普通はしないわよね？」

「…！」

やはりばれていたか！

「…凶星ね。これ、私の勘でものを言つただけだ。」

「…！」

勘で此処まで当てるか普通！？

「…さて、私はあなたと同じ異界人のぼっちよに出会つてるんだけ

ど…」

ぼっちょに!…?

「率直に聞くわ。あなた以外に異界人はいるのよね?」

「…」

「いるんでしょう?」

ズンっ!…!と身体に鉛が乗せられた感じがする。

「…ふふ、可愛いわね。頑張って助けてあげなさい。…でないとな人が殺しちゃうわよ?」

「…」

これ以上は何も聞けない。いや、聞いちゃいけない気がした。

俺は震える身体を意識だけで抑えながら紫のもとを去った。

「…藍。あのあきららという異界人…どう思っっ？」

「…あの人は化けます…狐のように。」

「九尾の狐のあなたがそんな事言っなんてね…ふふふ。」

紫は空を切り裂いて、こっ続けた。

「だから異界人は面白いのよ。」

逃亡の旅（後書き）

次回予告！

奈落視点のみのびっくりストーリー！

『凶狂書』って何なのさー！

というわけで次回

「狂気の塊」

空「うん！…うん？」

狂気の塊（前書き）

前回までのあらすじー！

・かいと、なんか悲劇か喜劇か解らない展開に

・あきは旅に

…どうしてもコンセプト上、奈落とかいとはちよくちよく中二が入ってしまっ…

狂気の塊

> 奈落視点<

「ふふふ…あはははは！もつと怯えなさい！」

「ちいつ…！」

帽子の少女…こいしの能力『無意識を操る程度の能力』による不意打ちは確実に奈落の体力を削っていた。

…しかし仮にこいしの能力がなくとも、奈落はもう一人の方に意識を集中せざるを得なかったのだ。

空の能力…『核融合を操る程度の能力』の圧倒的な力の前に。

「貴方も私と融合フュージョンしましょ？」

右腕の棒が奈落に向けられる。

『…お前には力が足りない。』

『しかし、お前は私を解き放とうとしてくれた…【支配者】の力を、お前に貸そう。』

突然奈落の近くに横たわっていた本がバタバタと暴れ出し、ページがめくられる。

あるページを開いた本から朱い何かが奈落に吸い込まれる。

「…そうか。」

俺には力があつた。

なのに、良心やら規律やら妙ちくりんな鎖でそれを眠らせてしまっていた。

…そんなもの、棄ててしまえばよい。

俺に必要なのは…

「狂気…破壊って奴だあ!!」

奈落から朱いものが奔流となって溢れ出す！

「な…何あれ…！？」

「…ああー、めっちゃくちゃスッキリしたー…そうだ。」

奈落は目をこいしに向けた。

その目はついさっきまでの紫の瞳などではなく…真っ赤、血の色をした朱。

「まずはデメエを壊そう、そうしよう。」

たんと足に力を込め、空間を操りこいしに肉薄する！

「切札『無時空間・虚空』」

ナイフがこいしを襲う。

しかし、ナイフの密度があまりにも疎ら過ぎてこいしは楽々とかわ

す。

その瞬間、こいしは理解した。

彼の目標は自分ではなかった事に。

「空！逃げて！！」

「え？」

こいしの叫びと同時に空の真後ろに現れた奈落。

「まずはテメエだ。狂気『無我無宙』」

空が、堕ちた。

空は全身から鮮血を噴き出し、まるでドミノのようにはたりと倒れる。

「空!？」

「自分の心配しやがれこの根暗が」

次の瞬間、こいしを包む暗い炎。

「憤怒『殺戮の火炎地獄』(インフェル)」

こいしも一撃で倒れた。

「…これでも加減したんだぜ?…死んでないだけマシと思いやがね。
…わっ。」

奈落であつて奈落でない者は瀕死のこいしの首を掴み上げ、こう言
つた。

「この私の配下になると言つのなら生かしてやってもいいんだが。」

「う…あ…」

「どうする？ テメエが私の配下になるのなら、あそこで野垂れ死に
しそうな奴も助けてやるよ。」

こいしには選択肢がなかった。

空には死んで欲しくない。

「…わか、つた…」

「契約成立だな。」

空を包む朱い結界。

「2時間で治る。まあ、治り次第こき使つてやるからありがたく思
え。」

【凶狂書内部】

「…ここは…？」

奈落は白い空間に居た。

『かつての支配者の世界。』

そこに現れた朱い何か。

もやもやしてはつきりしない何か。

「何だ…支配者…？」

『そうさ、この幻想郷を創りだし、そして支配した6人の神に近い存在、それが支配者だ。』

…双月奈落、貴様も知っている今の支配者…すなわち八雲紫、博麗
霊夢、風見幽香、四季映姫、西行寺幽幽子…』

「一人足りない…？」

「いや、厳密に言えば二人だ。…私という存在、そして…この幻想郷に眠りし最強にして最凶の者…人間の皮を被った異形…そして神えんげつ さくら！縁月桜！！

幻想郷では縁月桜こそが最強の支配者…王たる存在だったのだ！！

私はただ最強たる支配者に従うだけの人形でしかない。…だが。双月奈落よ、貴様は私を解放してくれた、礼を言うぞ。貴様に力を貸し、代わりに身体を頂いた…おっと、一生返さないわけではないぞ。大儀を成し遂げれば、身体は返そう。

…縁月桜を復活させれば、な。』

狂気の塊（後書き）

次回予告！

かいと、ついにあの有名人と出会う！

そう、この人こそさいきよー！

というわけで次回

「さいきよーはとにかくさいきよーだねっ！」

大妖精「見て下さいねー！」

さいきょーはどこかくさいきょーだねっ！（前書き）

前回までのあらすじー！

・少々雲行きが怪しくなりました。

PV20000、ユニーク2300突破！

…すげえ…こんなに読んで下さった方々がいるのか…

さいきょーはどこかくさいきょーだねっ！

>かいと視点<

あれからまた数日。

特に妖怪に会ったということもなく、俺と妹紅は逃避行を続けていた。

…が、少々まずいことになった。

「あれ…」

俺と妹紅は湖のほとりを歩いていたのだが、湖で飛び回る少女に目が行ってしまった。

…第二章突入して初めてのの口りだ。

ところが問題があった。

その少女の服装や髪色…どこかで見たことがある青・白・青。

そして左右三枚ずつの小さな翼…あれは氷？

つまり、その少女とは…

「あたいつたらさいきょーねっ！」

そう、チルノだ。

史上空前究極のまるきゅー、チルノ。

「ん？あれって…！」

やばい、気付かれた！

チルノがこちらに向かってくる！

「逃がさないよ！氷符『アイシクルフォ…』」

飛んでた鳥に蹴飛ばされ、チルノは湖に転落。

「…これは運が悪いな…」

流石に不憫なのでチルノが帰ってくるのを待ちました…。

「仕切り直しよ！氷符『アイシクルフォール』！」

氷の刃が、かいとを襲う！

「ちいつ…！拒絶『D・T・レーザービット』！」

刃を相殺する光！

「まだだっ！新技行くぜ！拒絶『エデンのどんぐり』！」

バラバラと、チルノの周りに小さな球が漂い…！

「ボンっ！…だ…」

ちょっと風船が破裂する程度の威力しかないが、そこは数でカバー…

ところがチルノには一個で十分だったようだ、というのも…

「ひゃあ！風船が爆発したあ！」

なんか効果絶大。

「…」

ボン！ボン！ボン！

「うわぁ！あちこちで爆発するう！」

「…（ニヤリ）」

ボン！ボン！ボン！ボン！

「参りましたあ！だから爆発やめてえ！」

…なんか勝っちゃった。

「あ、あんた、めっちゃくちゃ強いわね…さいきよーなの？」

「さいきよー…なのかな…。」

「くやしっ！あたいがさいきよーなのにつ！」

「…チルノ、そろそろ行っていいかい？俺、狙われてるんだよ…。」

「狙われてる？」

あれ？まさかチルノ…懸賞の事知らないのか？

「そうなんだ。このままじゃ妖怪に食べられちゃうんだ。」

嘘はついてない、きつと。

「ふーん……」

そこに、大量の妖怪が！

「いたぞ！奴だ！！」

「やべっ、来たのか！逃げるぞ妹紅！」

「おう！」

「チルノも！危ないぞ！」

「…あたい、行かないよ。」

「はあ！？」

今この瞬間、妖怪達が迫っている。

…俺達は逃げる事に成功した、だが…チルノは…

「くそ…チルノ…」

同時刻。

「へへんっ！あたいったらさいきょーねっ…！」

妖怪達をボコボコにしていました。

「チルノちゃん、大丈夫？」

「あ、大ちゃん！見て見て、あたいがみんなやつつけたんだよ！」

「凄いね！」

死亡フラグ？そんなの知るかー！という感じのチルノでした。

さいきょーはどこかくさいきょーだねっ！（後書き）

次回予告！

一つだけ言います…

小悪魔ファンの皆様申し訳ありません…

小悪魔にオリジナル設定足しました…

というわけで次回

「こあちゃん最強化…？」

「こあちゃん」…え？「

「あちゃん最強化…？（前書き）」

前回までのあらすじー！

・チルノ登場、死亡フラグという幻想をぶち壊した

…小悪魔ファンの皆様申し訳ありません…

この設定…大丈夫なのか…？

「あちゃん最強化…？」

>ぼっちょ視点<

「さて、貴方は死ぬか生きるか…どうしますか？」

「ちいつ…！！」

目の前に居るのは天狗の犬走椋。

妖怪の山の侵入者を追い払う役目をしているようだ。

事情は説明したのだが、寧ろそれで椋の怒りを買ってしまい、無理矢理にでも倒して進まなくてはならなくなった。

「ぼっちょよ！」

「…まだ僕は死ぬ訳にはいかない！矛盾『守らずの盾』！」

ぼっちょは盾を展開する！

「…スペルカードか。しかし…そんな脆弱な盾では…！」

耳を生やした白髪の少女は剣をぼっちょに向ける。

「私の剣は砕けない！」

少女は剣を勢いよく振るう！！

「ぐっ！！」

盾が真っ二つに切り裂かれ、ぼっちょはよろける！

「…とどめよ！」

ぼっちょの腹を目掛けて剣を突く…！

「えいつ！！」

少女を襲った不意打ちの弾！

「…こあちゃん!？」

それはこあちゃんのものであった!

「…あなたも死にたいのね？」

剣先がぼつちよからこあちゃんに向けられる。

「…ぼつちよは私を守ってくれた…今度は私が守る番だ!」

「心意気は買いましょう…ですが!」

少女は剣をぐつと握る!

「天狗の私、犬走椀の敵ではないっ!!」

そのまま駆け出す椀は威風堂々たる有様!

「負けない…私は負けない!」

弾を放ち、牽制する!

「そんな弾でっ!!」

弾を剣で弾き、こあちゃんに切迫!

「沈めっ!!」

「やらせない!矛盾『盾爪』!!」

「きゃあっ!!」

椀を吹き飛ばす鉄!

「ぼっちよ!!」

「…ありがとう、隙さえ出来れば…いけるか…!!?」

「…やりますね…!!」

椀はすっと立ち上がる。

一方、ぼつちよはかなり体力を消費していた…霊力もそろそろ切れそうだが、彼はそう感じ…賭けに出た！

「…こあちゃん！…今ならいけるかもしれない…！頼みがあるんだ！」

「へ！？」

「…霊力を君に注ぐ！…か八か、君の能力を引き出す！」

「ええっ！？」

「…今の僕じゃ彼女に勝てない…けど、僕以上の霊力を持つこあちゃんなら！」

こあちゃんは覚悟を決めた。

「…解った！」

「行くよ！…うおおおおお！…！…！」

ぼっちょの霊力がこあちゃんに注がれる！

「…仕方ないわね。此処まで頼まれたからには出ない訳にはいかな
いね。」

こあちゃんの口調が変わる…

「こあ…ちゃん？」

「…ふふ、私のほんとの名前は違っただけだね。でも私はその呼び
方、好きよ。」

椀は何か異様な感じがした。

「何…あれ…？」

さっきまでの相手とは違う、本能がそう警告していた。

「…私を助けてくれたぼっちょに教えてあげるわ。私の名前は…セ
ルティ。」

セルティ・ツエッペリン…レミリアと同じツエッペリンの末裔よ。」

ドッ！！！！と空気の流れが変わる！

瞬間、こあちゃんが居たはずの場所に黒い翼を広げた女性が！

見た目から見てこあちゃんをそのまま大人にした感じ…だが雰囲気は鋭い刃のよう！

「私の能力は『五感を操る程度の能力』…つまり、味覚・視覚・聴覚・触覚・嗅覚を全て私の思い通りに出来るわ。…さて、犬走椛だっけ？…逃げるなら今のうちよ？」

「逃げるなんてしない！天狗の誇りに賭けて！」

椛は剣を振りかぶる！

「では私も、ツエツペリンの末裔としての誇りに賭けて勝たせて貰うわ。響音『ハウリングノイズ』」

椛の真下に現れた黒い魔法陣！

「不協和音を奏でなさい。」

杖の頭に突き刺さる音！

「ああっ！あああっ！」

頭に直接魔力を込めた不協和音を聞かせ、頭にダメージを与える！

「…和音に。」

杖はぱたりと倒れた。

「…セルティ…」

「今まで通りこあちゃんて構わないわ。大丈夫。彼女は気を失ってるだけよ。しばらくすれば目が覚めるわ。」

「…すごく…強いんですね…」

「…ふふっ。あなたは優しいね。」

「え？」

「…ごめんね、そろそろ戻るわ。」

女性の顔が、馴染みのある顔に戻る。

「あちゃん最強化…？（後書き）

次回予告！

セルティって何者？

そしてあきはついにかいとを探す旅に！

というわけで次回

「旅っていいよね…でも大変なんだよね」

あきら「行きますか！」

旅っていいよね…でも大変なんだよね（前書き）

前回までのあらすじー！

・こあちゃん最強化

暫く忙しくなるので一日一回程度の更新になってしまいます…ご了承下さい…

旅っていいよね…でも大変なんだよね

>あきら視点<

「…上白沢慧音を当たれ、か…」

流石に何も情報がないのは辛いので、八雲紫に情報源はないかと聞いてみた所、「人里にいる上白沢慧音を当たってみたら？」と言われた。

「…人里、か…」

此処からは少々遠い。

3日程、時間がかかるようだ。

俺は旅仕度をして出る事にした。

「こんにちは、人間さん。」

「…誰だ？」

マジで誰か解らないが、小さなかわいらしい妖精みたいなものを2人連れた山吹色の髪の少女。

頭にはカチューシャ、片手は分厚い本を抱えている。

「私はアリス…アリス・マーガトロイド。魔法使いよ。」

「アリス？」

ああー、いたねそんな人。

「俺はあきらだ。異界人って事を除けば普通だ。」

「異界人…そういうえば、あのかいって奴も異界人だね。」

「…そうだな。」

一瞬だがアリスから憎しみが感じられた…何だ？

「どうしてアリスさんはかいとを…？」

「簡単だわ。仕返しよ。」

「…へ？」

何でも、森にいるリグルとかいう妖怪をかいとが虐めていたらしく、それを止めようとアリスが戦いを挑んだ所、返り討ちにあっただらうい。

「…きつと襲われていたんだな…」

普通に考えて、かいとが他人を虐めたシーンなんて見た事がないため、きつと襲われたと考えるしかない。

「…まあ、私は彼を呪い殺せばそれでいいんだけど。」

「…かなり物騒だな…」

「かいとを探すんでしょ？私もついていくわ。」

「あ…ありがとうございます。」

なんか人が増えました。

> 奈落視点<

「治ったか。じゃ行くぞ。」

空とこいしを一撃で倒した狂気の塊は、地底を去る…

次なる目的の為に。

>ぼつちよ視点<

「うん…？ぼつちよ…」

「こあちゃん！大丈夫！？」

「うん。大丈夫。…セルティは何か言ってた…？」

「僕が優しい人だとか…」

「…そっか。セルティもぼつちよを気に入ってくれたのね。」

「セルティって…どんな人なのかい？」

「…私の能力の全て…もう一人の私…それがセルティ。」

セルティは私が命の危機に晒された時に現れていたけど……なんでぼつちよの霊力で…？」

その時、こあちゃんに異変が起きた。

頭を押さえるこあちゃん。

「う…！ぼっちょ…お願い…もう一度霊力を私に…！」

「あ、ああ！」

さっきのように霊力を注ぐと、セルティが現れた。

「それは簡単よ。ぼっちょ…あなたの霊力と私の魔力が似通っているからなの。」

…こあちゃんには申し訳ないけど、干渉させて貰ったわ。

…本当は有り得ない事なんだけど、何の偶然なんだろうね、ツエッペリンとは全く関係ないはずのぼっちょの霊力と私の魔力が似通っている。

それをこあちゃんに注ぐ事で、私の力は高まった…だから現れる事が出来たのかも。

…干渉も出来るようになったけれど、干渉するとこあちゃんに頭痛をもたらすのよ…痛いのは嫌だから、干渉せずに私が現れるようにしたいんだけど…ぼっちょが許可してくれるかどうか…」

「？」

「あなたの血が必要な。私は吸血鬼だから、血さえあればどうにかなると思うわ。」

「血い!?!」

え、首筋噛まれて血が吸われてからっからになってぽっくりしちゃうのか!?!

「大丈夫。加減はするし…そもそも首は噛まないわ。」

「…ふえ?」

「あなたの指一本で構わないの。指先をちょっと噛むくらいのも
よ。」

「え、そうなの?」

「そうよ。というわけで早速いただきます。」

右手の人差し指に、ちくりとした痛みが一瞬だけ走った。

「…」

やばい、すっごく可愛いんですが!?

人差し指をちゅーちゅー吸ってるセルティ…

めちゃくちゃ可愛いんですがっ!?

「駄目です!私が居るでしょう!?!」

脳内で早苗さんボイスが再生される…そうだ、僕にはまだ嫁がいるんだっ!

「ふうー、美味しかったー!これで何時でも出てくれるわ、ありがとう。」

「え?あ…はい。」

妙にドキドキしてしまったのは此処だけの秘密である。

旅っていいよね…でも大変なんだよね（後書き）

次回予告！

あきら、慧音のもとへ！

かいはチルノが死んだと思いき落ち込んでいます…

というわけで次回

「チルノは死んでないぞー！！」

チルノ「あたい最強！」

チルノは死んでないぞー！！（前書き）

前回までのあらすじー！

・あきら、慧音を探して人里へ

・ぼつちよ、血を吸われた

来週末くらいからまた更新速度が元に戻ると思います…

チルノは死んでないぞー！！

>かいと視点<

…俺達はチルノを失った。

だが、彼女の思いを無視するわけにはいかない。

…先に進むしかなかった。

振り返りたくても、振り返ったら二度と先に進めない気がして、
—
歩ずつ歩くしかなかった。

…チルノ…

馬鹿って扱って、ほんとにゴメンな。

…馬鹿じゃないんだよな、頭が悪いだけなんだよな。

…ほんととは他人思いの優しい妖精だったんだよな。

「くそ…くそっ！」

数々の人々によって踏み締められた固い大地を殴る。

…チルノ、君の為に、俺は逃げるよ。

…だから…許してくれ。

>チルノ視点<

「へっくち！」

「どうしたの、チルノちゃん？風邪でも引いたの？」

「違うよ、誰かに噂された気がしたんだよ。」

「ならいいんだけど…風邪には気をつけてね？」

「ありがと、大ちゃん！」

…チルノはびんぴんですよ！

>あきら視点<

「そういえば…アリスさんの隣に居るそのちっちゃいの…何ですか？」

すごく気になる小さな2つ…人なの？妖精なの？

「アリスでいいわ。これは上海人形って言って、動いたり喋ったり出来る人形なの。
もう一つ、蓬莱人形もあるの。この赤いのが上海人形で、黒いのが蓬莱人形よ。」

赤い人形…上海人形がいきなり目の前に飛んできた。

「ヨロシク！」

「凄くはつきりと喋るんだな…」

よく出来た人形だ。

「攻撃にも使えるのよ、これ。弾も発射出来るわ。」

なんか凄い。こんなに小さいのに。

「此処まで作るのに苦労したわ…試行錯誤の結晶みたいなものよ、この人形たちは。」

アリスの肩に乗る2体。

「えっと…まず何処に向かうんだっけ？忘れちゃって。」

「上白沢慧音の家です。あそこに行けば手掛かりは掴めるかも知れないって、八雲紫が…」

「解ったわ。少し時間がかかるけど、行きましょう。」

俺とアリスは何日かけて人里の上白沢慧音の家に行った。

途中、ミステイア・ローレイという妖怪が俺をかいと勘違いして襲い掛かってきたが、アリスが軽くボコボコにした。

その後、誤解を解く為にかなりの時間を要した。だってみすちー、人の顔を間違えるくらいだもん。

まあ、そんなトラブルもあったが、俺達は無事に人里に着いた。

「すみません、上白沢慧音さんの家って何処ですか？」

「ああ！それならあの茶屋の向こうだよ！」

「ありがとうございます。」

気前の良さそうな好青年のおかげで、慧音の家の場所が解った。

あきらは青年に頭を下げ、慧音の家に向かう事にした。

着くと、趣のある雰囲気…歴史がありそうな家が待っていた。

「ここか…」

あきらは玄関の前に行き、軽く玄関を叩きながら慧音を呼ぶ。

「すみません、上白沢慧音さんのお宅でしょうか？」

…しかし、返事がない。

聞こえていないのか？と思い、声量を上げてもう一度呼んでみるが、結果は同じだった。

「…いないのか。」

「みただね。ここらへんをつろつきながら待ちましょう。」

…俺は幻想郷に来て初めてまともな人が生きる為の営みを見た。

働く人…汗水流してる人…楽しそうに話をしている人…

「…皆、生きてるんだな…」

何でそんな事を呟いたのかよく解らなかったが、とにかく『生きる』
ということが大事な事なんだなと今更ながら解った。

480

「…その君。」

「はい？」

「…あなた、私を探していたんだって？」

「え？」

てことは…

「上白沢慧音は私なんだけど…」

…この人が上白沢慧音!?

…凄く…若いです…

チルノは死んでないぞー！！（後書き）

次回予告！

セルティ、あの人に出会う！

そして慧音と会ったあきら！
果たしてかいとこの行方は解るのか！？

というわけで次回

「最近ギヤグ色が無い」

慧音「それは作者が悪いと思っただけど？」

作者「それは言わないで」

最近ギャグ色がない(前書き)

前回までのあらすじー！

・あきら、慧音に出会う

PVが24000突破…どこまでいくのか解らなくて逆に怖くなってきた…(。(。11)

でもその分読者の皆様が増えてきたって…いいですよね？

最近ギャグ色が無い

>ぼっちちょ視点<

自由に現れるようになったセルティはとにかく破天荒だった。

突然現れたと思ったら抱き着くわ、寝てる所を襲おうとするわ、とにかくこあちゃんと同一人物とは信じられない。

なんでもそんなに現れていないため、色々やってみたらしい。

…が、流石に毎日やられちゃ困る。

「どうしたの？そんな疲れた顔して…」

「何でも…ないよ…」

女性にそんな事言うなんて無理です。

「ちょっと休もう…」

うん、身体が限界だよ。

死んだように眠るぼっちよを傍に、何かを見つめるセルティ。

「…誰か居るのね。」

影がかさりと動き、月を背に姿を見せたのは…

「あー、気付かれたんですね。」

ぼっちよの、敵。

「気付くわよ。そんな甘い尾行の仕方してたら…あなた、天狗にも関わらずそんな適当な尾行しか出来ないの?…いや、わざと、なのね。」

「そこまで解っちゃいますか。…あなた、何者なんです?見た事ない顔ですが…」

「…ただの住人よ。」

「…そういう事にしておきますね。」

「…射命丸文、場合によっては私はあなたを殺さなきゃならない…
ぼっちよに手を出すな。死にたくなければ、ね。」

本気だと思わせる為に殺気を出す。

「…ただの住人さんに殺される程私は弱くありませんよ…それに私はスクープを追い掛ける記者…命の危険があるってくらい解ってますよ?」

「…そう。なら次に会った時は覚悟しなさい…本気で殺すわ。」

「へえ、私も舐められたものですねえ…ま、私もこの異界人には興味を持っていますが、あなたにも興味が湧きました…いずれ取材させてもらいますね。」

「…勝手に。」

「…では、私は向こうであなたがたを待つ事にしますね。」

文は消えた。

「…」

これは酷い戦いになりそうだ、セルティはそう感じた。

>かいと視点<

「ふう…」

俺は座り込む。

「大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない。」

…と言っても実は足がぱんぱんなんだが。

「…結構逃げたね…」

「そうだな。そろそろペースを落としても大丈夫だと思うけど…」

幸いにも、周りの景色は深い色をした木に包まれている。
さらに近くに小さな洞窟がある、寝る時はそこで寝れば問題ないだ
ろう。

「…よし、此处に少し陣取ろう。」

俺達は暫く留まり、体力を回復する事にした。

>あきら視点<

「あなたが、上白沢慧音？」

「ええ。そういうあなたは？」

「俺、あきらまって言います。」

…正直な話、老婆みたいなイメージがあったのだが、かなり若そうに見えて話が合いそうな気がした。

「…それで、私に用って何？」

「八雲紫に聞きました…俺の友達、かいとの居場所を教えてください。」

「知らないわ、そんな人。友達がなくなったの？」

「違います。…かいとが今、指名手配にかけられている…捕まる前に保護したいんです。」

「…そうなの。助けてあげたいのは山々なんだけど、特徴とか教えてくれないと探せそうにないわ。…そもそも格好とかも解らないし。」

慧音の策はこうだ。

最初『知らない』としらばっくれ、さりげなくかいとの特徴を聞く。本当にこのあきらがかいとの友達だと言うのなら、特徴くらいスラスラと言えるはずだ。

「…解りました。かいとの髪型はショート…耳に髪の毛がかかっていないくらいのショート、髪の色は黒。前髪はおでこを半分隠すくらいの長さです。」

服装ですが…俺もかいとも異界人なので、異界の服を着ています。服を此処のものに変えてないなら、ズボンは紺色…ジーンズってもので、左膝のあたりが若干布が薄くなっています。上半身は白い長袖のＴシャツで、上着として黒い薄手のジャンパーを着ています。」

…完璧だ、完全に一致していた。

…彼は信じるに値する。

最近ギャグ色が無い(後書き)

次回予告！

あきら、慧音から話を聞く！

そこに現れたのは…！？

そして久しぶりにあきら活躍！

というわけで次回
「修行の成果」

妖夢「あきら、大丈夫かな…？」

衣玖「大丈夫よ！あきは私が認めた祭漢だから！」
まつりおとこ

妖夢「だといいんだけど…(祭漢って何…?)」

修行の成果（前書き）

前回までのあらすじー！

・なんか真面目路線

…さて、何処で崩そう…

修行の成果

>あきら視点<

「解ったわ…ついて来て。」

慧音に案内され、着いたのは先程の慧音の家。

玄関前ではアリスが人形達と遊んでいた。

「入っていいわ。」

玄関の戸が開かれ、少し奥の居間に案内された。

「座ってて。今お茶を淹いれてくるわ。」

慧音の家は普段からきちんと整頓されているのが伺える、目に見える所は全て綺麗になっている。

…そういえば、この匂いも久しぶりだな。

独特の畳の香りが、あきらの家とそう変わりがなく、あきは一瞬向こうの世界の事を思い出した。

…向こうはそろそろ夏休みって時期だったな。

もしかしたらもう夏休みなのかもな。

慧音が湯飲みをうつ持って来た。

中には僅かに湯気が立った緑茶が入っている。

「…私、あなたを試していたの。」

「？」

「確にかいとは一時期此处にいたわ。けれど、尋ねてくる人達は皆かいと敵だった。皆かいと親戚だ何だって言っ信用させようとしたわ。」

けれど『じゃあその人の特徴は？』って聞くと皆水を打ったように黙り込むの。嘘ついてる証拠ね。

でもあきら、あなたは違った。服装・髪型…全てあなたの言う通りよ。つまりあなたこそ、真のかいとの友達だって解った。

嘘をついてごめんなさい…でもそれはかいとの事を考えてした事だから…」

「大丈夫ですよ。寧ろ俺がお礼を言いたいくらいです。…そこまでして頂き、ありがとうございました。」

「…え？あきら、かいとの友達なの？」

アリスが少し驚いて聞く。

「そうなんだ。俺はかいとを倒したい訳じゃない、助けたいんだ。」

「…友達なのは本当みたいね。…解った、私も手伝うわ。友達を助けたと思うのは誰だって同じね。」

「ありがとう…アリス。」

「で、かいとは今、藤原妹紅と一緒に逃げているわ。でも、何処に逃げてるって事までは解らないの…ごめんなさい。」

「いや、無事だって解っただけでも嬉しいです…俺達はすぐにかい

とを追い掛けます。」

「そうはさせないぜえ〜！」

「!!!」

見ると、玄関から妖怪達が入っていた。

「良い事聞いちゃったぜ〜、あいつは此処には居ないんだってよー
！」

緑色の気味悪い身体付きをした妖怪がげらげらと笑う。

「くっ
」

立ち上がろうとした慧音を左腕で制するあきら。

「…此処は俺が何とかします。」

あきらは妖怪に近づく。

「何だあのチビは？ぶっ飛ばされに来たのかあ？」

「…ぶっ飛ばされるのは…！」

妖怪の鳩尾を的確に蹴り、妖怪を吹き飛ばすあきら！！

「テメエらだ！！」

そのまま妖怪達を誘導するあきら！

「情報が欲しけりゃ俺を倒してみろ！！」

外に飛び出し、十分広い場所まで逃げ、「追いつけてみる」と挑発！

「ふざけんじゃねえぞ人間風情が！！」

妖怪達が一斉にあきらに飛び掛かる！

「…具現『修羅の死闘』」

あきらが消え、直後に天を舞う妖怪達！

「どうした？この程度か…？」

「このクソがあ…！」

「うげあ…！」

さらに天を舞う妖怪達！

「はあ…はあ…」

だがこの『修羅の死闘』には弱点がある。

これを発動すると身体能力が跳ね上がり、まさにドラゴンボールのような激しい動きが可能なのだが、持続時間が15秒しかない。

「…まだ数はいるのか…」

かいとの周りを取り囲む妖怪達。

まだまだ数は多そうだ。

「…本当は隠し玉にしたかったんだが…仕方ない、やるか。」

両腕を交差させ、唱える。

「隠し弾『デザートイーグル』」

両手に握られる拳銃！

「…あんまり狙えないんだけどな！」

銃から鉛が飛び出した。

修行の成果（後書き）

次回予告！

あきらの修行に、慧音驚愕！

めちゃくちゃ強くないか！？

というわけで次回

「あきらって銃も扱えるんだね」

あきら「そうだけど？」

作者「なんで？」

あきら「ゲーセンでその手のゲームをやりまくってたから」

あきらって銃も扱えるんだね（前書き）

前回までのあらすじー！

・あきら、主人公らしい一面を見せる

…今回もあきら活躍！

あきらまって銃も扱えるんだね

>あきら視点<

デザートイーグル…それは本当に存在する拳銃である。

詳しくは知らないが、ミリタリーに詳しい作者の友達がデザートイーグルについて作者に語ってくれた事は覚えている。

作者はと言うと、「この形…好きだな」とそのモデルガンを眺めていたのだが。

さ、話に戻ろう。

「そこだっ!」

デザートイーグルが吠える。

先程、「鉛が飛び出した」と書いたが、実際はデザートイーグルか

ら飛び出しているのはゴム弾である。

何故か、あきらには妖力がある。（白玉楼に居た時、衣玖さんが言っていた）

その妖力をゴム弾にコーティングして鉛のように見せているだけである。

殺傷能力は『頭に当たれば気絶するくらい』。

故にあきらは妖怪達の頭を狙って撃っている。

パタパタと、妖怪達が気絶する。

「弾切れか…！」

だが、あきらには慌てない。

二丁のデザートイーグルを人差し指で一回転させる。

すると「カチャリ」と何かが入る音がする。

そう、リロードされたのだ。

「まだまだ行くぜ!!」

勿論だが、幻想郷にはゴム弾どころか拳銃すらない。では何故リロード出来たのか？

…答は『あきらが「銃弾が欲しい」と思った』からである。

「あきら・すとらとす！目標を狙い撃つぜ!!」

二丁のデザートイーグルが弾丸を発射する度に、あきらが感じる反動。

それを計算した上で、心持ち上に銃口を向けると面白いように妖怪に当たる。

…これが殺傷能力がかなり高い銃なら凄惨な光景が待っているが、現実はまだただ妖怪が気絶し、身体が重なって小さな山を作っている

るだけだった。

「ラスト一人!!」

乾いた銃声が響いた。

「…凄い…誰も傷付いていない…」 慧音

「全部一人でやったの？」 アリス

アリスと慧音が来た。

「…白玉楼で修行したんですよ。力を試してみたくて。」

「…それにしても、ざっと100人くらい居るわ。どんな修行したら此処まで…?」

その慧音の質問に、あきらはさらっと返す。

「えっと…妖夢と衣玖さんと打ち込みしてただけです。」

「なっ…!?!?」 慧音

「嘘でしょそれ!?妖夢と!?!?」 アリス

慧音とアリスが同時に目を開く。

「あなた、衣玖って…あの永江衣玖の事!?!?」

「妖夢は滅多に知らない人と関わる事ないのよ!?!?」

矢継ぎ早の質問は流石に対応出来ないの…

「先にアリスの疑問に答えるよ。…俺は幽々子さんと仲が良いんだ。」

「「はあっ!?!?!?」」

「で、幽々子さんに案内されて…そこに妖夢が居て…なんか気が合
つて、毎日打ち込みしてたんだ。」

「…」

アリス、閉口。

「次に慧音さんの質問に。ある日、衣玖さんが白玉楼にやって来て
…軽く戦って、また気が合って…打ち込みやって…それが毎日…」

「…なんて事…！」

この話が本当なら…いや、あきらの事だ、本当だろう…彼はかなりの
強さを秘めている事になる。

天界からやって来た永江衣玖と戦い…しかも毎日…弾幕回避に関し
てはもう鍛える必要すらないだろう、
さらに刀の扱いは幻想郷一の魂魄妖夢の神速の剣を見極められる…
彼は間違いなく強い部類に入る…！

かいともまさに並外れたもの…エデンの林檎を扱える時点で強い
に…彼も…！

異界人と言つのは本当に異常だ…！

彼なら…本当にかいとを救えるかもしれない…！

「…妖怪は私がどうにかするわ、アリス、あきら…かいとを頼んでいいかしら？」

「いいですとも！」

「…急いで。いくらかいとに妹紅が付いてるとは言え…直に限界が来る。それまでに、どうか…！」

「はい！行こう、アリス！」

「解った！」

あきらとアリスは走って道の向こうに溶けていった。

あきらまって銃も扱えるんだね（後書き）

次回予告！！

ついにぼっちょ、文と決戦！

果たしてぼっちょは文に勝てるのか！？

圧倒的な力の差の前に…！

というわけで次回

「ただただ愛の為に…！」

文「凄くシリアス路線じゃないですか！？」

ただただ愛の為に（前書き）

前回までのあらすじー！

・あきら、なんか異常に強くなってるんだけどどうしたの？

今回からぼっちょ視点！

ただただ愛の為に

>ぼっちょ視点<

数日経ち、体力を回復したぼっちょとこあちゃんは、さらに妖怪の山を進んだ。

「待て！」

そこに舞い降りた、敵。

「よく此処まで来たね…ぼっちょ！」

「…射命丸文…!!！」

ぼっちょはすぐさま戦闘体勢を取った。

「どつやら前のあなたとは違うようね…私も本気を出すとしますか
！」

瞬間、ぼっちよの真後ろをとる文！

「短守『ミニミニ結界』！」

ぼっちよの背中を捉えていたはずの文の右足は、結界に阻まれた！

「まだだ！護法『アンカーシールド』！！！」

本来大地に食らい付き固定されるはずの錨が、文の右足に巻き付く！

「あやや！？」

盾の重みに身動きが取れない文！

「とどめだ！！霊矛『喰盾爪』！！！！！」

右腕に装備された鋏が、文に噛み付く！

「痛い！痛いですって！！！」

「…僕はお前を許さない…！お前を討つまでは…！」

「…そうなんだ。」

鉄が、砕かれた。

「なっ…！？」

「ガードがなつてないよ…！」

直後、ぼっちょの腹に入る文の膝…！

「…うぐっ…！」

「あやや？飛ばない…まあ、飛びたくないならそれでもいいけど…」

ぼっちょを殴り続ける文！

「ぐっ！がっ！がっ！」

腹、肩、顔、腕に鈍痛が走る！

「なかなかタフになったね…！けどっ…！」

文は重い一撃を与える為にほんの僅かに後退し…！

回し蹴り…！

まるで斧を振り回しているようなその足を…！！

ぼっちょにぶつける…！！

「ぐわっ…！！」

「これは効いたみたいね！」

しかし、ぼっちょは倒れない！

「…なんてね。」

ガシッ！！と文の足を左腕で握るぽっちょ！

「あやっ！？」

「…この時を待っていた…！！」

右腕に作られた鉄！！

「うおおおおおおお！！！！！！」

その鉄は再び文を噛み砕くべく挟む！！

「うっ！！」

「…諦める！！」

「…ふふっ。あなたはとことん甘いわね。」

袂に挟まれていた文の手が光る！

「風符『風神一扇』」

ぼっちょが、吹き飛んだ。

「うわっ！」

「もう私の勝ちが決まったようなものよ。『無双風神』」

文が目先に接近する。

鳩尾をえぐるように拳が沈む！

「がはっ…！」

血反吐が口から飛び出す。

「まだまだあ!!!」

先程よりさらに激しい殴打、殴打、殴打あ!!!

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄あ!!!!!!!!!!」

ぼっちょ、宙に浮きっぱ!

「はい止め!疾風『風神少女』!!!」

ぼっちょの胸をドンっ!!!と蹴り飛ばし、ぼっちょはそのまま木の幹に叩き付けられる!

「合計17連コンボ!」

格闘ゲームですか。

「さて、私に能力を発動させたのは褒めてあげるけど、まだ甘いね。…どつする?まだやるの?」

「う…あ…」

身体が痺れる、動こうとすると引き裂かれるような激痛が走る。

目の前もぼやけてきた…そろそろ死に際か…？

「でもほんとタフだね…17連コンボかましてもまだ気絶しないなんて…」

どうすれば勝てる？

僕には彼女を守る力すらないのか？

「…まだ…だ…！」

よろよろと立ち上がる。

身体が悲鳴を上げる。

今にも倒れそうだ。

けど…！

僕は…！

「誓ったんだ…彼女を守るって…！」

『仕方ねえな…頑張る息子の為に力を貸してやるか。』

頭の中で、声が響いた。

「…！父…さん？」

『まだ俺の事を父と呼ぶのか…嬉しいなあ…でもよ、お前はまだやることあんだろ？』

「…うん！」

『少しだけ手伝ってやるよ…感謝しな！』

「…ありがとう！」

瞬間、ぼつちよの右手に刻まれる不思議な紋様と、右手に握られる一本の槍！

『この槍の名はハルバード……お前の障害を貫く最高の武器だ。俺の息子なら使いこなしてみせる!』

「……おじ……」

ぼっちょは再び文に立ち向かう!!

ただただ愛の為に（後書き）

次回予告！

ハルバードを手にしたぼっちの反撃が今始まる！

というわけで次回

「最強の矛、ハルバード」

文「強そうね…」

最強の矛、ハルバード（前書き）

前回までのあらすじー！

・ぼっちよゝS文（二回目）

評価ポイント50に！

ありがとうのいえごますー！

最強の矛、ハルバード

〈異界〉

「…へへっ。あいつも言うようになったな。」

鍛えられた筋肉が、彼の強さを物語る。

「…あの子に『力』を？」

「そうだ…あいつなら使いこなせるさ…なんせ最強の妖怪の親友と俺の息子なんだぜ？」

「…そうね。あの子には想いを貫いて貰いたいわ…闇を斬り裂く光のよつこ…」

>ぼつちよ視点<

「僕は守るんだ…！彼女を、大切なものをつ…！！！」

槍が白く輝く！

「靈槍『ハルバード』！！！」

ありつたけの靈力を乗せて飛んだ槍は、文目掛けて風を斬り裂く！！

「面白い！私も全力で立ち向かう！」

それを両腕で止めにかかる文！

「頼む…届いてくれ…！」

文の力とぼつちよの力が拮抗している…それは、槍が動いていない事から解る。

「…ふんっ！！！」

槍が碎けた。

「…此処まで追い詰めるとは…やるね…！けどあなたはもう満身創
痍…諦めなさい！」

「…違う…！」

「！？」

「その槍は、僕の霊力だけのものだ。」

「だから何…っ！？」

文はふっと空を見る。

空から落ちる無数の槍！

「これがハルバードの真の姿…ハルバードは一本じゃない、『10
00本』あるんだ。」

「たかが数が増えたくらいでっ…！！」

文は無数の槍に立ち向かい、槍を弾き返す！

「…僕の勝ちだ」

ぼっちょの手にはハルバードが…！

「…!? きゃあっ…！」

ぼっちょに気を向けたのが間違いだった、槍が身体に掠り始め、文は槍に埋もれていく！

「そしてこれでおしまいだっ…！」

ぼっちょはハルバードを文目掛けて再び投擲…！

「…やられた…!!」

勝負が、決した。

「早苗さんに謝りやがれこのぶんすか新聞記者！」

「ぶんすか新聞じゃない！文々。新聞！」

文は紐で木に縛られ、身動きが取れない。

「あんな記事書かなきゃこんな事にはならなかったんだよ！」

「へえー…で？」

「『で？』じゃないぞこの烏天狗！」

「別にいいじゃん、本気じゃないんだから。」

「あのなあ……！その本気じゃない記事で早苗さんは泣いてたんだぞ
コラア！……」

「ひええっ！怖いー！おーそーわーれーるー！……」

「……こりゃ埒があかない……」

「ぼっちょ……ちょっとい……い……」

「どっじたの、こあちゃん？」

「……いつ時はね……」

「こあちゃんが文に近付く。

「そっさとさと言いつ通りにしないと……殺すよっ……」
（ニッ）

「ひゃああああ……」

「よしー！それで言う事聞くよー！」

「ありがとう…っっていつの間にセルティに！？」

というわけで、文をパシらせて洩矢神社に戻ったぼっちょとセルティ。

「誠に申し訳ございませんでした」

文、新聞記者になって始めての土下座。

「…まだ許すなんて一言も言っていないわよ？」

ごきりと拳を鳴らす神奈子。

「許す？それはお前をボコボコにしてから決めるよ？」

ミシヤグジさまを召喚し、もう戦闘体勢を整えた諏訪子。

「作者のせいで全然出番がなかった分…暴れさせてもらっつよ!」

「うわあああああ!?!?!?!?!」

この日、文の悲鳴が途切れる事は結局なかった。

「ぼっちょ君…私の為に、ここまで…?」

早苗が申し訳なさそうな感じで聞く。

「はい…早苗さんの笑顔を取り戻したかったのです。」

にこりと笑ったぼっちょ。

「ありがとう…!」

「あなたの友達、かいとがついに八雲紫に捕まったの！」

「!？」

最強の矛、ハルバード（後書き）

次回予告！

かいとが捕まった！？

どーなるのこれ！？

というわけで次回

「捕らえられたかいと」

かいと「俺、第二章に入ってから災難ばかりじゃね？」

作者「いいことあるぞ」

捕らえられたかいと(前書き)

前回までのあらすじー！

・ぼっちょ、文撃破

PV30000突破しました！

ありがとうございますー！

捕らえられたかいと

>かいと視点<

「おい！俺を捕らえてどーするつもりだ！早く出しやがれ！！」

鉄格子をガンガン叩くかいと。

「…くそっ！！」

こうなったのはある出来事があったからだ。

536

【回想】

俺と妹紅はあてもなく逃げていた。そしたら…

「…んにちは。」

空間がファスナーのように開き、中から紫のワンピースの少女だけ

女性だかよく解らない感じの人が現れた。

「…あなたがかいとね？」

「…だったら何だ？」

何となく解る…こいつは今までの奴とは違う！

「あなたを捕まえに来たの。おとなしく付いて来て貰うわ。」

「…素直に捕まると思つかよ？」

かいはレーザービットを出そうとした…その時。

「抵抗すると彼女の命はない。」

妹紅の首筋に突き付けられる刀。

どうやら伏兵がいたようだ。

「…幾ら彼女が不老不死とは言え、首を撥ねられたらただでは済まないわよ？」

…既に詰みか。

「…解った。妹紅の安全を保証するなら付いて行ってやる。」

「話が解って嬉しいわ。藍、妹紅を解放してあげて。」

「はい。」

妹紅の首筋から刀が遠ざかる。

「かいと…!!」

「大丈夫だ。俺は死なねえよ。…慧音に伝えてくれ。『しくじった』ってな。」

「かいと…!!」

…で今に至る。

どうやらこの檻から出ない限り、多分俺は永遠に此処に居る事になるだろう。

…やりたくはないが…

やるしかないか…！

「拒絶『エデンの林檎』…！」

檻を爆 破！

「自由だあー…！」

しかしすぐに自由が手に入るはずもなく…

「そこを動くな！」

二人の女性がやってきた。

「…八雲藍…それに橙か…」

またまたExtraボスかい。

「あー！私達の家をー！！」

どうやら此処はあの八雲紫の家らしいな。

「…許さない！」

藍と橙が同時に駆け出す！

「拒絶』D・T・ソード』！…」

剣を振るい、藍と橙を分けさせる！

「拒絶』D・T・レーザービット』！…」

天井を軽く崩し、完全に橙と藍を隔離させる！

「…!!」

どついつ算段だ？

天井を崩して攻撃するかと思えば、攻撃するどころか砂煙が消えるまで身動き一つもしない。

「…よし、これでもう一人は大丈夫だな。」

「どついつつもり…!？」

「もう一人、ちっちゃい子…橙が居ただろ？このまま俺とあんたが戦えば、橙が怪我しかねない…だから少々手荒だが、あんたと橙を隔離させてもらった。」

「!」

つまり、相手は橙を守ったって事!？

「さて…仕切り直しだ…戦おうぜ？」

「…」

本当に彼は…幻想郷を壊す為だけに存在している者なのか？

「どうした？具合でも悪いのか？」

「…くっ…」

どうしても彼が悪人とは考えられない。

藍には迷いが出来ていた。

「…あなた、幻想郷…この世界は好き？」

その質問に、彼はさらりと返す。

「嫌いな所はない。だから好きだな。」

「！」

…こんな人が、敵…？

一方。

「（…あれがかいと…彼さえ倒せば…異変も解決…ついでにお金もゲット…！）」

影に隠れる紅白の少女…博麗霊夢は、かいとの間を見計らっていた。

そして、その時が来た！

「…やめた。俺は戦う気なんて実はそんなにない。…俺は八雲紫をぶっ潰したいだけだ。あんたは橙を守ってやれ。」

「…！」

今だ!!

霊夢は飛び出し、そして唱えた!

「霊符『夢想封印』!!」

彼は気付いていない…勝った!!

「危ない!」

彼女の身体が潜り込む。

「!」

かいとに抱き抱えられるように倒れる藍。

「おい!大丈夫か!? 酷い怪我だぞ!」

「うん…でも…少し傷が深いかも…」

かいとの手に伝わる赤いものが、それを示していた。

「おい!しっかりしろ! あんたにはまだ守るものがあるだろ!」

「…そう、だね…」

少しずつだが、彼女の息が浅くなる。

「…あの子を…橙を…た…のむ…ね…」

目が、閉じた。

「おい！しっかりしろ！……くそっ！……」

かいとはある決意をした。

…あいつを…あの女を…なんとしても先に潰す。

かいとの黒い眼は…何よりも深い闇を携えて、霊夢を捉えた。

…だがかいとは、霊夢にこっそりと「私は健在よ」と伝える藍に気付かなかった。

…かいと、早く気付け！

捕らえられたかいと（後書き）

次回予告！

怒りのかいと、霊夢にブチ切れ！！

あきらー！かいとがピンチ

だって事にさっさと気付けー！！

というわけで次回

「怒りの矛先はどっちに？」

諏訪子「やっぱり私…空気…」

作者「もう少し待って」

怒りの矛先はどっちに？（前書き）

前回までのあらすじー！ー！

・かいと、ブチ切れ

∴ 次回以降から極力一日一回更新に戻します！

怒りの矛先はどっちに？

> かいと視点 <

「おい、『エデンの林檎』。あの女を潰す手段はねえか？」

『…その前に防衛機能の装備をして下さい。…でないとなんか壊れます。』

「…解った。」

かいとはガイガイガーになった。

『…では最後の武器、『E・D・E・Nセフィロトグラビトン』について説明します。』

これは超重力を相手にかけ、相手を消滅させる武器です。』

「それだけ聞けりゃ十分だ。」

そしてかいとはその一言を言い放った！

「…行くぞ、 E・D・E・Nセフィロトグラビトン。」

かいと右手に握られたそれは…全てを破壊する槌。

「…博麗霊夢、最後に言い残す事はあるか。」

それに対し、霊夢はあくまで冷静に、だが自信を持って返す。

「…私はあなたに負けない。」

「あつそ。雑魚はさつさと失せろ。」

槌が黒く光る。

「…お前は…消える。」

かいは槌を軽く振り下ろす。

瞬間、霊夢にかかる『超重力』。

もう10Gとかの話ではない、相手をただただ冷酷に、そして虫ケラのように押し潰す為に、それは存在した。

「ぐ…うあ…!」

「…まだ耐えるか。」

かいは新たな力を得た、しかしそれによって何か大事なものを無くしかけていた。

「…潰れる、お前はもう、人間として生きる価値すらねえ。」

「やめて!」

かいとに聞こえた声は、意外なものだった。

「…橙…？」

「藍様はまだ生きてるから！その人を殺さないで！」

「…生きてる…？」

重力の力が少し軽くなる。

「…かいと…私は…大丈夫だから…。」

「…。」

無事…なのか。

重力は消える。

「…そうか。俺とした事が…人殺しはよくないな。」

急に冷静になった彼は、霊夢の方を向いてこう言った。

「…けど許せねえ…一発殴らせろ…！！！」

あ、いつものかいとに戻った。

槌を消し、かいとは叫ぶ！

「エデンスシード…フィールド展開…！」

碧色の光が広がる！

「何…これ…!?!？」

「デス!!アンド、ライブ!!ちんぷんかんぷん臨機応変…!?!?!はああああ!!…!?!?!」

霊夢は動けなくなる！

「これは…藍の分だ…！」

超高速で霊夢に突撃…!!

「ぐはっ…!!」

「まだまだだあ!!ガトリングバンカー!!!」

右手に握られた切削機のようなもの!!

地面に叩き付け、地盤を破壊する!

「嘘…!!?あーれええええええ…!!」

霊夢は出来た穴に落ちていき…声も聞こえなくなりました。

「よし!藍、大丈夫か!？」

「うん。びんびんだよ?」

「…へ?」

けたのは計画的だったと判明したから…言ってしまうえばカッ「悪い結果になったから」

>あきら視点<

「あきらー!!」

こっちもこっちで急展開!

「…妖夢!?!どうした!」

「かいとが…かいとがさらわれた!」

「なっ…!?!」

「さっき藤原妹紅に会って…かいとがさらわれたって…!!」

「くそっ！でかいとは！？」

「妹紅が言うには変な空間に入って行ったって…！」

「！」

変な空間…それを扱えるのは一人しかない！

「妖夢！マヨヒガは何処だ！」

「マヨヒガ…？まさか、八雲紫が！？」

「可能性は高い…！けどどこからどうやって…！」

「おい…！」

そこにはにとりが！

なんかヘリコプターみたいなのが出来てる…！！

「このにとり特製飛行機に乗って！私がマヨヒガまで連れていくよ
」！

飛行機なのそれ！？

「ありがたい！妖夢、アリス！行こう！」

怒りの矛先はどっちに？（後書き）

次回予告！

ついにマヨヒガへ！

あきらめはかいとを救えるのか！？

あきらめの目の前に立ち塞がったのは…！？

というわけで次回

「マヨヒガの死闘 1」

にとり「あたしも活躍するよー！」

妖夢「え…？」

マヨヒガの死闘 1 (前書き)

前回までのあらすじー！

・霊夢、行方不明に

またまたシリーズに…

マヨヒガの死闘 1

>あきら視点<

バタバタバタ!!

「もうすぐ着くよー!降りる準備して!」

「…ってどうやって降りるのよ!着陸してないじゃない!」

マヨヒガの遙か上空で降りろと言われても普通は無理な話だが…

「大丈夫だアリス!俺の能力ならこれくらいいける!」

それから程なくして…

「…マヨヒガ上空!あきら、行って!」

「おう!」

ヘリコプターみたいな飛行機の扉が開かれ、あきら・妖夢・アリス

妖夢が刀を構えて言う！

「でも…！」

「大丈夫よ…私はこれでも魔法使いなのよ？」

アリスの周りに人形達が！

「解った…！」

あきらはデザートイーグルを取り出し、威嚇射撃しながら魔理沙を突破！

「…頼んだ、妖夢、アリス…！」

あきらは銃で扉を壊し、強引にマヨヒガに入る！

「…どこだ、かいと！」

「…かいとなら今頃霊夢に倒されてるわ。」

「!?!」

声の方向に振り返ると…

「八雲…紫…!!」

「あら、私の名前を覚えてくれたのね、嬉しいわ。」

紫は扇子を口に当て、ふふっと笑う。

「…そこをどいてくれ。」

「その頼みは聞けないわね。彼をみすみす解放するわけにはいかないもの。…幻想郷を壊す存在は抹消すべきよ。」

抹消…つまり殺すつもりか。

「…だつたら…」

あきらは一差しの刀を握る！！

「俺はあんたを越える！」

紫を斬るべく走る！

「無理ね」

紫の姿が消える！

「貴方じゃ私は倒せない」

刹那、あきらの中背中に走る痛み！！

「がっ…！」

後ろを向くと、傘を持った紫が！

「…私は一応、『幻想郷最強クラス』の妖怪よ？」

くすくすと微笑する紫には、圧倒的な自信も備わっていた。

「ちいつ…!!」

再び刀を構え、突撃！

「無駄よ」

またもや刀は空を斬り、あきらは敵を探すが時既に遅し、現れた紫に足払いをされ、バランスを崩す。

「しまっ…!!」

言い切らない内に腹に刺さる傘。

「ぐわっ…!!」

「…弱いわね。人間ってこういうものなのかしら？」

傘の先が腹にのめり込む。だが…あきらは諦めてはいなかった！

「…んなわけあるか。そーれっ！！」

「！？」

紫の足が勝手に動く！！

「…鎖！？」

「その通り！幾ら空間を行き来できても！！！」

バランスを崩した先にあきらの刀が！

「俺と鎖で繋がってたら関係ない！」

峰打ち！！

「くうっ…やるわね！」

「これであんたの能力は封じられた！行くぜおい！！」

あきらは鎖を引き、紫を引き寄せる！

「でええええい！！！！」

再び峰打ちをしようとしたその時。

「私を舐めるのは止めた方がいいわよ？ 魍魎『二重黒死蝶』」

あきらに襲い掛かる大量の弾幕！

「ちつくしよ……！！」

鎖を離し、弾幕をかわす。

…だがこれが紫の策だった。

紫はくすりと笑い、一撃。

「結界『生と死の境界』」

あきらは「やられた」と思う間もなく…

死んだ。

マヨヒガの死闘 1 (後書き)

次回予告！

あきら、マジで死亡！？

待て、主人公に死んで貰っちゃ困るぞ！？

というわけで次回

「マヨヒガの死闘 2」

あきら」」…」

紫「あれ…？まさか殺^やっちゃった…？」

マヨヒガの死闘 2 (前書き)

前回までのあらすじー！

・あきら死亡

…え？

マヨヒガの死闘 2

「…ああ…そういや…俺は…死んだんだっけ。」

身体が軽いし、なんかふわふわしてるし。

「…かいと…ごめんな。」

『諦めるのはまだ早いですよ』

「…？誰だ…？」

周りは闇。

誰も居ないはずだが…？

「此処ですよ」

目の前が、光に溢れた。

目を開けたわけではないのに。

そこには、グラデーションが綺麗な髪の女性…というかどうやった
らそうなる？と聞きたいばかりの色だが…が立っていた。

黒と白の服…カラーリングは魔理沙に似ているが、体つきが違う…
この人は間違いなく大人だ。

どうやら俺は彼女に目を塞がれていたようだ。

「…」

「『誰？』って顔してますね…無理もないですね、多分始めまして
でしょう。」

彼女の笑顔は、全てを優しく、暖かく包んでくれる…そんな気がし
た。

「私は聖白蓮と申します。早速ですが…あきら君、貴方に何が起き

「たか…解りますか？」

「俺は確か八雲紫の攻撃を受けて…死んだ…」

「ええ。貴方は確かに死にました。ところが…少々おかしな事が起きたのです。」

「おかしな事？」

「はい。普通、全ての生きとし生けるものは命を亡くした時、冥界の入り口に送られ、死神や閻魔大王…」

「有名なのは小野塚小町や四季映姫・ヤマザナドゥですが…」

「生前の行為を見られ…地獄に行くか天国に行くか判断されるわけですが…どういわけか貴方は此処に来てしまった。」

「それに此処は本来、死者が来るべき場所ではないんです。」

「さらに聖は続ける。」

「此処は『悟りの境地』…人は涅槃やニルヴァーナと呼びますが…此処は全てを悟ったもの達の究極の世界にして神に最も近いものになる世界なのです。」

「…しかし、どうしたことか貴方には悟った様子がない。…何故此処に来たか…私にも解りませんが、此処に来た以上、一つだけ確約出来る事があります。」

聖はあきらみに近づいて言った。

「貴方の願い…一つだけ叶えて差し上げます。何でも良いのですよ？」

その言葉に、あきはすかさず返した。

「生き返らせてくれ。俺は友達を救わなきゃいけないんだ…聖さんのような美人が居るのは嬉しいけれど、戻らなくちゃいけない…」

「生き返ったとしてもまた死ぬかもしれませんよ？それでも構わないのですか？」

「構わない。出来る事を精一杯してから死ぬんなら本望だ。」

あきの目には迷いがなかった。

「…解りました。では、目を閉じて…」

あきらの姿が…消えた。

「…一つ、面白いプレゼントをあげましょう…友達を助けてあげて。」

「…やはり強すぎたみたいね。スペルカードでも人間は耐えられない…」

紫はあきらの屍を見つめていた。

「…異界人でも、凡人は凡人なのね。」

踵を返そうとした、その時。

「隠し弾『デザートイーグル』…!!」

紫の頬を掠る弾。

「…まさか生きてるなんて思いもしなかったわ。」

紫は振り返り、微笑する。

「…俺はあんたを倒す。でないと死んでも死に切れないからな。」

「…面白いわ。かかってきなさい。」

あきらはバンッと地を蹴り、紫に切迫!!

「また死にたいの？結界『生と死の境界』」

結界が広がるが…！

「想聖『境界超越』…！」

なんと境界を無視してそのまま突っ込むあきら…！

「境界を無視…！？まさか、大結界を突破出来たのも…！！」

「俺はかいとを助けただけだ…！想聖『マングローブ漢拳』…！」

なんかネーミングセンスがおかしいが、紫目掛けてあきらの拳が唸る…！！

紫には当たらなかったが…！！

「男の拳は、心に響く…！！」

「…！！」

紫が異変を感じ、地に踞る！

「なに…この感じ…！胸が…苦しい…！」

「そりゃそうだ…俺はあんに想いをぶつけた…！」

マヨヒガの死闘 2（後書き）

次回予告！

紫VSあきら、決着！

しかし戦いはまだ終わらない！

というわけで次回

「マヨヒガの死闘 3」

聖「やっと私が出た」

ぬえ「なんで聖が先に出るのよー、ぬえええん！（涙）」

マヨヒガの死闘 3 (前書き)

前回までのあらすじー！

・あきら、ひじりんによって復活

超展開続きすぎだ…

マヨヒガの死闘 3

「俺の歌を聞けえ！ならぬ俺の魂を聞けえ！！だ！」

「う…！」

流れ込む数々の映像…

走馬灯のように流れ去って行く映像の中に、紫は驚くべきものを見つけた！！

「…！！やはり…あなたが糸を引いてたのね…！！」

映像が途切れ、紫の目前に迫る覇気！

「…これ以上、俺はあんたと戦いたくはない。素直に此処を通してくれ。」

「…あなたにかいとを渡せば…幻想郷は…壊れてしまう…！！」

「かいとはそんな事やらねえ。」

「何でそんな事を…！」

あきらはきっぱりと言っ！

「友達だから。」

「！！！」

友達…そうか…

「仮にそうなら俺が止めてやる。だから八雲紫…もういいんだ。」

「…でも、私は…！」

紫がある事…この行動に出た理由を言おうとした、その時。

「おっと、話はそこまでだ。」

「！」

赤い瞳のタキシードの青年がこちらを見つめていた。

「双月…奈落…！！！」

「やっぱり紫、テメエは使えないな。…まあ構わんさ、【支配者】は残り3人だ…」

ガギン！！

あきらは刀を青年に振り下ろしていた。

「ほう…テメエ、俺がやろうとした事、解ってたのか。」

「…なんとなく、だがな！！！」

青年を突き飛ばし、あきは外に出る！！

「へえ、やるじゃねえか。まあ…よくやった方だ。」

青年はあきの真後ろに回る！

「憤怒『殺戮の火炎地』」境符『四重結界』！！！！」

結界に跳ね飛ばされる青年！！

「…八雲紫…！！」

「…かいとの方は貴方に任せるわ…行きなさい！」

「どっ…！！？」

「いいから！かいととは奥にいるわ！かいとを連れて逃げなさい…！！」

紫の言葉には、焦りが込められていたように思えた。

「…解りました！」

あきららは再びマヨヒガ内部に走る！

「やらせるか、怠惰『無気力の抜け殻』」

光の鎖が、あきららに跳ぶ！

「『弾幕結界』…！」

鎖は紫の弾に当たり砕ける！

「…邪魔をするか、八雲紫…！」

「…貴方、双月奈落ではないわね？」

「…だとしたらどうする？双月奈落を助けるのか？」

青年の質問に、紫は不気味に笑う。

「いえ、そんな弱い存在を貴方ごと消してあげるだけだわ。」

紫は空間を開き、消える！

「…厄介だ…その能力。しかし…私はそれを手に入れる…！」

赤い気を纏い、青年は更なる狂気を見せる…！

「狂気『終焉のラプソディ』」

青年を中心にして拡がる音は、次に喰らうものを待ち構えているようだ。

「…来い、紫。俺に近付いた瞬間…テメエは終わりだ。」

「誰が私が近付くと？」

「来たな紫！テメエは終わり…！？」

青年に近付くのは紫ではなく…藍！

「フェイク…！？本体は何処だ…！」

「此処よ」

青年の真下に、空間の裂け目が…！

「何処までも鬱陶しい事を…！」

当然抵抗するが…！

「式神『八雲藍』…まあ本物じゃないんだけどね。」

藍の攻撃を受け、青年は空間に喰われた。

「さて…後は私と貴方の根競べね…」

紫は座り込み、妖力を閉じた空間に向けて放つ。

「そうはならないのが現実よ」

「!!!」

その声に気付いた時には、紫の意識が途絶えた。

「…いい加減出てきなさいよ。」

空間が開き、中から青年が。

「…ふう、助かったぞ、風見幽香よ。」

「構わないわ。それより、幽々子は私が黙らせておいたから。」

傘を差した緑色の髪をした女性は淡々と話す。

「結構結構。さて…後は四季映姫だけか。」

「そうね。貴方がやってくれると嬉しいのだけど。」

「よかろう…我が主を迎える以上、地獄に封じられた我が同胞にも存分に働いて貰おうか。おっと…その前に。」

青年は紫に近付く。

「邪魔者には本の一部となって貰おう。」

本…凶狂書を開いたその時！

「拒絶『D・T・レーザービット』…！」

本が、細い光に貫かれた。

マヨヒガの死闘 3 (後書き)

次回予告！

マヨヒガの死闘、ついに完結！

ぶっ飛び過ぎて訳が解らない事請け合い！(ならちゃんとしてよ)

というわけで次回

「マヨヒガの死闘 4」

幽香「やっとの出演ね」

マヨヒガの死闘 4 (前書き)

前回までのあらすじー！

・ついに狂気に喰われた奈落登場

もうすぐ第二章完結！

マヨヒガの死闘 4

「ぬ…?」

「奈落! ついに頭狂ったか! ?」

かいととあきらが来た!

「…私は双月奈落ではない。」

「OK理解した。じゃテメエを殺す!!」

かいは再びエデンの林檎を解放する!!

「…ほう、破魔の光か…」

青年は少し見直したような口調だ。

「拒絶」エデンのどんぐり『!」

青年の周りに突如現れる無数の小さな爆弾！

「舐めるな。怠惰『無気力の抜け殻』」

爆弾は爆発する事なく地面にぽたつと落ちる。

普通ならピンチだが…

「…舐めるなよ?」

かいとはにやりと笑う。

刹那、青年の腹を貫く刀！！

それはあきらなものだった！！

「な……な……に……!?!」

「一人で戦ってるわけじゃないんだ!」

「ちいっ！幽香！やれ!」

…突っ込みたいがまだ我慢。

「ばあああくねっ！！！！みっつのマングローブ！！！！ふいんがああ
ああああああ！！！！！！！！！！」

「デス！！アーンド、ライブ！！！！げるげるがんごーくはあ！！はあ
ああああああ！！！！！！！！！！」

あきらのリアル拳とガイガイガーの必殺技が融合！

「ウーッタアアアアアアア！！！！！！！！！！」

青年の後頭部に目から星が出る程の鈍痛と、腹を貫くデスアンドラ
ライブ！！！！

「「竜巻斬艦刀・疾風怒涛！！」」

青年は弾に苦しむ！！

「今度は僕の番だ！！霊矛『クラッシュークロス』！！」

二重の鉄が青年を捕らえ、拘束する！！

「ぼっちょ君！行きますよ！」

早苗はぼっちょから飛び降りて距離を取る！

「ああ！思いつ切りやってくれ！！」

ぼっちょは青年を掴んだまま早苗の方に身体を向ける！

「大奇跡『八坂の神風』！」

暴風が青年に襲い掛かる！！

「うおおおおお！！！！！！」

青年を暴風にぶつける!!

「ぐぬううううううう!!?!?!?」

「でえい!!?!」

ポロポロの青年を空に放り投げ、ぼっちはさらにハルバードを創る!!

「早苗さん!!」

「行きます!!」

ハルバードを掴んだ二人!

瞬間、ハルバードが銀色から鮮やかな青に染まる!

「うおおおお!!?!?!?!」

ハルバードを投擲!!

「「これぞ愛の奥義…『愛壊たっぷりコーンポタージュ』！」」

…なんだこのネーミングセンスは…

マヨヒガの死闘 4 (後書き)

次回予告！

意外なキャラ登場！

第三章に続く驚愕の事実が明らかに！

というわけで次回

「異変の終わり、そして新たな異変の始まり」

??? 「あれ、私だけ名前ない？」

作者「ネタバレ防止のためさ」

異変の終わり、そして新たな異変の始まり（前書き）

前回までのあらすじー！

・凶狂書に宿った魂、撃破

次回第二章完結！

異変の終わり、そして新たな異変の始まり

「な…何故…我は…人間どもに…負けたのか…？」

奈落を支配していた狂気の元凶…支配者の一つ、凶狂書の魂はふらふらと彷徨っていた。

ただ、悪役の未来は決まってるようなものだ。

魂は気付いていなかった…近くに黒い球体があったことに。

「…むにゃむにゃ…美味しそう…」

球体から小さな手がすーっと出て来て、魂を掴む。

「ちょ、我は食べ物じゃ…うわあああああ…！」

必死の叫びも虚しく、魂は球体の中に消えた…

「もぐもぐ…おいしいなあ…」

魂は喰われたが、喰われた者の内を一瞬見る事が出来た。

「…！？これは…支配者の力…！！まさか…！！」

言葉が続く事なく、魂は完全に喰われた。

球体から、黒服の少女が出て来た。

「よく寝たー。そろそろ遊びに行くのだー。」

少女は何処かに飛んで行った…。

少女はとある洞窟に入った。

さささつと奥に進み、何もなければずの壁に向かって咳いた。

「いい加減起きるのだー。」

しかし、返事はない。

「お前がいつまでも寝てるから彼は凶狂書に喰われかけたのだー。」

…何もない。

「支配者か何だか知らないけど、さつさと起きないとまずい気がするのだー。起きろー！」

ついに壁が動いた。

「ふわぁ〜。どしたのルーミア？」

壁からのそのそと眠たそうな顔をして歩いて来た少女。…大人にぎりぎり届かないような身体の作りだ。

「さくらー、まずは奈落を助けてやるのだー、彼はまだ不安定なのだー。」

「あら…それは大変ね。」

欠伸をするが、少女の顔には真剣さが見えた。

「凶狂書は私が食べたのだー。もう目が付けられない程暴れる事はないと思うけど、まだ凶狂書は消滅してないのだー。」

「…そうね。凶狂書には写本が存在する。その写本を消さない限り…狂気は伝染る。」

「解ってるなら行くのだー。私も力を貸すのだー。」

「ありがと、ルーミア。それと、そろそろその髪飾り外したら？これから忙しくなるし。」

「そーだね。」

ルーミアは髪飾りを外した。

瞬間、ルーミアの空気が一変する。

「…ふう。桜、これでいいかしら？」

ルーミアの身体付きはそれほど変わらないが、口調が大人になった。

「いいよ。…さて、執事を助けに行きましょうか。」

「それがいいのだー。」

「あれ、口調が戻った？」

「長年この口調だったからなかなか抜けなくて。」

「…そうよね。」

くすくすと笑いながら、二人は行く。

一方。

「う……」

目を開けた青年……瞳の色は透き通った紫に戻っていた。

「俺は……何を……？」

「目覚めたかしら、双月奈落？」

首を動かして周りを見ると、紫がお茶を啜っていた。

「…あなた、何時から凶狂書に喰われたの？」

「…解らない。俺は地底に行つて…凶狂書を手に入れて…そこに敵が来て…此処から何も覚えていない。」

「何故凶狂書を手にしよう？」

「…囁かれた。『凶狂書さえ手にすればお前は強くなる』。」

覚えているのは此処までだ、奈落はそう続け、口を閉じた。

「…やはり…あの者の仕業ね…」

紫は神妙な顔をした。

「…俺は…何をしたんだ…？」

「凶狂書を手にした者に精神的な強さがなければ、凶狂書の狂気に喰われる。あなたは狂気に喰われたのよ。」

「…狂気…。」

「一度狂気に喰われた者の心には、何時も狂気が手招くようになるわ。…あなたはこれから狂気と戦わないといけない…そして狂気に勝つのよ。」

「狂気に…勝つ…。」

「でも私じゃどうしようも出来ない…だから私は助っ人を呼ばせて貰ったわ…入って。」

奈落の目に入ったのは…

「奈落ー！」

「…こんごちは…」

「…フラン…！どうして…！」

「…同じ狂気を身につけた者として…狂気に打ち勝つ助けをする為

に、私はそうしたの。」

紫ははっきりと言った。

異変の終わり、そして新たな異変の始まり（後書き）

次回予告！

第二章完結！！

というわけで次回
「一時の平和」

一時の平和（前書き）

前回までのあらすじー！

・とりあえずかいとは助かった、以上！

第二章完結！

一時の平和

「…確かに、狂気に打ち勝つには同じ経験をした人間から話を聞くのは良い事だが…」

フランが奈落の手を握って言った。

「奈落は私を助けてくれた、今度は私が奈落を助ける番！」

「…私も手伝う…」

「…解った。だが、その前に休ませてくれ…」

そして。

無事にかいとを救ったあきら、ぼっちょは飲めや歌えやの祭になっていた。

「いやー、私達が出てない間にこんな展開があったのね。」

「私達を出してくれたらミシャグジさまとか出してボコボコにしたのにー。」

文が書いた『かいと異変（と勝手に文が名付けた）の真相』という本を読みながら、神奈子と諏訪子はそう話していた。

「そっぴやさ、結局かいとは嫁を見つけたのか？」

「ああ、見つけたぜ！けど彼女は鬼の頂点に近い人だ…俺はもっと強くなって、彼女と結婚する！」

「「彼女って誰だ…」」

「僕は文を倒してから始めてかいとがさらわれたって話を聞いたよ。」

「そうか…でさ、何でぼつちよはあの時早苗さんと一緒に来たんだ？」

「…実は…僕…」

「結婚前提でお付き合いする事になったんですっ！」

早苗がぼつちよに抱き着く。

「文を倒して…謝らせたんだけど、神奈子さんが『こんなに早苗の事を想ってくれてるんだから結婚前提で付き合いええ？』なんて言うもんだから…」

ふっふっ…

少しずつあきらかいかいとの体温が上がる。

「ぼつちよ君、格好よかったです！」

「そんな感じで付き合ってるんだ…」

「もうキスまでしたんですからねっ！」

プチンー！

ついにあきらとかいとが怒りに覚醒。

ゆらりゆらりとただならぬ様子で立ち上がるあきらとかいと。

「…？どうしたの？」

「お前は俺が忙しかった間に何ハッピーエンドルート行きやがってるんじゃないのやろおおおおおおお！……！！……！！……！！」

そしてかいとが叫ぶ！

「ファイナルフュージョン承認すっ飛ばしてガイガイガー！！！」

あきらも叫ぶー！！

「想聖『漢拳』！！」

「エデنزブシード、フィールド展開！！」

「怒りよ…俺に少しだけ力を分けてくれえ！！」

「デス！！アンド！！ライブ！！」

「ばあああくねっ！！！マングローブ！！ふいんがああああああ
あああああ！！！！！」

同時に迫る二人の技！！

「護法『アンカーシールド』！！」

しかし、漢拳はシールドを無視してぼっちょに直撃！

さらにデスアンドライブが！！

こうして、幻想郷に平和が戻った。

「「「終わらないぞ！！！！！？」」」

え？終わるって思ったの？ばかなの？

謎は…まだ解明されていない。

一時の平和（後書き）

次回予告！

正直な話、書き溜めがなくなってきたのでまたまた番外編！

番外編「文の突撃レポート」

文「見てよー！」

番外編 『文の突撃レポート』 (前書き)

番外編…

本編はもう少し待って下さい…

番外編 『文の突撃レポート』

射命丸文の！突撃レポート！

～BGM～

こんにちは、清く正しく美しくの射命丸文です！

本日は風見幽香さんにお話を聞いてみたいです！

幽香さん、この間やっと出演されましたが、どうでしたか？

「別に…」

古い！その素っ気なさ、古いですよ！

「…何？」

この前出演されましたが…

「うん…楽しかったわ。でも、出番がそんなになかった。」

そうですねえ…ですが、なかなか良い役じゃなかったんですか？

「そうね。でも、一応この小説じゃ私は支配者とか言う重要な役みたいだし、もう少しプッシュしてもいいんじゃないかしら。」

流石ですね！ゆうかりんの名は伊達じゃないですね！

「ゆうかりん…？その呼び方、男性に呼ばれるならまだしも、女性にそう呼ばれるのは違和感あるわ。」

あ、すみません。

「ところで、情報量が多いあなたに聞きたいけど、この小説の作者の好きな花は何なのかしら？」

えっと…あ、桜が好きみたいですよ！

「桜…悪くはないわね。」

ん？それはどついで…

「別に。」

だから古いですって！

「ふう、文を弄るのはそんなに面白くないわね…0点で。」

採点基準は何！？面白さ！？

「あ、少し面白くなった…0・1点で。」

0・1点ってなんで！？

「噛めば噛む程面白くなるスルメのような天狗と記憶しておくわ。」

(…埒があかない…)(以上風見幽香さんでした、ありがとうございました！)

続いてはチルノ（さん）です！

「あたい最強！」

はい、チルノでした、ありがとうございます！

「あたいのターンだけやけに短くない！？」

（ちっ、そこまで馬鹿じゃないか…）冗談ですよ！

「あ、冗談なのね。」

では、自称最強とのことですが、何処が最強なんでしょう？

「テンション天下天子夢想封印なのよ！」

天上天下天地無双なんです…言えてない…

「べ、別にいいじゃない！意味さえわかっているばそれでもいいのよ
」！

…そういうことにはしておきましょう。ところで、チルノは馬鹿じゃないよね？

「急にタメ口！？それにあたいは馬鹿じゃない！」

…へえー、そーなのかー。

「なんか地味に物真似が上手いつ！じゃなくて！ほんとに馬鹿じゃないもん！」

では、抜き打ちで計算テストしてみましょう。

「どーんとかかっつきなさい！」

では言葉に甘えて。15×4は？

「そんなの簡単！60！」

おお、正解した！

「何処まで馬鹿にするのよ!？」

(無視)では次。68×14は？

「う…ちょっと難しいわね…」

〈妖精計算中…〉

「わかった!952!」

おお、正解した!じゃ次!345×16は？

「えっと…これをxとおいて…因数分解して…」

なんで因数分解?何をxとおいた?

「ここで、(シグマ)を考えて…」

なんで?

「これが0だから…わかった！5520！」

…正解。（合ってるから突っ込めない…！）

「どうだ！あたいは天才よ！最強なのよ！」

…そしたら、この時計を見て。今何時？

（文は11：48の時計を見せました）

「9…68！」

どうしてそうなった…68分って何…

「あたい最強！」

はいはい…馬鹿さは最強ですね…以上チルノでした。

次回にご期待下さい、ではさようならー！

番外編 『文の突撃レポート』 (後書き)

次回予告！

第三章突入(予定)！

というわけで次回

「第三章突入！」

第三章突入！（前書き）

ここから本編ですよー！

皆様お待たせしました！

第三章突入！

これは太古の昔の伝承

まだ幻想郷が出来た頃の話…

幻想郷には7人の支配者が存在した

八雲紫…幻想郷と世界を隔離した張本人にして幻想郷の母と呼ばれる存在…

風見幽香…自然を愛し、幻想郷中に自然を届けた自然の支配者…

西行寺家の長…幻想郷が出来る前から人々と関わっていた…人々の支配者

地獄の番人…地獄を管理し、死者を裁く…地獄の支配者

そして支配者たちははさらに、人々に最も近い立場の支配者…

ただ単に力が強い支配者…さらに支配者達を支える支配者を必要とした…

人々に最も近い立場の支配者として…最初はしがない人間が選ばれた…村の長のような人間が…

力が強い支配者として…支配者たちはある魔法使いを選んだ…それが縁月桜…

そして支配者たちを補佐し、支える存在として、ロギアという得体の知れない存在を選んだ…ロギアは後に『凶狂書』と呼ばれる本に自ら進んで封印されることを望んだ…

こうして幻想郷は争いばかりあった時代は何処へやら、平和になったのだ…。

さて、この伝承には続きがあると言ったら果たして驚くだろうか？

なに、テンプレ?...じゅめん。

伝承はこう続く…

ロギアは自分の力を弱き者に分けてやる事にした。ところが、自分の力を手にした者たちは皆発狂した…ロギアは絶望し…そして…『凶狂書の複製』を企んだ…全ては狂気に落とした支配者たちを動かす…幻想郷を支配するために…

プロローグ

「助けてー!!」

幼い少年が、深い森をひたすらに逃げる。

「グルウアア!!」

それを追うは絵の具で塗り潰したような黒い獣達。

「わぁっ!!」

少年は木の根に躓き、地に伏してしまふ。

好機と見た獣は一斉に少年に飛び掛かる…

その黒い牙が、少年を貫かんとした、その瞬間。

「切札『無時空間・虚空』」

ナイフが獣を貫く！

「大丈夫か？」

声や体つきからして男…だが顔がよく見えなかった。

「う、うん！」

「良かった…少し待っていてくれ。」

「あ、危ない！！」

青年に飛び掛かる獣。

「試してみるか…憤怒『熔けそうな火炎地獄』」

青年の右手から放たれる煉獄の炎！！

それは獣たちを苦しめるには十分過ぎるものだった！

「…逃げたか。」

炎が消えた時には、獣たちはいなくなっていた…

「よし！着いたぞ！」

青年は少年を連れて人里へ。

「ありがとう！」

純粹な笑顔は、青年にとっては眩し過ぎた。

狂気を宿した者に、純白は毒だ。

「ああ！気をつけて帰るんだぞ！」

少年を見送った青年…

彼こそ、凶狂書に魂を喰われ、生き残った者…

そしてこの異変を解決する大きな鍵となる者…

双月奈落。

「…すみません。」

「ん？どうしました？」

引き返そうとした奈落を引き止めたのは…

黄緑色のローブに身を包んだ少女。

白に限りなく近い淡い桃色の肌。

それと正反対のつやつやした黒い髪。

風に靡くその様はまるで絶世の美少女。

「…あなた…双月奈落ね？」

「…俺はあなたに見覚えがないですね…誰です？」

奈落にとっては彼女は初めて見る顔であった…はずだった。

「やはり忘れていたのですね…350年前の出来事を。」

「350年前…?というところ…俺がこの幻想郷に来た頃だが…?」

奈落は350年ほど前にこの幻想郷に入った。

しかし、それ以前の事は一つも覚えていない…忘れたものだと、奈落は思っていた…この時まででは。

「仕方ありませんね…思い出させてあげましょう。」

少女は奈落の額を軽く押した。

第三章突入！（後書き）

次回予告！

奈落と桜、邂逅！

そして獣たちは何なんだっ！

というわけで次回

「3馬鹿達の出番は次回」

あきら・ぼっちょ・かいと「おい待てこの作者が」

3 馬鹿達の出番は次回(前書き)

前回までのあらすじー！

・ぶっちゃけプロローグ

うん、そーなんだ…

3 馬鹿達の出番は次回

同時に、奈落に起きる異変。

何かが…何かが自分に流れ込んで来る。

怪物と戦う自分…

無事を願う少女…

「！！」

奈落は全て思い出した。

そう…彼女は…

「桜…？」

「そうよ。縁月桜とは私の事よ。…久しぶりね、奈落。」

「…どういう事だ？俺はあの時…350年前、俺は桜に仕えていた…そこまでは記憶にあるが…なんで桜が幻想郷にいるんだ？」

「…私の魔法よ。魂のかけらを残す魔法…奈落が仕えていた桜という存在は、私であって私ではないの。私本体はずっと幻想郷に居たわ。」

「つまり…俺は今まで…」

「騙されてた訳ではないわ。魂のかけらを残した人間は、私と同じ存在みたいなものになるから。」

「…信じられる話じゃないな…」

「まあいいわ。とりあえず、私はあなたを迎えに来た…この意味、解るかしら？」

「…桜、俺はまだやる事がある。その頼み、きつと飲めない。」

「…そう。ならやる事を真っ先に終わらせなさい。このままでは…
幻想郷が消える事になるわ。」

そんなシリアスシーンをよそに。

この人達はおかしくなっていました。

「さて…小五口リを捜すか。」

もつと駄目人間と化したかいと。

「ぼつちよ君、あーん。」

「もぐもぐ…めっちゃ美味しい！」

なんてやってるぼつちよと早苗。

で、あきらはと言つと…

「あきら君ー！」

白玉楼の主にフラグを立ててしまったみたいですよ。

「幽々子さん！？なんで居るんすか！？」

フラグ立った事すら気付いていないあきら。

「え？駄目なの？」

うるうるると涙目になる幽々子…可愛いと思ったたらもうおしまいである。

「いや…駄目じゃないんですけど…白玉楼は大丈夫なんですか？」

「ええ！妖夢が居るから！それより、なんか食べたい！」

食べたいって…

「何を食べたいんですか？」

「うーんとね、お団子食べたい！買ってきて！」

「お団子ですか…」

仕方なく、団子を買いに行くあきび。

「…？」

あきびはふと思った。

今までと同じように見える風景。

昨日見た緑溢れる木々。

この間通った道。

しかし、何かが違う。

あきらは何故か、その事が心から離れなかった。

それは団子を勝った帰り道に解る。

「グルウアア！！！！」

「！？」

あきらを取り囲む黒い獣！

見渡して、5匹居ると解る！

「…これは辛いな…！」

ぐるる…と唸り声を上げて威嚇する獣たち！

「…俺は帰らなきゃいけないんだ！具現『修羅の世界』…！」

まず一匹を肘で突き飛ばし！

隙を突くように噛み付いてきた二匹を掌でいなし、頭を押さえて投げ飛ばす！

「まだかつ…！」

残り二匹が少しずつにじり寄ってくる！

「沈めっ…！」

あきばは自ら接近し、回し蹴り…！

ぴくりと動かなくなった五匹を見て、あきは安心する。

「急がないと。幽々子さんが待ってる。」

あきは帰ろうとした、その時。

ドゥウウウウウウウン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

大地が揺れた。

「!?!」

音がした方向を見ると、煙がもくもくと立っている。

嫌な予感がして、あきは走って戻る事にした。

「…弱いね。なーんだ、つまんないの！」

洩矢神社では、一方的な暴力が振るわれていた。

動かない神奈子と諏訪子。

幽々子はいない。

そして早苗を後ろに、敵に立ち向かうぼっちょとかいと。

「諦めなよ。私は強いだよ？」

背中に赤く丸まった矢のようなものが数本、さらに青い矢印のようなものがある、黒い服の少女。

「…あれは…封獣ぬえ…伝説の妖怪…！」

早苗は恐怖していた。

ぬえぬえとていう存在は妖怪の頂点に立つものだと言っても過言ではないからだ。

「伝説なんざ関係ねえ！」

ガイガイガーになったかいはぬえに突っ込む！

「倒せばおしまいだ！ガトリングバンカー！！！」

ぬえの居る場所目掛けて振り下ろす！

それは足元を不安定にさせる為の行為！

「ふーん。でも私は空を飛べるのよ？」

ぬえは飛んでかわす！

「…ふっ！笑わせる！」

「何のつもり？」

かいはさらに一手切り込む！

「ぼつちよ！！ハルバードだ！！」

「ああ！」

ハルバードを掴み、ぼつちよはぬえに投擲！！

「…やるじゃん！」

ぬえは笑ってハルバードを掴む！！

「なっ…！！？」

「甘いね！」

ぬえはさらに三つ又の槍を掴み、ハルバードをかいとに投げ返す！

「舐めんな！」

ハルバードをかわしたかいと、ぬえに拳を振るう!!

「…ふう、もう終わらせようか。砲符『弾幕キメラ』」

かいとに直撃する大量の弾!!

零距离での弾の威力の前に、かいとは無防備に地面に墜ちる。

「かいと!!」

「余所見していると死んじゃうよ?」

ぼっちょの真後ろに現れたぬえ!

同時にぼっちょの身体に走る痛み。

「…え…?」

ちょうど腹の真ん中から見える槍。…血に濡れた槍。

「おしまい。」

槍を軽く振り、ぼっちは血の筋を残して地面に投げられた。

「さて…残るはあなただけ…」

早苗に少しずつ近づくぬえ。

足が震えて動けない早苗。

「じゃ、バイバイ。」

槍を振り上げるぬえ。

「具現『修羅の世界』…！」

3 馬鹿達の出番は次回（後書き）

次回予告！

突然襲い掛かったぬえ！

皆大丈夫なのか！？

というわけで次回

「激動の始まり」

ぬえ「やった 出演した！」

激動の始まり（前書き）

前回までのあらすじー！

・ぬえが登場、かいととぼっちょをポコポコに

…おい大丈夫なのか！？

激動の始まり

あきらがぬえを殴る！！

「うっ！！」

少し身体が宙を舞ったが、これはダメージの範疇に入らない。

ぬえはすぐに立ち直り、あきらに顔を向ける。

「…面白そうな人。」

そう言い切った瞬間、あきらが蹴りがぬえに！

「はっ！！」

蹴りは槍に防がれる！

「ちいっ！！」

すかさず足払いをするが、それもぬえにかわされる！

「ふふふっ！もっと楽しませてよ！！」

ぬえが槍をあきららに向けたその時！

「…うにゃ？」

突如、ぬえの動きが止まった。

「…うん、解った。…君とはここでお別れよ。じゃっ！」

ふわっと、ぬえは飛び、どこかへ行ってしまった…。

戦いが終わり、あきららは改めて事の大きさを知った。

「ぼっちよ…！」

あきらはぼつちよに駆け寄り、身体を起こしてやる。

「…あき…ら…」

「!?!?血が…!?!」

あきらの右手を濡らした赤いそれが、怪我の酷さを物語っていた。

「…かい…とが…」

「かいとが…!?!」

「かいと君は気絶しているだけです!」

向こうから早苗の声がした。

「ぼつちよ!かいとは大丈夫だ!早く病院に!」

「その必要はないわ」

空間を斬り裂き、紫が現れた。

「紫さん…!？」

「ぼっちょをこちらに。一刻を争つわ…私が何とかする!」

紫はぼっちょを抱え、空間の向こうに消えた。

「う…」

神奈子と諏訪子が起き上がる。

「神奈子様、諏訪子様！大丈夫ですか!？」

「ええ…何とか。」

「私も…大丈夫…」

「早苗さん…あいつは何だったんですか？」

「あれは妖怪の中の頂点…鵂。名前は封獣ぬえと言います。」

「ぬえ…！」

「普段はおとなしいはずなんですが…なんで…？」

その頃。

「良いところ邪魔しないでよー。折角倒せると思ったのにー。」

ぬえは壁の向こうに居る『何か』に向かって言った。

「まあ待ちたまえ。今潰しても楽しくないだろう？後少し待てば、もっと楽しくなる…恐怖に畏れ戦く者たちの顔を、じっくりと見物出来るのだぞ？」

明らかに楽しんでいると思われるロブリ。

「今やった方が良くない？だって博麗の巫女とか、魔法使いとか、邪魔者はいっぱい居るんだよ？」

「確かに一理ある。だが…弱者に希望を持たせておいた方が良いのだよ。それをいとも簡単に潰せば…真の絶望が生まれる。」

「ふーん…ま、君が言うんなら本当だろうね…」

ぬえは少し間を置き、こつ続けた。

「ロギア君。」

一方。

マヨヒガでは、策が取られようとしていた。

「藍、今すぐ文を呼んで。緊急事態よ。」

「はい！」

「橙は幽香と幽々子を呼んで。私は四季映姫を呼ぶわ。」

「はい！」

橙と藍が行った事を確認し、紫は眠るぼっちょに目を向けた。

「……まずいわね……応急処置だけはしておいたけど、出血が止まらない……四季映姫を呼ぶ前に、彼女を呼ばないといけないわね。」

紫は空間を斬り開き、消えた。

「今日も暇ね…」

と呟く輝夜の前に、空間が歪む！

「…こんにちは、輝夜。」

「何の用かしら、八雲紫？」

「怪我人がいるの。永琳を連れて行っていいかしら？」

「怪我人？」

「ええ。嘘だと思っただけならついてきても構わないわ。」

暫く無言の時間が流れる。

「…解ったわ。永琳！」

すぐに現れた永琳。

「八雲紫と一緒に行くわよ。怪我人がいるらしいの。」

「解りました。すぐに支度します。」

数分して、永琳が戻ってきた。

「さて…行きましょう。」

激動の始まり（後書き）

次回予告！

衝撃の展開はまだまだ続く！

超展開ばっかり！

というわけで次回

「とんでも展開なら任せなさい」

霊夢「それは余りにも理不尽だと思っわ」

作者「仕込みは大事ですよ？」

とんでも展開なら任せなさい（前書き）

前回までのあらすじー！

・なんか色々とおかしなことに

…書きだめがなくなってきた…（涙）

とんでも展開なら任せなさい

「…」

奈落はある者の話を聞いていた。

「…それは本当か？」

「なんで私が嘘をつかなきゃいけないのよ。本当よ。」

ある者とは、紅魔館の主、レミリアである。

「つまり…何者かによる襲撃、と？」

「ええ。洩矢神社がそれでかなり被害を被ったみたいね。あの異界人たちも怪我したようだし。」

レミリアはあきらの存在を知らない。

「状況は？」

「今の時点じゃ、洩矢神社が半ば壊滅状態、さらに人里が一つ壊滅したわ。上白沢慧音が抵抗したようだけど…無理だったみたい。」

「どういうことだ…？何故博麗神社ではなく、洩矢神社なんだ？」

「そこでもう一つ気になる話があるわ。かいと異変が終わった頃から博麗霊夢の行方が知れないのよ。」

「霊夢が…？」

「ええ。マヨヒガに大穴が空いていたけど、霊夢は落ちていなかった。」

「…何かきな臭いな…」

「私は人々を紅魔館に匿う事にしたわ。」

「優しいな…その後をにらんでいるのか？」

レミリアは僅かに唇を上げた。

「まあ、そんなものよ。貴方も頑張りなさい。」

「フランは頼んだ。当分戻れそうにないからな。」

「解ったわ。」

その頃。

「出さない！出さないよ！」

がんと鉄格子を叩く紅白の巫女。

「…」

しかし、誰もいない。

一日に二度、食料が届けられるだけで、それ以外は人影一つもない。

「…今は待つしかないの…?」

> あきらむ視座 <

あきららはひたすらに自らを責めているかのように空を殴る。

イメージトレーニングである。

「はぁっ…!」

蹴りも鋭さを帯びる。

俺は強くなる…ならなきゃいけないんだ!!

「…俺は…!!」

鬼気迫るオーラを纏いながら、彼は自らを鍛える。

>紫視点<

「…」

私は永琳と輝夜にぼつちよを見て貰った。

「…確かに酷い怪我ですね…出来れば状況を教えて貰いたいです
が。」

永琳は救急箱やその他諸々の準備をしながら尋ねる。

「聞いた話だけど、封獣ぬえという妖怪が刺したみたい。」

幽々子から聞いた話。

「ぬえ…伝説の妖怪と言われる存在ですね。だとすれば、妖力に汚染された可能性がある。」

「それは心配に及ばないわ。彼、霊力持ちだから。」

「では…彼の霊力を回復しつつ傷の治療をします。大丈夫です、命に別条はないはずです。紫さん…彼に妖力を注いで貰えませんか？」

「ええ。」

妖力というものは不思議なものだ。

敵意を持って襲えば自らの妖力は相手にとって毒になり、誰かを助けようとすれば妖力は相手にとって薬となる。

私は永琳の頼みに快諾して彼…ぼっちょに妖力を注いだ。

その間に、永琳は手当てをする。

さささつと永琳の手が進む、そして5分も経たずして処置は終わった。

「…姫様、彼は異界人のようです。彼の力…計り知れません。」

「ふむ…かいとと言い、この異界人と言い…異常だわ。まず彼の場合…霊力が枯渇する事が有り得ない。

あるとすれば、それは自らの霊力を100%出し切っていないから…今の彼でせいぜい40%くらいね。

全ての霊力を引き出せるようになれば、治療なんて必要なくなるわ、それくらいの霊力量ね。」

治療なんて必要なくなる…この時点で最大霊力は藍と同等、またはそれ以上。

それは彼が将来的に抗う事すらままならない存在になる…それを示す。

「まさに歩く霊力倉庫よ。仮に彼と戦う事になったら、私も少し不利になるかも。」

「しかし、面白い存在ですね…霊力を使い切る事がない存在…それが彼…本当に面白い…」

とんでも展開なら任せなさい(後書き)

次回予告!

なんとあのキャラが登場!

キャラ崩壊の恐れありだが、大丈夫か?

というわけで次回

「幻想郷をぶち壊そうかなー!」

??? 「大丈夫だ、問題ない!」

作者「いやいや、問題ありすぎですよ!」?

次回更新

きつと明日…（あくまで予定のため、早くなることは十分有り得ます）

幻想郷をぶち壊そうかなー… (前書き)

前回までのあらすじー！

・あれ？霊夢が…

幻想郷をぶち壊そうかなー…

「…ねえ、何時になったら全部潰していいのー?」

ぬえが待ち切れない様子で聞く。

「もう少し待て、ぬえ。今彼女が最後の準備をしている所だ。」

「…あの女、使えるの?」

「その為にもう一人助っ人を呼んである。」

「…ぬかりないのね。」

「最後の準備さえ終われば、もう暴れられる。それまでもう少し待ちたまえよ。」

「…もう少しだけよ?」

その頃。

紅魔館には招かれざる客が訪れていた。

「あなた…誰です？」

門番…美鈴はいつもの寝ている門番ではなく、真剣な表情で客を見ていた。

「靈鳥路空…」

核の力を得た鳥。

「聞いた事ありませんね…それに、何か危ない気がする。」

門番は自らの使命を果たすべく、戦闘態勢を取る！

くつと身体を落とし、美鈴が駆け出そうとした瞬間！

「…あ、終わったのね。」

空は踵を返して飛んで行ってしまった。

「なっ、待ちなさい!!」

美鈴は追い掛けるが…

この時、紅魔館からある魔導書が盗まれていた。

「…こんな本ごときで私を動かすなんて…妬ましい…」

紅魔館をそそくさと出て行きながら、彼女はぼそりと呟き、風景に消えた。

「…持ってきたわ。」

少女はポんと一冊の本を置いた。

「素晴らしい…！これさえあれば、私は幻想郷の神になれる！ぬえ！
！霊夢を呼んでこい…！」

「はい。」

ぬえは霊夢を引きずってきた。

「さあ…君の力を少し借りるよ。」

壁の向こうから現れた、ぼやけた煙のようなものが霊夢に同化する。

「さあ…博麗の力、凶狂書、そしてこの禁術の魔導書…全てを糧とし、今私は神となる…!!」

霊夢の身体を借りた支配者…ロギアは両腕を広げ、叫ぶ!

「我が名はロギア!! 暗黒の世界の主よ…姿を見せてくれ!!」

闇が開かれる。

「素晴らしい…素晴らしいぞ…!!」

狂気の塊は最強の存在の出現を待った…

ところが。

「うーん…誰? 私を起こした奴は…」

闇から出て来たのはロギアが望んだ存在…すなわち縁月桜ではなかった。

なんせ桜はルーミアが目覚めさせたし…まあ骨折り損である。

さて、新たに現れた存在だが、見た目からして『魔法少女』という
ルックス。

青と白のセーラー服を参考にしたようなカラーリングのローブ。

勿論頭には三角帽子装備、さらに止めと言わんばかりの三日月の杖。

きらきらしてる黄緑の髪は、どこか荘厳さ…カリスマ性を見せる。

「…ん？霊夢…じゃないじゃん！！」

少女は怒っていきなり両手で何かを包むようなポーズを取る！

「マスタースパーク！！」

霊夢…もといロギアは突然の攻撃に成す術がなく…

ピチューン!!

「霊夢!?大丈夫!？」

かと思うと倒れた霊夢を揺さぶる少女。

「う…う…」

「大丈夫!?しっかりして!」

「…うん、ありがとう…ってあなたは!？」

霊夢は驚く。

「久しぶり!私よ、魅魔^{みま}だよ!」

ここで了承して貰いたい事がある。

魅魔と言えば東方Project初期の出演キャラ…すなわち『旧作』出身である。

当然ながら（そんな事言っちゃ駄目だと思うが…）作者は口調とか知らないのです。

というわけで、某大百科などを参照した上でこの小説では

『ほんとは悪霊なんだけど、悪い事は気まぐれにしかやらない根はとつても良い人、イベント大好き』という性格に設定しました。

「魅魔！？なんで此処に！？」

「だってさ…さみしかったもん。」

「「「え？」「」」

空、ぬえ、妬ましいが口癖のぱるぱるさんが同時に反応。

「考えてみてよ！なんか紅魔郷とか始まった頃から私の出番がなくなつて、友達の幽香はなんでか花映塚で出演しちゃうし、まあ霊夢や魔理沙は主人公枠だったから納得したけど、なんで私が出れないわけ！？」

「確かに…」

東方Projectシリーズに詳しい人達なら解る話だが、実は風

見幽香は旧作出身のキャラである。

というわけでゆうかりんは出世したって事になるのだ。

「早く出たいなー、出たいなーって念じてたらなんか此処に来ちゃったんだけど。」

なんか目茶苦茶である。

「とりあえず、魅魔は皆になんでマスタースパーク撃てるか説明して！ここらへんの人達は皆『マスタースパークは魔理沙のスペルカード』という認識だから！」

「解った、霊夢！私、魔理沙のししょーなのー！！！」

「「「師匠！？」「」」

幻想郷をぶち壊そうかなー…（後書き）

次回予告！

まさかの魅魔様出演！

とんでも計画が、今発動する！

というわけで次回

「やっぱり幻想郷を潰す事にしました」

霊夢「えっ？」

魅魔「まあまあ、次回まで待ってちょうだい！」

やっぱり幻想郷を潰す事にしました (前書き)

前回までのあらすじー！

・魅魔様登場

やっぱり幻想郷を潰す事にしました

「「師匠つて、どういふこと!?!」」

「だから、魔理沙にマスタースパーク、別名マスパを教えたのは私なの!

私がマスパの原理を教えて、魔理沙がこーりんとか言うアホの力を借りて安定してぶっ放せるようになったの!」

「なんか凄い…。」

もはや突っ込み切れない人達(霊夢除く)。

「というわけで、私はマスパなんてどんどん撃てるんだからね!」

「でも…」

ばるばるさんが突っ込む。

「仮にそれが本当だとしても、なんであなたは今までこの幻想郷に来れなかったのかしら?」

不意打ち喰らった霊夢。

「あのね、私も幻想郷に異変を起こしてみたいの！それに、いつつも霊夢は異変を解決するほっばっかりで、異変を起こした事ないでしょ？」

「あ…そういえばそうね…」

「というわけで事前に通達しといて人里一つ吹っ飛ばせば皆食らいついてくれるよ！」

「でも人里には人がいっぱい居るのよ？怪我させるわけには…」

少々後ろめたさがあるのか、霊夢はぼそりと呟く。

「怪我させるのは嫌よ？だから事前に通達して人々に逃げて貰うの！それでだーれも居ない人里を吹き飛ばすの！そうすれば誰も怪我しないでしょ？」

「…それは凄いや考えね！」

確かにそうすれば誰も怪我させずに異変を起こせる。

「よし！そうと決まればまずは部下を集めよう！えっと…霊夢と…」

「あ、私は封獣ぬえ！」

「…水橋パルスィ…」

「霊烏路空！」

「ぬえに…パルスィに…空ね！宜しくね！というわけで早速お仕事、頼まれてくれないかしら？」

「いーよー！」

ぬえが手を挙げる。

「ありがとぬえ！まずはね、風見幽香って人を連れて来て欲しいの！魅魔が来たって言えばきつとついてきてくれるよ！」

「解った！行ってくるねー！」

ぬえは飛んで行った。

「さて、パルスイには私に賛同してくれそうな人を連れて来て貰いたいわ！」

「…いっぱい居る気が…」

「呼べるだけでいいから呼んで来て！」

「…解った。」

パルスイもてくてくと部屋を出た。

「霊夢と空にはお城を作って欲しいの！ちょっとしたものでいいわ！」

「うん！…うん？」

「ほら、行くわよ！」

霊夢と空も出て行った。

「この本…凶狂書…？よし、焼いちゃおう！マスタースパーク！！」

「うそおおおおん！！？」

凶狂書…ロギアは今度こそ完全に消滅した。

「よし！これで楽しくなるぞー」

魅魔はニコニコしながら鼻歌を歌い始めた。

「…というわけなの。私に協力してくれるかしら？」

パルスィは地底に戻り、友達の星熊勇儀・古明地さとり・こいし姉妹に協力を要請していた。

「解った。こいしも良いよね？」

「いいよー!!」

「そりゃ面白そうだな！あたしも協力するぜ！」

鬼の女性も快諾。

「ありがとう！」

一方、ぬえは…

「魅魔が来たって言ってた！。」

「え！？」

幽香、驚愕。

「来てってー！」

「…解ったわ。」

現在の魅魔軍部隊員

魅魔・霊夢・お空・幽香・ぬえ・パルスィ・さとり・こいし・勇儀

やっぱり幻想郷を潰す事にしました
(後書き)

次回予告！

なんか魅魔の仲間が増えてる！

ちよっとほんとにどーなるのこれ！？

というわけで次回

「魅魔の友達100人出来るかな」

ルーミア「きつと出来るのだー！」

魅魔の友達100人出来るかな(前書き)

前回までのあらすじー！

・魅魔、仲間を増やす事に

・主人公の影が薄くなってきた

魅魔の友達100人出来るかな

ぬえはまたまた飛び回り、さらに仲間を増やす事にした。

「ねえねえ、私の仲間になってー！」

「いーよー！」

ノリの良い妖怪達。

その妖怪達を統率していたのは…

「にゃははははは！霊夢が居るって言うんだからねー、楽しそうだよねー！」

「そうですね…私も頑張ります！」

鬼幼女、萃香と蟲使いのリグル・ナイトバグ。

後ろには、大量の毛玉に紛れ込んだ…ミステリア・ローレイ、雀の妖怪である。

さらに増える魅魔軍。

一方、こちらでは…

「幽香…本気なの？」

「ええ。桜…貴女にもついてきて貰いたいの。」

幽香は桜を誘っていた。

「…一つだけ質問するわ。その魅魔…凶狂書に喰われていないのね？」

「間違いないわ。凶狂書はなかった。」

「…奈落、どうする？」

「…調べる必要があるようだ。狂気に喰われていないなら、安心して協力出来るが…」

「まあ、まずは会って話を聞いてみましょう。ルーミアもいいよね？」

「話を聞いて判断するのだ！」

「…という事よ。幽香、案内してくれる？」

「解ったわ。ついてきて。」

そんな中…

「風見幽香は何処に…？」

出遅れた橙。

「文ー！どこー！」

探す藍。

現在の魅魔軍メンバー

魅魔・霊夢・お空・ぬえ・パルスィ・幽香・萃香・リゲル・みすち
ー・さとり・こいし・勇儀

暫定魅魔軍メンバー

桜・奈落・ルーミア

こんな状況にも関わらず。

あきららは自らを鍛え、ぼっちょは負傷、かいとはやっと復帰した所である。

それから数日。

桜は魅魔と話をし…

「みーちゃん可愛いー！」

「さつきくんも可愛いー！」

お互いを『みーちゃん』『さつきくん』と呼び合う程仲良くなった。

一応、奈落は魅魔の心を狂気の面から見てみたが、狂った所なんて一つもなく、寧ろ「普通過ぎて逆に怖い」と言わす程であった。

ルーミアはそれを聞いて「へえー、そーなのかー。」と言い、勧誘に承諾。

というわけで、魅魔軍のメンバーに正式に入った桜・奈落・ルーミアの3人。

一方。

「…えっ…!？」

「申し訳ありません紫様…風見幽香は行方不明です…。」

「くっ…!」

してやられた、紫はそう思った。

全てが後手後手。

「…ということとは…」

現在居るのは紫、藍、橙、輝夜、永琳、そして呼んだ文、四季映姫、小町、幽々子、妖夢、怪我をしたほっちよ。

「…圧倒的に不利ね。でも負ける訳にはいかないわ。」

紫はあくまで強気に出た。

「でも、霊夢が居ないのは解るけれど、なんで幽香が居ないの？」

最もな質問だが、映姫は紫にそう尋ねた。

「それなのよ映姫。考えられるのはたった一つ。…先に手を打たれたとしか考えられないわ。」

「つまり、敵は封獣ぬえ一人ではない、複数居る…」

「その可能性はかなり高いわ…いや、複数居る。」

「根拠は？」

「封獣ぬえに遭遇した異界人が、ぬえが突然何かを聞いたかと思うとすぐにいなくなったと証言しているわ。誰かに命令されたのかもね。」

「…十分に根拠として認められるわね。」

「…何より、支配者が3人しか居ない…残りは行方不明…桜が居れ

「何か変わったかもしれないけど…」

桜、その言葉に映姫は僅かに反応した。

「桜…ね。確かに彼女は強かった。でも、彼女は…」

「ロギアによって封印された…危険過ぎる存在として。」

「ロギア…魔術に関しては異常だったわね。」

「そのロギアも行方不明…」

現実には消滅しちゃったんだけど。

「…でもやるしかない！さて、今この幻想郷は未曾有の危機に晒されているわ！」

決して「みぞうゆう」「じゃないよ。

紫は続ける。

「我々は協力して封獣ぬえ並びにその後ろに居る者を何としても倒

さなければならぬ！」

「これは戦争よ！勝たなければ、未来はないわ！
未来の為に、我々は戦うの！どうか皆…この八雲紫に力を貸して！
！」

その返答は、拍手によって返された。

「皆…ありがとう…！…！」

魅魔の友達100人出来るかな(後書き)

次回予告!

魅魔の仲間が増え続ける!

これじゃとんでもないことになるぞ!?

というわけで次回

「ねんがんのぐんたいを てにいれたぞ!」

幽香「…駄目だ、なんとかしないと…」

ねんがんの ぐんたいを てにいれたぞ！（前書き）

前回までのあらすじー！

・ 魅魔様大暴走

どうしてこうなった…

ねんがんの ぐんたいを てにいれたぞ！

その頃。

「フランー、居るー？」

その声にすぐに反応したフラン。

「あ、奈落だー！」

フランは奈落にぎゅっと抱き着き、嬉しそうに笑った。

「フラン、レミリアの所に案内してくれないか？今日はレミリアに用があるんだ。」

「お姉様に？いいよー！」

フランの案内で、レミリアが居る寝室に着いた奈落。

奈落は戸を叩いた。

…返事がない。

「入っていいのか、これ…？」

フランに聞いてみた。

「いいよー、きつとお姉様はお昼寝してるだけだから！」

「フラン…先に見て来てくれないか？」

「うん…！」

フランは扉を開け、中に入って行った…

と思ったらフランが出て来た！

「…どうだった？」

「あのね…」

フランがもじもじする。

かいとが見たら多分忠誠心と称して血を吐くだろう、そんな可愛さだ。

心なしか頬が赤い気がする。

「…お姉様は咲夜とお楽しみだった。」

つまり百「そこまでよ!」

「OK。よし、レミリアの代わりにパチュリーに聞こうか。邪魔はしちゃいけないな。」

「そつだね!」

フランと奈落はこの事をなかつたことにして図書館に向かった。

「むきゅ？私に協力してくれって？」

「まあそういう事だ。フランはついてきてくれるよ。」

「パチユリーも協力してー！」

「フランがそう言うならいいけど…」

「やったー！」

「というわけで早速行くぞ。レミリアに見つかるとまずい。」

「あれ？レミィの許可取ってないの？」

奈落は顔を背けてこつ呟いた。

「…俺はきつと今のレミリアには話し掛けられない。」

「…お姉様と咲夜が…」

「あ、そーいう事ね。解ったわ。」

パチュリーは全てを理解した。

現在の魅魔軍メンバー

魅魔・霊夢・幽香・桜・奈落・ルーミア・ぬえ・お空・パルスィ・
さとり・こいし・勇儀・萃香・リグル・みすちー・フラン・パチュ
リー

そして！

「みんなー！早速幻想郷を占領しちゃっようー！」

仲間に向かって演説を始めた魅魔。

「おー！」

「私みたいなおバカについてこれるように、頑張って行ってね！」

「おー！」

「というわけで早速、人里一つ吹き飛ばそー！」

「おー！」

「第一部隊隊長のフランちゃん、説明してー！」

「はい！今回はレーヴァテイン一発で十分です、おしまい！」

「ありがとー！というわけで今回はフランちゃんに人里一つ吹き飛ばして貰いますー！一応敵が来た時の為に、第一部隊副隊長のパチユリーさんにも動いて貰っようー！」

「解ったわ。」

「そーいう事だからお空、人里に通達して！」

「うん！…うん？」

「行くわよお空！」

さどりに連れてかれたお空。

「最後に、皆で歌おう！軍歌を！」

幻想郷

見事に占領

みな平和

「ありがとうー！」

え、今の軍歌だったの！？

と何だかんだで軍隊史上最も戦う気がない魅魔軍。

しかし、やる事は立派な異変起こしだ！

おーい、原作主人公の魔理沙さん！解決してよー！

当の魔理沙は…

「やった、お賽銭Get」

博麗神社からお賽銭をパクってました…

こうなったらあきら達が最後の希望(?)だ！

何時になったらあきら達は異変に気付くのか!?

ほじぢぢー、早くあきらむてくわー！

ねんがんの ぐんたいを てにいれたぞ！（後書き）

次回予告！

ついに魅魔軍の進攻が始まる！

なんか平和的な展開だが…大丈夫なのか？

というわけで次回

「幻想交響曲、序章」

フラン「どかーん！」

幻想交響曲、序章（前書き）

前回までのあらすじー！

・なんかいろいろとカオスな事に

PV4000突破感謝！

幻想交響曲、序章

「人里から逃げろって…!?!」

「こりやまずい!早く逃げよう!」

通達通りに人里からは人が消えた。

「よし、フランちゃん、いっけー!」

「レーヴァテイン!」

どがーん!…!…!

人里は瓦礫の山になりました。

「わーい!これで幻想郷占領の夢に一步近づいたよー!」

「わーい！」

「よし！奈落、直して！」

「…了解。」

空間を操り、瓦礫を組み替える奈落。

「皆で人里を作り直そー！」

「おー！」

なんてやるものだから人里の人々は不満を言う理由がない。

荷物は奈落が空間を操り隔離しているし、家の建て直しは魅魔や桜の魔術で終わる。

後は人々を綺麗になった故郷に戻すだけである。

「やった」

こうして少しずつ幻想郷は染まっていく。

少しずつだが、変わっていく。

「はあっ！でえい！」

あきららは日課となったシャドー格闘技をしていた。

そこの...

「あきら、ちょっと良いかしら？」

空間を斬り裂いて現れた少女。

「…紫さん。ほっちは？」

「大丈夫。もう少し休めば自由に動けるわ。…それより、封獣ぬえの目的が解ったわ。」

「…何なんです？」

「幻想郷の支配。…でも、それは彼女の本意じゃないみたい。」

「どづいづことです？」

「文に調べて貰ったけれど…彼女は誰かに従ってるだけみたい。その誰かが解らないけれど…そしてもう一つ、最悪の事態に傾く事があつたわ。」

「…博麗霊夢が敵になった。」

「霊夢が…！？」

「ちょっと待って、原作オリジナル主人公が敵！？」

「事情は解らないけれど、ぬえと一緒に居たという情報があつた。敵と見ておくのが一番ね。」

「…それで、封獣ぬえは何処に？」

「…此処から少し離れた人里…数日前に通達と称して退去を命じられたみたい。」

「…行きます。俺は…ぬえを倒します。」

「…解ったわ。でも、無理はしないこと。生きるのも立派な戦いよ。」

「…はい！」

「それと、東風谷早苗は何処に？」

「早苗さーん！紫さんが呼んでますよー！」

あきらの声に気付いた早苗がやってきた。

「ふえ？どうしたんですか？」

「ぼっちょが呼んでるわ。私についてきて欲しいの。」

ぼっちょが呼んでるという事実を聞いて、早苗は笑顔が零れたよう
だ。

「はい！」

「さて…行くわよ。」

開かれた空間の狭間の先へ、3人は行く。

マヨヒガに着いた3人は、ぼっちょの元へ向かうことにした。

「ぼっちょ…！」

「あ、あきら。」

「大丈夫か!？」

「うん。…それより、かいとは？」

「あいつなら大丈夫だ。」

「良かった。」

ぼっちょは「ふう…」と息を吐いた、安心したのだろう。

「ぼっちょ君…」

「早苗さん…ごめん、僕が弱いばかりに…」

ぼっちょは俯いた、それは守るべきものを守れなかった、その責任を感じているのを示していた。

しかし、早苗はぼっちょをぎゅっと抱きしめてこう言った。

「大丈夫。ぼっちょ君は私の為に頑張ってくれたの、知ってるよ。だから…だからそんな悲しい顔しないで。」

「早苗…さん…」

「私も強くなるから、全部一人で背負わないで。お願い。」

「…うん。」

2人のやり取りを聞いている中で、あきらには怒りが込み上げて来た。

…友を傷付けて、さらに友の大切なものまで傷付けて。

「封獣ぬえ…俺はお前を許さねえ…!!」

あきらは拳をぎりぎり握り締め、紫の元へ。

「紫さん…人里へ連れて行って下さい。俺はぬえをぶっ飛ばさねえと気が済まないです。」

「…解ったわ。」

踵を返すあきらに気付いたぼつちよが、あきらを呼び止めた。

「あきら、何処に行くの？」

「…俺は封獣ぬえをぶっ飛ばす。ぼつちよ…ちよっと待っていてくれ。」

あきらの姿が見えなくなった。

ただならぬ気配を感じたぼつちよは早苗を呼んだ。

「早苗さん…あきらの所へ行って下さい。僕は大丈夫だから…」

「え？」

「あきらが…何かおかしい…僕の代わりに、行って。」

なんとなく行かなきゃいけない気がした早苗はこくりと頷き、あきらを追った。

幻想交響曲、序章（後書き）

次回予告！

あきらの怒りが、自らの秘めた力を開放する！

それは…

というわけで次回

「俺はただ、お前を殺すだけだ」

あきら「…」

奈落「無言はまずいと思うが…」

俺はただ、お前を殺すだけだ（前書き）

前回までのあらすじー！

・あきら、ぬえにブチ切れ

書き貯めがなくなった（涙）

俺はただ、お前を殺すだけだ

ぬえは人里を破壊していた。

「だーれも傷付かないって素敵だね！」

UFOを召喚し、人家を瓦礫に変えていく。

「あはははは！たーのしっ！」

どうせ壊しても後で元に戻る。

だからぬえはひたすらに壊す事にした。

「おい…待ちやがれ。」

あきらはついに敵を捉えた。

「ん？どーして此処に、人が居るのかなー？」

同じくぬえの瞳は、あきらを捉えていた。

「俺は…お前を許さねえ…！」

「許すも許さないもどーでもいいけどさ、私を倒してどっつするの？
誰も傷付いてないのに？」

ぶつり。

ついにあきらの秘めたる力の枷が外れた。

「…お前は俺の友達を傷付けた、それだけで殺す理由は出来てんだ
よ…！！！！」

あきらの眼が紅く染まる！

「…？」

その異常さに真っ先に気付いた奈落。

「奈落、どうしたの？」

「ぬえが危ない！俺が何とかする！さとりは増援の要請を！」

「あ、待って！」

奈落はさとりの声も聞かずに向かう。

「この感じ…まさか…！」

「…俺は…俺はただ、お前を殺すだけだ…！」

怒りがあきらの闇を力に変える。

あきらに降り注ぐ太陽の光が作る影。

影から滲み出す漆黒はあきらの四肢に纏われ、あきらの眼は更なる紅に。

ゆらりとあきらが動く度に、眼から僅かに紅い線が漏れる。

「…封獣ぬえ、言う事はあるか。」

「何にも。」

「…ならそこを動くな。せめて一撃で殺してやる。」

あきらは構えを取った。

それはあきらが幼い頃に教えられた構え。

全てを砕く、最古にして一子相伝の構え。

「…狂撃体術『煉獄』」

刹那、ぬえの鳩尾に的確に入るあきらの右膝！

「がつ…！」

「まだだ」

すかさず突き放し、左足でぬえの顔に蹴り！！

「っ…！」

「これで終わると思うな」

あきらの間は、さらに力を高める！

「奥義『修羅拳』」

右腕から放たれた漆黒の奔流はぬえを包み込み、そして相手を破壊すべくエネルギーを炸裂させる！！

「っ…あ…」

倒れそうになるぬえの首を掴み、あきはそのまま持ち上げる。

「…さて、命乞いの一つくらいしてみる。死にたくなければな。」

あきは瀕死状態のぬえに、さらに追い撃ちと言わんばかりの一撃を加えようとしていた。

「…終わりだ。」

拳を振るおうとした、その時。

「切札『無時空間・虚空』!!」

どこからかナイフが飛んで来た。

あきはぬえを投げ出し、腕でナイフを弾き、ナイフが飛んで来た方向を見た。

…タキシードの青年があきをただ見つめていた。

慈愛とも、侮蔑とも言えない、何とも言えない雰囲気で、彼はあきらを見つめていた。

「お前はかつての俺だ」

彼は静かに語りかけた。

「お前まで狂気に堕ちるな。狂気に堕ちるのは…俺だけで十分だ。」

「知るか。俺はただ、こいつを殺す。それだけだ。」

あきらは地に伏したぬえを一瞥した。

「…解らず屋め。解らず屋には解らず屋なりのやり方で理解させるしかないか…」

青年は構えた。

「…仕方ない。目には目を…」

青年は目を閉じた。

「狂気には狂気を。」

青年の瞳があきらと同じ色、紅に染まる。

それは互いが互いを否定する…存在を否定し合う戦い。

だが、違う事があるとすれば…

「狂気『魔剣ラグナロク』」

青年は狂気と向き合い、狂気をものにした。

その証がこの紅と黒の剣。

「…お前自身が心を許せ。それが力を御すると言つ事だ。」

奈落は剣の柄を握り、あきららに向かう。

「煩い!!」

あきららは剣を砕くべく四肢をフル稼働させる!!

「凶星刺されてきよどつてんじゃねえぞカスがあ!!」

迫る腕、足を受け流し、剣を振り下ろす!

「…狂気『カラミティレイズ』」

瞬間、あきららを捕らえる紅い鎖!!

「…さて、テメエの弱き心を裁いてやるよ。狂気『歪んだ神の処刑劇』」

奈落はラグナロクを…

あきららに向けた。

俺はただ、お前を殺すだけだ（後書き）

次回予告！

狂気VS狂気！！

それは互いを否定し合う戦い！

それは破壊を最優先する戦い！

というわけで次回
「発狂」

発狂（前書き）

前回までのあらすじー！

・あきら、発狂

素晴らしくおかしな展開に…

発狂

「処刑の時間だ…」

奈落はそのまま、あきららに向かって走る！

突き刺された刃は、腹の中心に！

「うっ…！」

あきららは痛みを苦しむ顔をする。

「お前は俺と違うんだよ。…まだやり直せる。狂気に勝て。お前なら出来る。」

しかし、刺されたはずの部分から赤いものは一滴も出ない。

「これはお前の精神に対する攻撃だ。一言で言ってしまうえば、お前の怒りを折る為の攻撃だ。」

奈落はあきらから離れ、この策を成功させるためのキーセンテンスを唱える。

「色欲…暴食…嫉妬…憤怒…怠惰…傲慢…強欲…迷える羊を正しき道へ導け。」

…処刑『憤怒の為の鎮魂歌』」

あああああ…

あきららの頭にダイレクトに伝わる歌声。

「あ…が…！」

「俺も聞いてて吐き気がするよ…なんせ狂気と真反対の力だからな。だが、お前から狂気を引き剥がすには持ってこいだ。」

最初こそあきは悶えていたが、やがて身動き一つも取らなくなつた。

「…やはり俺では力不足…力を封じるだけで精一杯か…」

奈落は座り込み、あきらが目覚めるのを待つ事にした。

「開海『モーゼの奇跡』!!」

突如、奈落を飲み込む弾幕。

「…やったの？」

あきらを追い掛けて来た早苗は奈落に攻撃し、あきらを縛る鎖を壊そうとした。

「…危ないじゃないか。」

「!？」

後ろから声がし、早苗は振り返る。

そこには傷一つない奈落が。

「いきなり仕掛けてくるなよ…後少し遅れていたら大怪我間違いなかつたぞ？」

「…あなたこそ、あきら君を縛り上げて何をするつもりなんですか！？」

「…彼の為だ、彼が起きれば枷は解く。信用出来ないなら見てくれればいい。」

「…余計な真似をしたら、私はあなたを倒します。」

「構わんさ。もう何もしない、彼が起きるまでな。」

「…信じましょう。」

早苗はあきららの様子を見つつ、青年…奈落の行動を監視することにした。

暫く時が経ち…

「う…」

「今はもう大丈夫みたいだな。」

奈落はあきららに突き刺していたラグナロクを引き抜き、言った。

「あきらら君！」

「あ…早苗…さん…？どうして…」

「そりゃあれだ、テメエが心配だったからに決まってるんだろ。」

あきららは声の主に気付き…

「あんたは…！」

「始めまして、と言えはいいか？俺は双月奈落と言つ者だ。」

鎖を壊しながら、奈落は淡々と言う。

「さて…封獣ぬえの件だが、事実を確認し次第きつくお灸を据えておくからそれで勘弁してくれ。それと…」

奈落は早苗に小さな瓶を放った。

早苗はあたふたしながらそれを掴む。

「それにはぬえの妖力を無効化する薬が入ってる。友達に飲ませてやってくれ。…ついでにもう一つ教えておこつ。お前達が何もせずにはぼーっとしてると、幻想郷は支配されちまうぜ？」

「それはどついう事だ…！」

あきらが食ってかかる。

「ヒント。八雲紫、博麗霊夢、そして俺と…その少年君だ。ま、本人達に聞くのが一番いいんじゃないのか？もつとも…君達が聞けるのはきっと八雲紫にだけだろうがな。」

奈落は不敵な笑いをちらつかせながらあきら達に背を向ける。

「…全てが聞きたけりゃ俺を倒しにきな。だが…俺は一人じゃないぞ？」

奈落はゆっくりと歩き…姿が見えなくなった。

発狂（後書き）

次回予告！

奈落の言葉の真意とは！？

そして、ついに紫が反撃の狼煙を上げる！

というわけで次回

「全面戦争…？」

かいと「俺シカトされてね？」

全面戦争…？（前書き）

前回までのあらすじー！

・あきら、奈落に敗北

・奈落は何か知ってるみたい

初パソコン投稿！

全面戦争…？

奈落は増援を引き連れたさとりにこう言った。

「さとり、俺達の存在を例の異界人にばらした。」

「何やってんのよ！私たちは悪者なんかじゃないのよ！？それは裏切りと捉えられてもおかしくないわよ！？」

さとりは憤慨する。…それもそのはず、魅魔軍の存在はまだ秘密でないといけないからだ。

「そうじゃなくても、既に八雲紫は動き始めているはずだ。…少なくとも、もうばらされていてもおかしくはない。あの烏天狗が嗅ぎ回っていたからな。」

「だとしてもよ！何でわざわざ敵を増やすような真似をしたのよ！」

「叩くならまとめて叩いてしまえばいい。霊夢が居る今、八雲やえーきさんは敵じゃない。ぶっちゃければ皆『夢想天生』むそうてんせいでやられてくれる、勝手にな。幽香も居るから大丈夫だろう…寧ろ俺達が注意すべきは異界人もだ。あいつらは能力も何も解らない…全力を以て立ち向かわなければ、俺達は負ける。幾ら霊夢、桜、幽香3人の『支配者』、さらに魅魔が居たとしても、だ。」

奈落の洞察力の前に、さとりは黙り込んだ。

「さとり…一度だけでいい、俺の心を読んでくれ。」

「えっ？」

「俺はこう考えている…」

さとりはそっと目を閉じた。

さとりの胸で揺れる「第三の眼」が渦を巻き起こす。

「…」

さとりは何か恐ろしい事実を伝えられたかのように驚き、冷や汗をかく。

「そういう事だ。」

「これが本当なら、まずい事になるわ！まさかあれが幻想郷に…！？」

「まだ仮説だが、当たるにしろ外れるにしろ、今から起こるこの戦争には間違いなく裏がある。俺はそれを解明する為に魅魔に従っている。」

「でも、あれはあなたが来る前に消滅したはず！それが蘇るなんて有り得ないわ！」

「…そうだと信じたい。だが、魅魔の件や、異界人の件…何かおかしいぞ…？」

紫は先遣隊として任命した藍、妖夢、そして文にこう伝えた。

「いい？貴女達の目的は、相手側の攪乱かくらん及び牽制よ。相手側に警戒させて、事を急がせるのが最大の目的…それさえ遂行してくれればいいから。封獣ぬえからは逃げなさい。戦ったって勝ち目は薄いわ。そして文…貴女には相手側の戦力を調べて貰いたいの。数…そして名高い者が居るかどうか…新聞記者の底力、見せてあげて！」

「…了解！！！！」

3人は一斉に駆け出した。

「…これに引つかかってくれればいいのだけど…」

紫は一抹の不安を抱きながら一人、呟いた。

「みーちゃん、奈落から連絡。『そろそろ八雲紫が先遣隊を送ってくると思われます。目的は牽制及びこちらの戦力調査だと考えられます。』だって。どうする?」

「さつきゅん、ぬえと霊夢を呼んで。この二人、さらに周辺区域にフランちゃん、奈落、こいしちゃんを配置。状況報告員としてパチユリー、さとりんを。」

「解った。…指揮官らしさが出るよ、みーちゃん。」

桜は親友にそう笑いかけた。

「ふふ、そう?さつきゅんがそう言うってくれるのは嬉しいわ。」

笑顔で返す魅魔。

「でも、優秀な皆のおかげだわ、私がこう出来るのは。」

「そんな優秀な人々を集められたのはみーちゃんの力よ。」

「…ありがとう、さつきゅん！」

「私も出るわ。…過去の『最強の支配者』の力、ここで相手に見せつけておくわ。」

「気をつけてね？」

「うん。行ってくるね。」

桜は魅魔の下を後にし、迎撃に回った…。

紫の作戦は、奈落に完全に読まれていた。

…それもそのはず、かいと異変の時に紫に作戦を提供したのは、奈落だったのだ。

戦争などの作戦という点だけ見れば、奈落は紫に勝っている。

それは、この会戦でも十分解る事だった。

奈落の策はこうだ。

人里の一部を占領し、狼煙を上げさせる。

当然先遣隊は用心しながらでも、こちらに向かう。

そこに、まずぬえをぶつける。

そして程よく疲弊させたところで、霊夢をぶつける。

とどめに、自らが。

「さあ…俺の掌で踊れ、八雲紫。そして自らの愚策を呪うがいい。」

「奈落、私も出るわ。」

奈落は少々驚いた様子だが、すぐに取り直した。

「桜が？それは危険だ。相手は紫だぞ？」

「紫だからこそ、よ。私が敵である事を示せば、私を探すこともなくなつて動きやすいじゃない。」

桜のその提案に、奈落は少々考える。

「一理あるが…、だが桜は俺の切札だ、ジョーカー早々に切るのはまずい。相手の手札すらまだ見えていないからな。」

「あら、私を切札扱いしてくれるのね。でも、私達の切札は何枚もあるわよ？一枚くらい切つても変わりはないわ。」

「本当は久しぶりに暴れただけなんだろう？」

「まあね。」

「…いいよ、好きにしてくれ。」

奈落の妥協に、桜は「やった」と喜び、機嫌良さそうに走っていく。

「…さて、絶望を叩きつけすぎるみたいだが、大丈夫か…？」

奈落は「くくっ」とにやけ、顛末を見守る側に立った。

全面戦争…？（後書き）

次回予告！

紫先遣隊の3人が、あんなことやこんなことに！？

奈落の非道な策が明らかにな！

というわけで次回

「飛んで火に入る者たち？」

文「あんなことやこんなことって…」

妖夢「18禁になったりしないよね？ただでさえ今は東京が五月蠅なめいじいのにな」

作者「ノクターン版書くんならそうしましたが、この小説は行っても微エロですよ。だって15禁だもの。」

藍「それは良かった、橙にも見せてあげられなくなっちゃった。」

作者「え、橙も読んでるの？」

飛んで火に入る者たち？（前書き）

前回までのあらすじー！

・ 全面戦争、開幕戦

・ 主人公無し状態

飛んで火に入る者たち？

「…来たな！」

奈落は見渡しが良い高台から、遠くの異変を見ながら命令を飛ばす！

「ぬえ！そのまま真つ直ぐ進め！直に奴らに鉢合わせろ！」

「解った！」

ノイズに混じったぬえの声。

奈落は空間を操り、ある領域を作り出した。

それは登録した味方の妖力を感知し、場所を特定すると共に遠距離間での情報のやり取りを可能にする魔術。

…桜の力がなければこんな短時間では出来ないのだが、奈落は桜が参加するならこの方が味方にも、そして自分自身も戦いやすいと踏んだ。

「さて、俺も動くか。…この狂気のか…」

奈落は右手に紅い電気を流した。

「桜の魔術で完成した力…試してみるか。」

ぬえは奈落の指示通りに動いていた。

「誰が私に突っ込んでくるかなー」

お気楽ご気楽に歩いていると、人影が見えた。

「お、敵かな？妖雲『平安のダーククラウド』ー！」

ドガガガガ！

人影がいた方向に着弾する弾！

「…当たってない！」

『ぬえ、後ろだ！！』

「はいよっ！」

ぬえは前転してその場を離れる！

刹那、ぬえがいた場所に拳が！

「…烏天狗か！」

『射命丸文か！』

「…奈落、ビンゴ。先遣隊みたいよ？」

『ぬえ、無理はするな、あくまで時間稼ぎだ！』

「解ってるよ！奈落、応援を頼むわ！」

『さとりを向かわせる！』

通信が切れた。

「…仲間との最後の会話は終わったかしら？」

ぬえは文の挑発に挑発で返す。

「あら、貴女は貴女で墓の準備はできたのかな？」

「墓なんて造るわけじゃない…だって！」

文はぬえに走る！！

「貴女は私が倒すんだからっ!!」

その頃。

妖夢と藍は別方向から調査に取り掛かっていた。

「文は真正面から…私達は側面から突く。そうすれば、意表は突ける。」

この作戦は紫の案ではなく、藍の案。

よって、予測するのは難しいはずだったが…

「!?!」

2人の目の前に現れた、博麗の巫女と狂気を操る青年。

「予想通りね。紫の事だから、きっと現地に藍を送り、藍の作戦で意表を突くつもりだったんだろうけど…」

「…流石だね、霊夢。」

藍の頬には汗が一筋。

「…奇遇だな、霊夢。俺も同じ事を考えていた。来るなら後ろ…だが後ろにはさとりとパチュリーを置いておいた。なら横しかなかるう」と。

青年はくすりと笑う。

「ちょうど2対2…フェアな戦いじゃないか、なあ霊夢？」

「…そうね。早く終わらせて帰りましょ。」

もはやこの2人にとっては藍や妖夢は敵ですらない、そんな余裕すら感じられる会話。

「じゃ俺は可愛らしい狐さんの方をやる。」

「…解った。じゃ私は妖夢を。」

同時に小さく飛ぶ霊夢と奈落！

「切札『無時空間・虚空』」

妖夢と藍に降り注ぐ無数のナイフ！

「くっ…！」

妖夢は刀でそれを弾き、藍は弾幕でナイフを弾く！

「甘いわね。霊符『夢想封印』」

ナイフに気を取られていた妖夢、藍の2人は背後を取った霊夢に気が付かず、攻撃をもろに喰らってしまうう！！

「まだだ。狂気纏くるいまとい」

奈落の眼が紅くなる！

「狂気の恐怖を知れ。狂気『魔剣ラグナロク』」

剣を一振りした瞬間、紅と黒の衝撃波が藍と妖夢を吹き飛ばす！！

「ぎゃあああつ！！」

「さて、終いにしよう。愚札『亜空間・零次元』」

藍を包む空間の歪み。

「お前は用無しだ、帰れ。」

藍は闇に喰われ、姿が見えなくなった。

「…妖夢はどうするの?」

瀕死状態で動けない妖夢を前に、奈落はある策を思い付いた。

「少々気が引けるが、彼女は俺達で保護しよう。人質って奴だ。いざとなれば彼女は、紫に対する切札になる。…霊夢、もてなしてくれるか?」

「ええ。…ぬえはどうするの?」

奈落はふっと笑った。

「ぬえか…相手は不幸だな。さとりも相手にしなきゃならんとは。トラウマ抉られて終いだな。」

飛んで火に入る者たち？（後書き）

次回予告！

捕えられた妖夢！

戦闘区域から離脱した藍！

文の運命は！？

そしてついにあの人の力が明らかに！

というわけで次回

「最強と言われし理由」

霊夢「あんたやりすぎよ！」

奈落「仕方ないじゃないか…！」

最強と言われし理由(前書き)

前回までのあらすじー！

・藍、戦闘不能

・文VSぬえ！

ついにあいつが登場！

最強と言われし理由

「うりゃあっ！」

「やるねっ！」

文とぬえは両者譲らない戦いを繰り広げていた。

四肢を用いた肉弾戦は、端から見れば最も知性がない、野蛮な事のように思えるが、実は頭を使う戦いだ。

如何様にして急所を狙うか。

同じ身体の一部を集中的に攻撃し、使いものにならなくなってから畳み掛けるか。

隙を探しだし、的確に突くか。

これらの事柄を考えて行動に移らなければならない、それも思考時間ほぼ0の中で。

だが、仮にそれが一瞬で解るとしたら？

「そこね。」

文の脇腹に狙ったかのように着弾するひとつの閃光。

「うっ！？増援！？」

「その通り。」

ぬっと現れた小学生のような格好をした少女。

「古明地さととり……！！」

「ちゃんと覚えてくれているのね、嬉しいわ。でも、貴女には此処で死んで貰うわ。」

さとの胸で漂う「第三の眼」が渦を巻く！

「想起『賢者の石』」

大量の弾が一斉に文に！

「舐めるな！『無双風神』！！」

文は速さを活かしてさとの懐に入るが…！

「駄目だよ？敵に背を向けちゃ。『平安京の悪夢』」

ぬえの容赦ない攻撃が、文に入る。

「弱いわね。想起『うるおぼえの金閣寺』」

追撃としては威力が大きすぎる、さとのスペルカード。

文は力無く大地を転がる。

「ねえ、この天狗はどうするの？」

「簡単よ。」

さとりは文を掴み上げる。

「心的外傷トラウマ弄ユって再起不能にさせればいいのよ。」

「うっ…うっ…」

文は抵抗するが…力無い故に、簡単に阻まれてしまった。

「さて…貴女の傷、見せて貰うわよ。」

さとりの第三の眼が輝いた瞬間。

「待てえ!!」

「!?!誰!誰なの!?!」

さとりとぬえが周りを見回すが、何も変わりはない。

「光ある所に闇は必ずある。それは紛れも無い事実だ。それは漫画界やアニメ界にも言える事だ。」

「だが俺は全てを拒絶する!あのジジイが立てやがった非實在青少年条例の全てをなあ!!」

「なっ、訳の解らない事を!あなたは誰なの!?!」

「貴様らに名乗る名など、きつとないつ!?!」

どん!!

「見た事ないわね…！」

文がぼやけながら見た者は…

かつての敵であった彼の友達。

「…お前が古明地さとりか。」

「…そうだけど？」

「ふっふっふ…はあーはっはっはあ…!!!幼女神様は俺を見捨ててなかったあ…！」

「行くぜ!!! ロリンザム!!!」

かいとの身体が蒼く輝く!!

説明しよう!

かいはあきらまぼっちょが出演していた間、幻想郷を彷徨い、チルノに再会した!

そしてかいは見つけた、チルノの氷を操る能力を参考にし、ロリのロリによるロリの為の力! ロリンザムを会得したのだ!

嫁の萃香の愛らしさ、チルノの可愛らしさ、そしてまだ見ぬロリをすっばてんこー(素っ裸)にするための力、それがロリンザム!

某都知事の逆鱗に触れそうな力だが、今のかいはその逆鱗すら剥ぎ取って防具(ストーンはら一式)にしてしまう程の力を発揮する!

まあ、ぶっちやけトオンザムだ!

最強と言われし理由（後書き）

次回予告！

いろいろと吹っ切れたかいとこの暴走はまだまだ続く！

ぬえ…死ぬなよ…！

というわけで次回

「かいとこの暴走、あーうー」

諏訪子「あーうーと聞いてやって来た」

作者「だが出番はない」

諏訪子「えーん、作者が虐めるー！」

神奈子「オンバシラ召喚！」

作者「おやああああ！……！……！」

かいたの暴走、あーうー (前書き)

前回までのあらすじー！

・さとりが星に

忙しい合間を縫って投稿してるので更新頻度がたまに落ちます…申
し訳ありません…

「お持ち帰り決定!!」

「な、なんか怖い!!!!!!」

伝説の妖怪がまさかの恐怖を感じるとは、かいと恐るべし!

「俺のハーレムメンバーになりやがれ! 拒絶『ロリンザムソード』
!!」

かいとの右手に握られる長刀!!

「うおおおおおお!!!!!!!!」

かいとはぬえを一閃!!

だが、ぬえから血が滴る事はなく!

「…文! 写真撮るなら今の内だ!」

「へ？」

瞬間、ぬえの服が布切れに！

「ぎゃああああ！？」

素っ裸状態のぬえは慌てて縮こまる！

「これはスクープ！」

文は瀕死にも関わらずシャッターを切りまくる！

「やめて、撮らないでえ！」

顔を真っ赤にしたぬえ…やっぱり女の子なのね。

「こりゃグラビアページにいいぜえーマジいいぜえー！」

こうして、さとりは星になり、ぬえはかいとにお持ち帰りされました。

「…あれ？ぬえとさとりは？」

桜は「？」と思いながらも奈落を呼んで帰った…。

「さつきゅん、それホント!?!？」

魅魔が立ち上がり、桜に語気を強めて聞く。

「ええ。奈落も調べたけど、さとりとぬえの行方が解らないって。」

「…何で…？八雲は私の仲間を奪うの！？」

魅魔は紫のやり方に憤慨したようだ。

桜はそれを見透かしていたかのようにこう返す。

「さとりとぬえに関しては彼女に一任したわ…直に帰って来るから安心して。それと…奈落が紫側の人間を一人捕えたわ。」

「…その人を連れて来て。」

「解った。奈落！」

「はいなー。この娘だ。」

魅魔の前に座らされた妖夢。

「…あれ？その娘…確か幽々子の…」

桜は妖夢を見て思い出した。

「…だったら何なんですか。」

「久しぶりね。覚えていないかな？」

「覚えているわけじゃないですか。初対面なのに。」

妖夢はつつけんどんに返す。

「私？…縁月桜といえば思い出すかな？」

「…！」

妖夢は思い出した。

幽々子がたまに話す昔の事。

その話の中に、縁月桜の名があった。

最強と呼ばれた魔法使い。圧倒的な力を持つ支配者。幽々子はそう話していた。

「な…！」

「幽々子は元気にしてるかしら？最近会ってないから。」

「あ…はい…」

「なら良いわ。さて…問題なのは八雲紫よ。あの子は何をしたいのかしら？」

「解りません。ただ…あなたたちを倒そうとしている…それだけは言えます。」

「桜…この妖夢って娘、面白いぞ。『修羅の血』が流れている。」

奈落は関心したように言う。

「修羅の血…？」

「ああ、俺がこの間戦った異界人の狂気の源だ…こいつは面白い。…気が変わった、彼女を狂気に墮としてみよう。」

行動に出ようとした、その時。

「駄目よ。彼女が幽々子にとって重要な存在ならば、無闇に手出し出来ないわ。…切札を捨てる真似をするの？」

桜は冷静に奈落を諭す。

「…確かに。その方が良い外交カードになるな。解った、もてなしでやるか。」

「待つて。話は終わってないわ。」

魅魔が一石を投じる。

「妖夢：貴女に一つだけ質問があるわ。八雲紫に加担している人達の名前を覚えてる限り全て教えて。それさえ教えてくれれば貴女は此処を出ない限り自由よ。」

妖夢は考えた。

これで全てを教えれば、この者達は間違いなく殲滅しに襲い掛かって来る。

そうすれば、幽々子が命の危険に晒される…

「嘘はすぐにはれるからな。俺は君の心が読めるからな。」

つまり、嘘はつけない。

「…それを教えて、貴方達はどつするの?」

「…俺達は準備が終わらない限り君達を襲つつもりはない。だが、君達が俺達を滅ぼそうとするのなら…」

奈落は妖夢を睨み、こつ続けた。

「俺達は君達を殺さなきゃいけないが?」

「…解りました。現在の八雲紫側の者は…
八雲紫・藍・橙・西行寺幽々子・四季映姫・小野塚小町・射命丸文・
異界人一人…そして私。
それ以外は知りません。」

妖夢は正直に全て話した。

「…ふむ。嘘はついていないようだ。よし、暫く君は此処にいるん

だ。外には出ないでくれよ。」

「…解りました。」

「…みつちゃん、どうするの？八雲紫を殺すの？」

「…さつきゅん、さとりとぬえは助かるのね？」

「ええ。優秀な彼女が、必ず遂行してくれるわ。」

「解った。今は幻想郷の制圧が第一だと考えるの。八雲は放置。さとりとぬえを助け出して、それから幻想郷の制圧を進めよう。最後に八雲を倒せばいいわ。」

かいと**の暴走、あーうー**（後書き）

次回予告！

さとりとぬえを助ける為に派遣された者は誰なのか！？

というわけで次回

「幻想郷では常識に囚われてはいけないんですね、そうなのかー」

ルミア「そーなのかー」

早苗「私の名言が…！？」

幻想郷では常識に囚われてはいけないんですね、そーなのかー（前書き）

前回までのあらすじー！

・ぬえが素っ裸にさせられた、お持ち帰りされた

何だこのあらすじ（笑）

蹴り上げから怒涛のラッシュ、フィニッシュは正拳突き！！

「15連コンボ！！」

かいとをふるもっこにしたあきは改めて本題に戻る。

「で、相手側の面子を教えるはくれないか？」

「無理」

「なんで？」

「敵だもん、敵には何にも教えないよーだ！」

「俺達はいくまで異変を止めたいだけなんだ、協力してくれ。」

「嫌だね！あんた達はいずれボロボロにされるよ！私達はただ遊びたいだけだもん！」

え？

「遊びたい？」

「そーだよ！私達はただ遊びたいだけなんだ！なのにみーんな忙しいのをいいことにして遊んでくれないんだ！だから私達は此処を支配して皆で遊ぶんだ！」

…ありゃ？

ということとは、今回…

「俺達が悪者って事か。」

顔が腫れたかいとがそうまとめる。

「どうやら俺達は酷い勘違いをしていたみたいだな。というか完全に俺達が悪だ、世界の歪みだよ。変革させられるよ。」

「かいと、頭おかしくなったか？」

「いや違うね。俺がおかしいんじゃない、間違ってるのは世界だ！」

「はいはい中二中二」

頭が一時的におかしくなったと思われる中二病患者をよそに、話は進む。

「どうしても教えてくれないのか？」

「だから無理だつて！」

「…そうか…困ったな…」

「この手の奴から情報は引き出せねえぜ、あきら。脅してもかけりゃ別だが、相手側の事が全く解らないからな…どうかけりゃいいのか…。」

「だな。仕方がないか。てか元に戻ってる！」

その頃。

早苗は買い出しに外に出ていた所であった。

何時ものように必要な物を買ひ、帰り道である森の獣道けものみちを通っていると…

ガサッ。

音がして、早苗は軽く飛び上がる。

「だ、誰か居るんですか…?」

しかし、返事はない。

早苗は物音がした方向に恐る恐る近づく。

「あ、あれ？人じゃないですか！」

早苗が見つけたのは淡い紫の髪の少女。

「気を失ってるみたいですね…連れて帰らなくちゃ！」

早苗はこの時気付いていなかった。

この少女が敵であるという事に…

洩矢神社に戻って来た早苗は、少女を布団に寝かせて面倒を見る事にした。

少女の服が汚れていたので、早苗は服を洗い、暫く様子を見る。

「?これは...?」

少女の胸の辺り...まだ成熟しきってない膨らみの上に、赤い何かがある。

しかし、その何かは少女と繋がっていた。

早苗は外しちゃいけない気がして、違和感を感じながらもつけたままにしておいた。

∴ 洩矢神社の近くに、小さな黒い球体が。

「さとりとぬえは此処にいるのかー。∴ よし、久しぶりに皆を出すのだー。」

黒い球体の周りに現れる黒い何か。

「いけー！」

号令と共に、黒い影は一斉に飛び出す。

「私も本気を出すのだー！」

球体からぬつと身体を出した金髪の少女…ルーミア。

何故彼女が桜の味方なのか。

そして何故彼女は桜の存在を知っていたのか。

その理由となる…

頭につけた髪飾りを外した。

鮮やかな紫色の妖力の気をガツと出し、ルーミアは呟く。

「さあて…仲間を返して貰おうかしら。」

幻想郷では常識に囚われてはいけないんですね、そーなのかー（後書き）

次回予告！

ルーミアの真の力！

そーなんだー！
そーなのかー！

というわけで次回
「えくすとらルーミア」

ぬえ「誰か助けてー！」

ルーミア「今行くよ！」

えくすとらルーミア（前書き）

前回までのあらすじー！

・早苗、さとりを拾う

・ルーミア、ぬえ奪還作戦に

まさかの新キャラ登場！

えくすとらルーミア

黒い獣達が、神社に侵入する。

目的はただ一つ、ぬえとさとの救出。

ただし、分厚い壁を突破しなければならない。

異界人2人、早苗、神奈子、諏訪子の計5つの壁である。

ただ、壁は並ぶ又は囲むからこそ強いのであって、一つでも砕けばあつという間に脆くなる。

例えば糸一本しか入らない穴が開いても、穴が開いたという事実は変わらず、そこから水や風が流れ込んでくるのである。

故に、獣達は…

「グルルルル…!!」

「な、何なんですか!？」

一人…そう、最も目標に近い位置に居る敵を狙った。

早苗を。

「行け」

一斉に飛び掛かる獣達。

「神徳『五穀豊穡ライスシャワー』!!」

獣達は早苗の弾をもろに喰らい、情けない声を上げて倒れる。

「くっ!何匹居るんですか、これは!」

早苗はすぐに獣達に囲まれる。

後ろには眠る少女。

「どつすれば…!」

だが、次の瞬間、獣達は早苗を襲わずに去る。

「どつすこと…!？」

後ろに居たはずの少女の姿がない事に気付かず…

早苗は戸惑っばかりだった。

一方。

「貴女達に邪魔されては困りますので…」

何かに縛られたかのように動けない神奈子と諏訪子。

「何なの…これ…！」

「離せー！」

それを冷酷に見つめる青年が一人。

マントを着た、黒服の青年。

眼も髪も全て黒。

ただ、肌は恐ろしい程白く、肌だとは到底思えない。

「…全く、ルーミアの姉貴が呼ぶから何かと思えば…『影縫』かげぬいで動
けないような奴を止めておけたなんて…人使い荒いぜ、姉貴…」

よく見ると、青年の影がおかしな形をしている。

というのも、今は真昼、影は目を背中に行っている故に直立しているはずなのに、直立していない。

まるで影が自立しているようだ。

「何で動けないの!?!」

「能力も使えないよー!」

「はあ…後は任せた、絶鬼^{ぜつき}。」

青年から伸びた影が、青年から離れる。

「解った…真樹^{まき}。」

「俺はルーミアの姉貴の所へ行く。全て終わったら離してやれ。」

「解った…」

青年はふらりと消える。

同時刻。

「…わんちゃん達がさとりを救出…そして真樹が神を止めた…後は私だけか。」

ルーミアはぬえ救出の為にぬえを探す。

そこに…

「ありゃ？なんでルーミアがここに？」

かいとが、たまたまだがルーミアと鉢合わせた。

「あのね、友達が来てないかなって思ってた…」

ルーミアは演技でやり過ぎすことにした。

「はぐれたのか？」

過去に刺された経験があるにも関わらず、優しく接するかいと。

流石、変態ロリコンと言つ名の紳士である。

「そうなの。名前はぬえって言うんだけど…」

「!？」

困った、ぬえは此処に居るが、居場所を話す訳にはいかない!!

「ぬえ？」

なかなか危ない演技で知らないふりをするかいと。

この最中に、かいと脳内ではこんな事が…

くかいと脳内く

かいとA（本体）「どうする！？どうすりゃいいんだよ！？」

かいとB「此処は素直に話すべきだな。仮にも幼女が困ってんだぜ？」

かいとC「いや、隠すべきだ。でないとルーミアが色んな奴に吹聴するかも知れない。」

かいとB「そんな因幡的な事をルーミアがするか？いやしないね！」

かいとC「確かに。ルーミアがああの因幡的な事をした記憶も描写もないからな…彼女は正直な妖怪なのかも知れない。」

かいとB「まあそんな事より確実に言えるのは…」

かいと全員「幼女最高！！」

かいとC「よし、正直に居場所を教えてやれ！邪魔者は粉碎の方向で！」

かいとA「おk、理解した！ご褒美はルーミアとデザートで！」

かいとB「おい、ちよつと待て。ご褒美で思い出したんだけどさ、橙と射命丸の素っ裸まだ拝んでない。」

かいとC「あ」

かいとA「射命丸の素っ裸はどーでもいいけどさ、橙のを拝んでないのは痛いな。」

かいとB「でもルーミアとぬえの素っ裸の方がぶつちやけよくな？」

かいとA「そうだな。よし、ルーミアのお願い叶えちゃうぜ！」

〔脳内会議終了〕

「もし知ってるんなら…おしえて？」

ルーミアの上目遣いで、かいとの理性死亡。

「解った。ぬえはだな、こっちだ！」

ルーミアの右手を取り、ぬえが捕えられている所に走るかいと。

ぬえが幽閉されている場所の扉には、紫が特殊な細工をして一部の者しか入れないようになっていたが…

かいととは普通に入れた。が、ルーミアは壁にぶつかったかのように扉にはじかれた。

「ぬえ？どうしたの？」

「後ろ向いて！拒絶『D・T・レーザービット』！！」

ぬえの枷を破壊、そしてぬえを抱いて外へ。

ちょうどお姫様だっこなのは秘密。

「おっしゃ！後は外に「待ちな！」」

かいと達の目の前には鎌の少女…小町が！

「何処行くつもりなんだい？その娘を連れて。」

「何処でもいいだろ！」

「いやあ、それがいけないんだよね。悪い事は言わないからさ、その娘を渡しな。」

今のかいは、両腕でぬえを抱いているので（と言っても随分軽い）が、少々分が悪い。

「無理なのだ。」

ルーミアが返す。

それに反応した小町。

「お譲ちゃんはお呼びでないだよ、黙ってな。」

その言葉で、ルーミアはキレた。

「破槌『ミヨルニル』」

直後、小町の体が宙に舞う。

「しっふっ！？」

「隙さえできりゃこっちの勝ちだ！拒絶『エデンのどんぐり』！」

小町の視界を遮る為の小規模な爆発。

煙が晴れた頃には、かいと、ぬえ、ルーミアの姿がなかった。

「ちっ、逃げられたか！」

「勢いで逃げちゃったけど、いいのかー？」

ルーミアがかいと聞く。

「構わねえよ。俺は前々から八雲紫のやり方が気に食わなかった。あいつにはとばっちり食らった経験もあるからな、ここでリベンジだ。」

「でも、私は敵よ？」

ぬえのその一言に、かいとは笑ってこう返した。

「今までは、な。けどこれからは俺のハーレムメンバーだ。」

「ハーレムメンバー？」

「仲間だって事にしておいてくれ。俺はかいとだ。よろしくな、ぬ

え！」

「…うん、よろしく！」

「よろしくなのだー！」

ルーミア達は別働隊として居た真樹と合流し、魅魔の下に戻って行った。

こうして、幻想郷の母…八雲紫にとって新たな脅威が増えた。

他の力とは異なる力…「エデン^{エデンスシード}の林檎」を持ちし異界人、かいと。

彼の行動は、後に幻想郷の歴史に刻まれる事になるのだが…それは別の話。

えくすとらルーミア（後書き）

次回予告！

かいと、離反！

その時、あきらはどつする！？

そしてぼっちょにも急展開が！

というわけで次回

「久しぶりな主人公」

ぼっちょ「忘れ去られてたと思った」

作者「そんなことはない」

久しぶりな主人公（前書き）

前回までのあらすじー！

・かいと、離反

すげえ展開だな…

久しぶりな主人公

かいとの離反は、確実に紫側の人間にダメージを与えた。

「なんでだよ…なんで…！」

あきらは突然の裏切りにただ困惑するしかなく。

「…」

早苗から知らせを聞いたぼっちょは黙りこくってしまった。

「困ったわね…彼がいなくなるなんて。」

「そうね。彼は反乱分子として消されるべき存在になった訳ね。」

あくまでかいとの存在を道具としか見ていない四季映姫と紫はあくまで冷静だ。

それを聞いたぼっちょは…

「…くそっ…！かいとを殺させる訳にはいかない…！」

「でも、私達だけじゃ…！」

「方法があります」

ぼっちょは一枚の緋色の札を取りだした。

何かびっしりと文字が書かれている。

「レミリア・スカーレットを呼びます。」

「えっ…！？」

「早苗さん、これしか方法がないんです。これを焼けば、レミリアがすぐに来ます。」

この札は本来パチュリーのものだったが、パチュリーは「何かあったらこの札を焼けば、レミイが駆けつけてくれるわ。」と、ぼっちょに渡っていたのだ。

「紅魔館に行きましょう。そうして、時を待つんです。僕たちがかいとを守らなくて、誰が守るんですか？」

「でも、相手は八雲紫なんですよ！？それを相手にするなんて、正気の沙汰じゃないですよ！」

「確かに、僕たちだけなら無謀な策です。ですが…僕たちには神がついています。」

ぼっちょは微笑んだ。

「あっ！」

「神奈子さんと諏訪子さんの力を借ります。そうすれば…！」

「解りました！神奈子様と諏訪子様を呼んできます！」

「頼みます、早苗さん！」

早苗は急いで呼びに行く事にした。

「よし…！」

ぼっちょは札を霊力で焼いた。

「…！咲夜、私、ちょっと用事が出来たから外に出るわ。」

右腕に走る妙な感覚が呼ばれた合図。

「?どうしたんです、お嬢様?」

「ぼっちょが私を呼んでいるみたい。」

「では、小悪魔も連れて行って下さい。必ずお嬢様のお役に立ちますので。」

「解ったわ。」

レミリアは踵を返し、部屋を出て行った。

「レミリア…ぼっちょから連絡が来たってほんと?」

ぼっちょのおかげで自由に現れるようになった吸血鬼…セルティはレミリアに問いかける。

「ええ。今が大ピンチみたいよ。セルティにも動いて貰うわ。」

「あら、何時から貴女は私に命令出来るほど偉くなったのかしら？」

「別に構わないじゃない。今はぼつちよを助けなくてはいけないんでしょ？」

「そうね。…何年振りかしら、私とレミリアが組むのは？」

「250年振りね、フランのわがままに付き合っただけ以来だわ。」

「そう。自称ツエッペリンの未裔と本物の未裔の力…この際どちらが上か競いましょう？」

「面白い！私の力、見せてあげる！」

「今宵は月がこんなにも真っ暗だから…本気で殺^やるわよ。」

同時に地面を蹴るセルティとレミリア。

どうやら紫は結果的にとんでもないものを敵に回してしまったよう

だ。

月が太陽の影になる新月の日に、二人の鬼は夜空を舞う。

それはまるで、二匹の鷹が獲物を求めるように鋭かった。

その頃、かいとは…

「霊夢じゃねえか！」

「久しぶりね。今度は紫を下に落とすつもりなの？あの時、私は貴方のせいで暫く行方知らずになったのよ？」

魅魔のアジトに着いていた。

「そりやすまねえな。けど、今度は紫を潰すぜ？」

「…頼れる男ね。」

霊夢は少し笑ってみせた。

「あ！かいとだー！」

「おお、かいとじゃねえか！久しぶりだな！」

「勇儀に…萃香！？」

「かいとも幻想郷を支配したいの？」

「違うよ、ただ八雲紫が気に食わないだけなんだよ。」

「そーなの！？凄いなえー、流石あたしが見込んだ男ねえ！にやははははは！」

「ほんと面白い奴だ、おめえは！」

「そうか？」

なんてやっているかいと。

「おい。まさかテメエが此処に来るとは思いもしなかったぜ。」

「…奈落！」

「だが、今回は話が違つみたいだな。仲間、か。」

「そうだな。」

「昨日の敵は今日の友、か…面白い、これからはよろしくな。」

「…ああ！」

かいとは奈落と手を交わした。

久しぶりな主人公（後書き）

次回予告！

ぼっちょを救う為に動き出したセルティとレミリア！

幻想郷最強と言われた妖怪に、2人はどうやって立ち向かうのか！

というわけで次回

「ぼっちょ奪還作戦 1」

レミリア「私のカリスマがついに光るのね」

セルティ「あら、私にもカリスマはあるのよ?」

次回更新：火曜日予定

ぼっちょ奪還作戦 1 (前書き)

前回までのあらすじー！

・ぼっちょ、レミリアを呼んだ

・なんか紫がどんどん悪者に

昨日は更新できませんでした…申し訳ありません…

ぼっちょ奪還作戦 1

「見えた！」

セルティとレミリアはマヨヒガを見つけた。

「私が仕掛ける！セルティはぼっちょの保護を！」

「解った！」

セルティがマヨヒガに降下する。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』！！！！」

レミリアの指から魔力が溢れ、一本の黒い槍となる！！

「あらゆる壁を貫け……！！」

投擲したグングニルは空を斬り、風の刃を纏い、魔力の刃を纏い！！

マヨヒガを貫き、紅蓮の炎となる！！

「な、何なの！？」

慌てて出て来た四季映姫に気付かれないように、セルティは能力を
発動する！

「幻視『ゲシユタルトクラブス』」

「…てあれ？おかしな所はない…何だったのかしら？」

四季映姫は異変に気付かずにマヨヒガから離れて行ってしまった…

「セルティ！」

ぼっちょが早苗と共にマヨヒガから出て来る。

「ぼつちよ！」

久しぶりの再会に、セルティは喜ぶ。

だが喜びもつかの間…

「やってくれたわね。」

紫が鋭い眼光を光らせながら佇む。

「私の家を此処までボロボロにしたんだから…それなりの覚悟はあるのよね？」

紫の視線はぼつちよ、早苗、セルティを突き刺す。

「天罰『スターオブダビデ』！！！」

紫に不意打ちを仕掛けるレミリア！

「くっ…！」

「まだよ！土着神『ケロちゃん風雨に負けず』！！」

紫は追撃を受けて怯む！

「諏訪子様！」

諏訪子が笑顔で来た！

「早苗、行って！紫は私が何とかするから！」

「…解りました！」

「ぼっちょも！早苗を頼むよ！」

「…はい！」

早苗を連れ、走るぼっちょ。

「たかが弱小の神が、私に盾突くつもり？」

「弱小だつて？」

諏訪子は何時もの天真爛漫な顔から一転、真剣な顔に！

「たかがこんなちっぽけな世界の妖怪が何言ってるの？私は神よ？妖怪風情が私を越えるなんて出来るのかい？」

「…やってみなきゃ解らないわ。」

神と妖怪は、同時に動いた。

「…しかし、ぼっちょが再び来るとは思わなかったわ。」

レミリアが感心したような口調で言う。

「約束してたじゃないですか。怪我してたので中々行けなかったのですが…」

ああ、と納得してレミリアはますます気に入り…

「あら、覚えてくれていたのね。ご褒美に噛み付いてあげるわ、感謝なさい。」

「レミリア！？それはまずいよ！って、噛み付いちゃった…」

セルティの制止も間に合わずに、レミリアはぼっちょの首筋に牙を立てる。

がぶっ。

「……っ……っ……っ……」

一瞬苦しそうな顔をしたが、レミリアはぼっちよの血を吸う。

「!?!」

レミリアはガクッと踞る。

「な…何…これ…!?!? 貴方…本当に人間なの…!?!」

「あ、はい…」

人間じゃないなら何なんだろう…。

「この魔力だか霊力だか解らないものは…吸血鬼のそれと同じよ!」
「?」

「吸血鬼!?!」

ぼっちよ、驚愕。

「そつだ…私の能力で貴方の祖先を見てみましょう…」

レミリアの能力、『運命を操る程度の能力』で、ぼっちよの祖先の運命を見る。

「なっ!?!」

レミリアが今知った事実、冷や汗をかく。

「どつしたの、レミリア?」

「セルティ…貴女この間、ぼっちよの血を吸ったって言うてたわよね?」

「ええ…それからよ、私が出られるようになったのは。」

その事実は、レミリアにとってもセルティにとっても…そしてぼっちよにとっても意外な事実だった。

レミリアは口を開く。

「率直に言っわ。ぼっちょの祖先は…初代ツエッペリン、私達の祖先よ。」

ぼっちょ奪還作戦 1 (後書き)

次回予告！

え、ぼっちょって凄い人だったの？

ぼっちょの驚愕の事実が明らかに！

というわけで次回

「ぼっちょ奪還作戦 2」

早苗「ぼっちょ君が…吸血鬼…？」

レミリア「なんかすごくショック受けてるよ！？」

次回更新…本日の夕方〜夜予定

ぼっちょ奪還作戦 2 (前書き)

前回までのあらすじー！！

・ぼっちょがツエッペリンの未裔らしいと判明

いろいろとおかしくなってきたぞー！？

ぼっちょ奪還作戦 2

「へ!？」

「私が見たのは、紅魔館に代々飾られてる肖像画の通りの顔の祖先
…初代ツエツペリン。
祖先が同じなら似通うものだわ…でも、ぼっちょ、貴方はさらに異
例の存在よ。」

私は初代ツエツペリンの生涯を記した本を持っていたんだけど…初
代ツエツペリンは一度だけ、西洋の人間じゃなくて東方の人間と結
婚した事があるのよ。」

…それが貴方が生まれる事になった理由…
西洋ではなく東方で育った貴方の祖先は世代を経る毎に吸血鬼とし
ての力を弱めていく…普通の人と結婚したからだわ。
けれど…」

レミリアの説明が途絶える。

「レミリア、此処からは私が説明するわ。吸血鬼の血は濃度がある
一定より下回ると元の濃度に戻る性質があるの。
…つまりぼっちょ、あなたの時にその現象が起きたのよ。」

正統なツエツペリンの末裔である私があなたの霊力を貰った時に現れられるようになったのは、あなたの力がツエツペリンのそれと同じだったからよ。

さらにぼつちよ、貴方がツエツペリンの末裔だと言つのはあるものを見れば解るわ。…ハルバードを出して。」

セルティの指示通りにハルバードを出すぼつちよ。

セルティはハルバードを暫く観察し、その後ぼつちよの右腕を露出させた。

「ハルバードは初代ツエツペリンの武器：それだけならレプリカ品があるから何とも言えないけど、あなたの右腕に刻まれた紋様：これは初代ツエツペリンのものなのよ、そして正統なツエツペリン一族の家紋でもあるわ。」

タトウーだろつて言う馬鹿がいるけど…ぼつちよ、ハルバードをしまってみて。」

ぼつちよはハルバードを消す。

「紋様が消えたわ。消えるタトウーなんてもの、偽物なら作りが悪いからすぐに解るけど、これは解らない…だからあなたはツエツペリンの末裔よ。でも、確認の為にある儀式をしなきゃいけないわね

…」

セルティは小さな皿を用意し、その皿に自らの赤い水を垂らす。

「今、私は指先から確かに血を出した。ぼっちょ、あなたの血も此処に入れて。」

ぼっちょは指先を噛み、血を滴らせた。

すると、皿で混じり合った血の池から真紅の結晶が出来る。

「結晶をよく見て…」

ぼっちょは結晶を見つめた。

『ツェッペリンの名の下に、この者をツェッペリンの末裔と認める。』と刻まれていた。

「血は嘘をつかない…ぼっちょ、あなたは確かにツェッペリンの末裔なのよ。」

レミリアの為に言うておくけど、レミリアも正統なツェッペリンの

未裔だったわ。自称じゃないんだけど、吸血鬼にしては大人しい方だから自称だって言われるけどね。」

「ぼつちよ君が…吸血鬼…」

ぼつちよは早苗のただならぬ様子に慌てる。

人間じゃないんだから嫌われたのだろうか、そう思った…

「かつこいいい！」

「「「え?」「」」

3人はまさかの展開に思わず聞き返す。

「吸血鬼の、しかも凄い人の未裔なんですよね!かつこいいいじゃないですか、吸血鬼って!」

「ま…まあ…確かに顔はイケメンな方ね…」

レミリアが早苗の意外な反応に正直驚きながら返す。

「凄いです！私と同じじゃないですか！私も一応神なんですよ！」

「」「あ」「」

そうだった、早苗さんは現人神あらひとがみだったつけ。

「それはそれで未来が楽しみね…吸血鬼最強と呼ばれるツェペリンの末裔と神の子ども…間違いなくこの幻想郷を征服出来るわ。」

よし、早苗、頑張って子どもを沢山授かるのよ。そうすれば私が幻想郷を蹂躪じゅうりゅうする日も近いわ…！」

レミリアがなんか目を輝かせて言う…正直怖い。

「あ、正統なツェツペリンの血を後世に残す為に私にも子どもを授からせてよ！これはツェツペリンとしての義務よ！」

奈落に案内され、この組織のボス…魅魔の場所に案内される。

「ん？どーしたの、奈落？」

「新参者の紹介です。ちょうどぬえ救出作戦時に紫を裏切った奴みたいで。」

「へえー、始めまして！私がこの組織のボス、魅魔よ！よろしくねー！」

…こいつが…ボス？

「俺はかいと。異界人だ。」

「へえー、異界人なのね！でもね、序列っていうのを考えなくちゃいけないよ？そんなぶっきらぼうな話し方じゃうまくやっていけないよ？」

間接的に「敬語で話しゃがね」と言ってるようなものだ。

「…そうか。その台詞は…！」

かいととは魅魔に迫る！

「俺を倒せる實力を見せてから言え！！拒絶『D・T・レーザービ
ット』！！！」

魅魔に降り注ぐ光！！

「奈落ー、面白い子連れて来たねえー。」

「ははは…全くですよ。」

「力の差を見せてあげたほうが良いみたいね！黒符『トワイライト
スパーク』！！！」

瞬間、かいとの目の前が真っ白になった。

「う…あ…」

「うん、面白かった！あなたはこれから私の仲間ね！」

ボロボロのかいをつつつきながら魅魔はニコニコ笑う。

「まだまだ…まだ俺の勇気は折れちゃいない…！！！」

「ありゃ？まだ動けるの？」

かいはふらふらしながらも立ち上がる。

「ガイガイガー！！！」

かいはガイガイガーになる！！

「ほんとに面白い子ねえー！でも！…悪霊『イビルシューター』！」

魅魔の周りに現れる悪霊！！

「いけー！」

悪霊はかいとを貪るべく襲い掛かる！

「ガトリングバンカー！！！」

悪霊を消し去るかいと！

「へえー、すっごいねえー！」

「まだまだ！エデンスシード、フィールド展開！！！」

かいとから碧い光が広がる！

「デス！！アンド、ライブ！！！」

「うっ！きゃっ！!?」

魅魔は動けなくなる！

「うっおおおおおおお！……！！……！！……！！」

かいたはそのまま突っ込み、魅魔を貫くべく両腕を前に！！

「へえー、やるじゃん。でも私を倒すには弱いねえー。」

ガシッと、かいたの腕が魅魔に掴まれる！

「なっ……！!?」

「おしまい。黒符『マスタースパーク零距离ver』」

黒い光が、かいたを喰らった。

「俺は…負けるのか…」

『あなたの勇気は折れない』

「…けど…勝てる気がしねえ…」

『それはあなたの想いに力がついてきてないから。あなたのせいじゃない。』

「…」

『想いだけでも、力だけでも何も変わらない。…あなたはどうしたいの？』

「…俺は…最強の名を手に入れたい…！萃香やチルノ…全国のロリ幼女の笑顔を守りたい…！」

『そうですか。では、あなたに力を託しましょう…生かすも殺すもあなた次第です。』

かいとの身体に、暖かいものが溶けていく。

『勇者なら叫びなさい…最強の名を!』

「…ああ!」

「動かねえな…まさか死んだとか？」

「あんなので死ぬの？人間って脆いねえ!」

声が聞こえる。

「かいと…かいと…!」

なんか顔にかかった。…液体？

「死んじやだめだよ…かいとが死んじやったら、あたしは誰と仲良くすればいいの…！」

この声…萃香？

泣いて…いるのか？

「お願いだから目を覚まして！まだいっぱい話す事あるのに、これじゃ話せないよ！」

…俺の為に、泣いてくれているのか。

「起きて！起きてよお！」

…彼女の涙は見たくない。

「…そうだな。優しい君の為に、お願いを聞こうか。」

「かいと！生きてるのね！」

萃香の顔は涙でびしょ濡れだった。

「ああ…心配かけてすまない。俺は死なねえよ！」

「ふーん…じゃ、もう一回殺してあげるよ。でないと解らないみたいだし。」

魅魔がめんどくさそうに喋る。

「ハッ！確かにあんたは強い、だがな、俺はそれだけじゃ殺せない！
見せてやるよ…俺の真の力を！！ファイナルフュージョン！！」

かいとの身体が輝き、新たなる防衛機能が発動する！

「ブロウクンコイル！！アースビット！！メタルリングの鎧！！」

おい、なんか変なの混じったぞ!?

「みんな…来てくれたんだ!」

萃香さん!? あなた確かガイガイガ―見た事ないですよねえ!?
名台詞のパクリですよそれ!

「うおおおおおお!!!!!!!!!!」

かいとは新たな力を手に入れた!

それは誰も到達出来なかった変態ロリコンの極み!

変態なのに愛する者を守るとか言う究極の矛盾!

「これが真のハーレム勇者王…ペドフィックガイガイガ―だあああ
ああ!!!!!!!!!!」

なんか叫んだだけで衝撃波が起き、周囲に居た者達は皆怯む! 萃香

以外！

今のかいとのルックスは某ジェネシック勇者王だと思ってくれ！

「そんなふざけた装備で！悪霊『イビルスマッシュャー』！！」

無数の悪霊がかいとに食らい付くが…！

「ペドフィックオーラ！！」

悪霊が一瞬にしてロリ幼女に！

どーいう原理か全く解らないぞ！？

「な…！？」

「俺の勇氣は折れない！禁忌タブーと幼女がそこにある限り…！俺はその禁忌を拒絶する…！！」

かいとは進化した力を発動する！

「ロリンザム!!」

紅くなったかいとが魅魔の懐に!

「拒絶『ロリンザムソード』!!」

魅魔の服だけ切り裂くというとんでも武器!

「行くぜ!!カセットツール!!」

ガジェットツールじゃないの!?

「見せてやる…本当のハーレム勇者王の力を!! E・D・E・Nセ
フィロトインパクトお!!」

かいとの右手に現れた槌!!

だがその槌には始めて発動した時のどす黒さがなく、純白の小槌!

「萃香!俺がこれを放り投げたらミッシングパワーで大きくしてく

れ!!」

「解った!」

かいととは槌を投げる!

「鬼神『ミツシングパープルパワー』!!」

槌はみるみる大きくなる!!

「いけるよ、かいと!」

「おっしゃあ!!」

かいととは鉄の塊に向かう!

「インパクトコネクトお!!!!!!!!!!!!!!」

槌の柄を破壊し、腕を突っ込む!!

「…あれ？痛くも痒くもないぞ？」

「本当ね…みーちゃんは？」

「魅魔はと言つと、ピコピコハンマーサイズの槌でポコポコ叩かれていた。」

「やめてよお、痛くないけどなんか嫌ー！」

「知るかそんな事！萃香を泣かすからこうなんだよ！」

「あれ、なんであんなにちっちゃくなってるんだ？」

「あたしの能力なんだよ！」

萃香の「疎と密を操る程度の能力」でぶつける直前に槌を小さくしたのだ。

萃香が「えっへん！」となんか偉そうな人のポーズ。

胸のなさが目立つが…

「ぐはっ！」

かいと、それを見て死亡。

「かいと！？どうしていきなり倒れるの！？かいと！？かいとー！」

「我が人生に…一片の悔いなし…」

かいとと空に手を伸ばし…力尽きた。

「何言ってるの！？起きて、起きてー！！！」

かいととは数日間意識混濁状態だったが、二日後にちゃんと目を覚ましたのでご安心ください。

これは訓練じゃない、実戦だ！（前書き）

前回までのあらすじー！

・セフィロトクラッシャー！

…うん、これだけなんです…

これは訓練じゃない、実戦だ！

ついに魅魔が動く。

「皆ー！私達は着々と幻想郷を我が物に出来てます！けどある人達が邪魔するんですよー！それは…

八雲紫と四季映姫！！

彼女達を倒さない限り、私達は永遠に幻想郷を平和に出来ません！

私達は今まで彼女達の居場所を探すのに手間取ってました、ところが紫側から裏切り者が現れてくれたんですよ！

さ、かいと、居場所を！」

魅魔の誘導から、かいととは口を開く。

「あの憎き八雲紫は自分の家…マヨヒガに居る！」

「だそうです！というわけで私達は今から八雲紫に殴り込みに行きます！ただ、殺しちゃ駄目！生け捕りにするのが目的だから！誰も傷付けずに幻想郷を支配する！それが私達の理想です！」

おおおおおおお！！！！！！と空気が揺れる。

「では具体的な作戦を説明します！奈落、頼んだ！」

「魅魔様から頼まれた！さて、八雲の居場所がマヨヒガだと解った以上、俺の空間操作が役に立つはずだ。そこで！
大人数の空間転移を行う！」

ざわ…ざわ…

未知の作戦にざわめく部下。

「勿論、俺だけでは例え天地がひっくり返っても無理だ。だから此処に魔法使いがいる！」

そもそも、空間転移というのは常に転移させる側と転移する側の空間の状態を安定させておくからこそ出来るんだ。

仮にこれを無視して無理矢理転移した場合…例えば右腕がなくなつた、足が消えたなんて状態が起きる可能性が高くなる。

これを俺は『ばらけた』なんて言うんだが。

ばらけるのを防ぐ為に空間を安定させる、そう考えてくれ。

具体的に計画内容を話すと、5回に分けて転移を行う。そして1回転移すると6分間は転移を使えない。

つまり…最初に転移する者に問われるのは…速攻で相手を牽制出来

る者だ。

というわけで転移第一部隊隊長は、フランに担当してもらおう。副隊長は萃香だ！

フランを選んだ理由としては、吸血鬼としての総合的能力の高さを見た！

萃香はフランと同等のパワーを持つからだ！」

「いっぱい遊べるんだー！」

「腕が鳴るねえー！にやはははは！」

「続いて第二部隊…これは圧倒的な力を持つ者に担当してもらおう。策なんて効きやしないような力を持つ者に！」

というわけで第二部隊隊長には、お空、君が適任だ！副隊長は勇儀！萃香のカバーもしてやってくれ！」

「うん！…うん？結局何番なの？そっか、3番だ！」

「2番だよ！…大丈夫かなあ…？」

「第三部隊はあらゆる状況下においても動ける百戦錬磨の者が適任

だ！

よって隊長は霊夢、任せた！」

「私！？」

「そうだが？因みに副隊長は真樹、お前だ。」

「解った。」

「第四部隊は戦況を引つ掻き回す存在が欲しい…さとり、こいし！君達が隊長だ！」

「姉妹で動くななんて久しぶりね…」

「そつだね！」

「副隊長はぬえで！」

「はいはい！」

「そして最後…第五部隊は指揮官に任せようか！魅魔様！」

「いーよー！」

魅魔が親指をぐっと上げる！

「というわけだ！なお、今回俺とパチュリー・桜の3人はこの作戦に参加出来ない！空間転移はかなり慎重に行わないといけない、だから戦える余裕なんてない！済まないが…行けない俺達の方まで頑張ってくれ！そして八雲紫を此処に連れて来てくれ！」

おおおおおおお！！！！！！

大地が、歓声に共鳴したかのように震えた。

「真樹：仕込みは頼んだ。」

奈落が何かを真樹に渡す。

「任せろ。俺を誰だと思っている？」

「心強いな！：：：気をつけるよ？」

「ああ。『強いては事を仕損じる』：：：慎重に仕掛けるよ。」

真樹は自らの影に溶けて消えた。

これは訓練じゃない、実戦だ！（後書き）

次回予告！

ついに全面戦争が始まる！

奈落の策は、戦況をどう変えるのか！

というわけで次回

「全面戦争 前哨戦」

チルノ「あたいの出番がない……」

衣玖「私も……」

作者「もうちょい待って」

次回更新…木曜

全面戦争 前哨戦 (前書き)

前回までのあらすじー！

・戦争開始

全面戦争 前哨戦

真樹はマヨヒガ近辺に居た。

「転移空間固定完了。これより天空刀をカモフラージュする。」

空中にある小さな刀のようなものに細工をし、小石に変える。

「…完了。帰還する。」

真樹は影に溶けた。

「天空刀固定。空間断絶、レベル1に設定。パチュリー、マヨヒガの座標をこちらに。」

奈落もまた、空間転移の準備をしていた。

「…XⅡ295、YⅡ347。かなり端だな…まあ境界守ってるんだから当然だな。」

転移先座標入力……………完了。

転移テストに突入する。…転移！」

事前にテスト用に捕まえておいたゆつくりを転移させる。

『奈落ー、ゆつくりがちゃんと来たのー、ばらけてないのー！』

ルーミアの声を聞いた奈落はほっと溜息をついた。

「…テストは成功。後は時が来るのを待つだけか。パチユリー、桜、今のうちに休んでおいてくれ。大量の人間や妖怪を転移するんだ…魔力や体力はかなり使うぞ。」

「解ったわ。」

「また後でね。」

パチユリーと桜は寝室へ。

「…さあて…俺も休むか。」

奈落は結界の側で仮眠を取ることにした。

そして。

「第一部隊、転移準備！」

「座標安定！空間も固定されてるわ！」

「うし…飛ばすぞ…！」

奈落の空間転移が発動し、フラン・萃香を始めとする第一部隊がマ

ヨヒガへ転移した。

「第二部隊、転移準備を！」

その頃。

マヨヒガがピンチに陥っていることに気付かず、紫は洩矢神社に居た。

「…ぼつちよ、早苗さんも行方不明…？」

あきららは「何故？」としか思えなかった。

「今回は犯人が解ってるわ。紅魔館の主…レミリア・スカーレットよ。」

「レミリア…！？」

吸血鬼じゃないか！

「正直な話…こちらは圧倒的に不利なの。あなたの力も借りたくないだけ…無理そうね。」

ぼっちよ奪還作戦の際に紫と諏訪子は敵対した。

その影響だろう。

よく見ると、紫にも諏訪子にもやつれた雰囲気が見て取れる。

引き分け…だったのか？

「私は戦うわ。幻想郷を見ず知らずのごろつきに支配させるわけにはいかないから。」

「…ごろつき…ねえ。」

「…！」

あきらと紫は声のした方に振り向いた。

そこには、日傘を挿した緑色の髪の女性が優雅に佇んでいた。

チエック柄のドレスはどこか彼女の女性らしさを見せる。

「幽香…！貴女今まで何処に…！」

「紫。今日は取引をしに来たの。その質問には取引が成立した時に答えてあげる。さて…」

幽香は少し加虐かぎやく的な笑いを浮かべながらこう続けた。

「私は妖夢の居場所を知っているわ。教えて欲しいかしら？」

「妖夢の…！？」

「待つて。何故貴女が妖夢がさらわれた事を知っているの？」

紫は冷静に聞き返す。

「その質問にも答えない、取引が成立するまでは。」

「…解った。条件は何？」

幽香の笑みが大きくなる。

「簡単よ。…貴女の身柄を拘束させて貰うわ。」

「！？それはどういっ…！」

「どういっも…どういっもないぜ、紫さんよ。」

「！？」

あきらは見るとは見るはずのない人物の姿を見た。

「…かいと…！お前なんで此処に…！？」

その質問に、かいとは淡々と答えた。

「済まねえな、あきら。俺は八雲紫のやり方がどうしても気に食わなくてな。裏切らせてもらったよ。ぬえを解放したのも俺だ。」

「なんで…なんで裏切った！」

「ぬえの台詞、聞かなかったか？『私達は遊びただけなんだ』…お前らは悪なんだよ。しかもどうしようもない悪だ。俺は悪者にはなりたくないんでね。」

「けど、かいとこのせいではぼっちょは行方不明になった！それはどう考えてるんだ！？」

「ああー、ぼっちょなら大丈夫だ。ぼっちょは紅魔館に居る…早苗さんもだ。レミリアや咲夜も居るから安心していいぞ。」

…そうだ、ぼっちょが姿をくらませた理由、教えてやるよ。俺が紫に殺されると思ったかららしい。レミリアからそう聞いた。

言うておくが、レミリアがぼっちょと早苗さんをさらったわけじゃない、ぼっちょと早苗さんが自分からレミリアを呼んだんだ。」

「なっ…！？」

「レミリアはぼっちょの命の恩人だ…なんせ八雲紫はもうすぐ俺達のアジトにぼっちょと早苗さんを送り込んで見殺しにしようとしていたらしいからな。」

「…」

紫は黙り込んだ。

「とうわけだ、あきら、お前もこっちに来い。悪者にはなりたくないだろう？」

「…まだまだ…俺はかいとについていくわけにはいかない…マヨヒガには、幽々子さんが！」

「幽々子さんか…OK、彼女も連れて行こう。そしたらいいだろう？」

「…」

「今のうちに決断しやがれ、あきら。でないとマヨヒガが壊滅するぞ？」

「今…なんて…!？」

「だーかーらー、幽々子さんを救うなら救うでさっさとしないと見ず知らずの誰かに捕まっちゃうぞって話だ。」

「…かいと…お前は…！」

「俺の目的は八雲紫だ。そいつさえ捕まえる事が出来ればいいんだよ。で、幻想郷は平和になっておしまいだ。」

「…」

「あきら…冷静に考えてくれ。悪人一人を差し出さずに無実の人々が捕まる結果を望むか、悪人を一人を差し出して他人を救うか…どっちを選んだらいいか、あきらなら解るだろ？」

全面戦争 前哨戦 (後書き)

次回予告！

かいたの提案に、あきらはどう答えるのか!？

そしてマヨヒガでの大戦争開幕！

というわけで次回

「全面戦争 序」

次回更新：木曜夜または金曜

全面戦争 序 (前書き)

前回までのあらすじー！

・戦争中

全面戦争 序

「
…」

あきららは苦渋の選択を強いられていた。

此処でかいとこの言う通りにすれば、幽々子さんと妖夢は確実に助かる。

だが、他の人がどうなるかは解らない。

自分の決断で、他人を殺す結果になるかもしれない。

だが此処で拒んだ所で何のメリットがある？

かいと、そして横に居る幽香とか言う明らかに最強クラスの人を敵に回し、しかも後ろには紫を良く思っていない諏訪子さんと神奈子さんが居る。

ついでにマヨヒガ壊滅、幽々子さんも、妖夢も救えない。

「…かいと、俺さえそちらにつけば幽々子さんと妖夢は助かるんだな？」

「あきらー！」

紫が止めよつとするが…

「…ああ。保証しよう。」

かいとの答えで、行くべき道は決まった。

「…なら、今すぐ保護をしてくれ。俺は…誰も傷付けたくない。」

「…だそうだ紫さんよ。ぶっちゃけあんたさえ捕まえればもう終わりだからな。四季映姫は彼が担当してくれる。というわけだ…素直に捕まってくれや。」

「私は…！」

紫はあきらを掴む！

「なんとしても捕まるわけにはいかない！」

「…堕ちたな、八雲紫。あきらを人質に取るなんて。俺は友達のを案じて叫べばいいのか？泣けばいいのか？それともテメエに従えばいいのか？」

「…私の言う通りにすれば、彼は助かるわ。」

「へえー…だがな、俺はこの程度では動じないぜ？」

「…だったら彼を殺す。」

あきらを掴む力が強まる。

「ふん…そうかい。…ロリンザムー！」

かいとの身体が蒼く輝く！

「…何をするつもり？その前に私は彼の首を飛ばせるわよ？」

「だろうな。』『ここから』だったらな。」

「何言ってるの？あなたはそこにつ…！？」

脇腹に激痛が走る。

かいたは紫の後ろに居たのだ！

「ロリンザムの応用…残像だ！幽香さん、後は頼む！」

「言われなくてもっ…！」

紫の一瞬の隙を突いた幽香は紫に飛び付き、押し倒す！

「チェックメイト。」

紫の顔に突き付けられる日傘。

「…くっ…！」

その間に、かいとはあきらと共に逃げる！

「あきら！マヨヒガに行くぞ！」

「おうー！！」

「…解った。」

空間を安定させる作業をしながら、奈落は誰かと話をしていた。

「誰から？」

桜が問い掛ける。

「かいとからだ。西行寺幽々子には手を出すな…だそうだ、桜、フランと萃香に通達してくれ。」

「解ったわ。」

「第二部隊に通達する！マヨヒガに居る西行寺幽々子には何かあっても手を出すな！解ったな！？」

「了解！」

お空と勇儀が頷いた。

「さて…第一部隊はどうなっている…？」

マヨヒガでは。

「ゆーゆーこーさん、あーそびーましよ？」

「なんかフランが怖いー！」

とも〇ちと化したフランが幽々子を探すがてらマヨヒガを破壊していた。

一方の萃香はと言うと、かるーく橙と小町を蹴散らし、やっぱり幽々子を探していた。

「スターボウブレイク！」

「百万鬼夜行！」

紫は事前にマヨヒガ周辺の妖怪に警備を当たらせていたが…

当然ながらフランと萃香にまさに無双されていた。

今のスターボウブレイク及び百万鬼夜行でさらに妖怪達は吹き飛び、力尽きる。

「此処から先は通さない…！」

「あんまりやんちゃしていると取材するよー！」

マヨヒガを、そして幽々子を守る最後の壁…藍と文がフランと萃香の前に立ち塞がる。

えっ、四季映姫さんはって？彼女はセルティの幻術で未だにマヨヒガに戻ってきてないのです。

小町、橙が倒れた今、居るのは文、藍のみ。

幽々子は永琳と輝夜と共に既にマヨヒガを脱出していた。

だがそんな事知った事ではないフランと萃香は文と藍をボコボコにすべく構えた。

全面戦争 序 (後書き)

次回予告！

どんどんカオスになる戦争！

そしてまさかの展開に！

というわけで次回

「全面戦争 破」

次回更新

…リアルがかなり忙しい為日曜になる可能性あり
なるべく土曜に出来るように頑張ります…

全面戦争 破 (前書き)

前回までのあらすじー！

・カオス真っ只中

ついに小説史上最悪のタブーに触れます！

全面戦争 破

幽々子は永琳、輝夜と共に逃げていた。

「まさか、最初からフランと萃香を投入してくるなんて…相手は本気なのね。」

「そうですね、姫様。逃げておいて正解でしたね。」

「でも、何で私達は逃げてるの？戦った方がいいんじゃないの？」

その幽々子の疑問に、輝夜は憤慨する。

「貴女、自分が支配者って事、自覚してないの！？貴女が倒される事はすなわち幻想郷が支配される事に繋がるのよ！？」

「あ、そっか。そうだったねー。」

「貴女って人は…」

輝夜が頭を押さえる。

当の幽々子も、支配者らしい仕事はしないし、そもそも回ってこない。

自覚がないのも解らなくはないのだが…。

「！姫様、前方に何か居ます！」

「見つかったの!？」

確かに前方には何か居る。しかし、何なのかははっきり解らないのだ。

「あれは!？」

見えたのは、黒。

それも人の形をした、黒。

「なに…あれ…!？」

「シネエ！」

「永琳はやらせない！ブリリアントドラゴンバレッタ！」

黒は輝夜のスペルカードの威力の大きさに怯む！

「『反魂蝶 伍分咲』」

黒は蝶に包まれ…

バタリと倒れた。

「流石ね…」

輝夜は呟く。

「う…う…う…」

倒れていたはずの黒から黒が剥がれ、正体をさらけ出した。

「あなた…夜雀!？」

「うん?…どこ?…」

夜雀ことミスティアが、まるで何も覚えていないかのように輝夜に聞く。

「マヨヒガの近くよ。それにしても、貴女はどうしたの?」

「うーん…ルーミアについてって…あれ?どうしたんだっけ?」

記憶が混濁しているようだ。

「永琳、とりあえず彼女に応急処置を施して。先を急がなきゃ。」

「解りました。」

永琳はどこからか救急箱を取り出し、ミスティアの治療を開始する。

「ああー!!!思い出した!」

「んんんんわよ…でびっじしたの？」

「ルーミアが…ルーミアがピンチなの！」

同時刻。

「ハハハハ…苦しかろう…自らの闇に喰われるのは。」

サラリーマンのような姿…黒服の老けた男性が高笑いする。

「…っ…っ…っ…」

ルーミアは、男性の前に踞っていた。

「しかし、私も偏見を持っていた…この世界はただただ無駄な世界だと思っていたが、力を持つてみると楽しいものだな。私の手で、世界一つを消し去れるのだから…ハハハ！」

男性は少しずつルーミアに近付く。

「まずは貴様からだ…。」

ルーミアは「ここで死ぬのか」と感じた。

目の前に手が、命を奪う手が、もうすぐそばにある。

…苦しまないで逝けるかな…

「狂気『魔剣ラグナロク』」

男性が、吹き飛んだ。

「ルーミア！大丈夫か！？」

聞き慣れた声が、ルーミアを励ます。

「来て…くれたのか…」

「あいつは何だ？」

奈落の声には、怒りが混じっていた。

「解らない…けど…名前だけは解る…ストーンフィールド…異界人…」

「解った。ルーミア、これでも飲んでろ。」

ルーミアに持たせる小さな瓶。

「これ…大事なものじゃ…」

「君の命に比べりゃ塵だ。何より、君の命が大事だ。」

「ありがとう…」

ルーミアは小瓶を開け、入っていた液体を飲む。

力が奥から湧いてきた。

「…ストーンフィールド…お前は許さない…!!」

「咎人が何をほざく？貴様も消えたいか？」

ストーンフィールド（書くのがだるくなってきたので以下SF）は
見下すような態度だ。

「テメエは!!」

奈落はSFに切迫する!!

「百万回死ね!!」

全面戦争 破 (後書き)

次回予告！

ストーンフィールド？ハツ、所詮石〇の事だろう？

さっさと倒されないかなー！

というわけで次回

「作者は例の条例には死んでも賛成しません、あ、異界のお話ね！
という感じの全面戦争 破壊」

作者「さて、執筆が楽しくなってきたぞー」

幽香「そのドS精神には共感するわね。小説は駄文だらけだけど」

次回更新：日曜予定

作者は例の条例には死んでも賛成しません、あ、異界のお話ね！という感じの会

前回までのあらすじー！

・ストーンフィールド！！

PV50000、ユニーク50000突破！

作者は例の条例には死んでも賛成しません、あ、異界のお話ね！という感じの会

「ハハハ！貴様ごときが、私と言う神に勝てるとても本気で思っているのか!？」

S Fは奈落の攻撃を受け止める！

「まだだっ!」

奈落はS Fを蹴飛ばし、反撃を防ぐ！

「ククク…弱いぞ、弱すぎるぞ!」

S Fは奈落に切迫する！

「封印『二次元暴力』!!」

奈落の右頬が拳に埋没する！

「ぐっ！」

口の中に鉄の味がする。

「さあ、何処からでもかかってきたまえ！私は逃げも隠れもしないぞ！」

「言われなくても！憤怒『熔けそうな火炎地獄』…！？」

ところが。

奈落は確かにスペルカードを発動したはずなのに、スペルカードが効果を発揮しない。

「ハハハ！！愚か者め、スペルカードに頼り切るからそうなるのだ！ファファファ！！」

「ちっ…！だがっ！！」

奈落はラグナロクを構える！

「俺の相棒は、こんな事でくたばる程脆くはないんだよ！！」

「勢いだけでは何も変えられんぞ！」

だが剣撃だけではやはり火力不足だった、SFは剣をものともせず
に奈落を殴る！

「私に盾突くからいけないのだよ！」

「ぐ…」

「さて…私に従うと言つのなら生かしてやっても良いのだが。」

「馬鹿か？誰がテメエみたいな人間のクズに従つかよ。」

「そうか…ならば死ぬがよい。」

SFは奈落に右手を向ける。

「封印『永遠に終わらない規制』」

右手が輝き始め、力が溜まる。

「二次元世界からさようなら。」

「春槍『一万本土筆』」

SFの身体を貫く槍。

SFの鮮血に、槍が汚れる。

「が…っ!?!?」

「この老翁が、私の奈落に触れないで。汚らわしいゴミが。」

冷酷にSFを罵倒する…

最強の支配者、桜。

「な…！？なんで桜が…！」

「あなたの考える事くらい解るわよ。あなたの居場所もね。」

「縁月桜…！貴様、向こう側で邪魔をして、ここでも邪魔をするか
！」

口から血を滴らせながらSFは吠える。

「知らないわよ、あんたの事なんか。でも私の分身に邪魔されるなんて、とっても弱いよね。」

「なめてかかるのもいい加減にしろ…今にも貴様をゴフウっ…！！
！」

悪者のテンプレ発言を無視し、一万本土筆をさらに発動する桜。

「何か言ったかしら？ゴミは何も喋らないのが世の理よ？」

…支配者勢の人間（霊夢、幽々子、四季映姫以外）は皆ドがつく程のSだってけーねが言ってた。

「あ…っ…あ…」

「猿轡嚙ませて奴隷にしてあげてもいいのよ？」

「奴…隷？死んでもなるか！」

その一言さえなければ、直後の悲劇に巻き込まれる事はなかったのに。

SFは愚かにも拒否してしまった。

「じゃ、死になさい。『白生蝶 狂い咲き』」

SFの周りに飛び交う白い蝶。

「あなたの身体はもう使い物にならないわ、今ならまだ間に合う、

私の奴隷になりなさい。」

語尾がなんだかおかしい気がするが、桜はSFに最後の選択を与えた。

「…無理…だ…！」

「ではさようなら。この世に別れを告げなさい。」

蝶がSFに群がり…

「うわぁ、ぎゃおえらかたな = # & ……………！」

発音不可能な叫びが木霊する。

そしてSFは…

肉片となった。

死臭というのだろうか、嫌な肉の臭いが鼻を突く。

ただ、悪者としては最もまともな死に方かもしれない。

骨と肉が残っているだけまだマシか、きつとそうだよね。

そんなこんなでスーパーサディスティックマシン桜はストーンフ
ールド、略称SFをまさに虫ケラのように殺してしまいました。

これで幻想郷は救われたぞ！

作者は例の条例には死んでも賛成しません、あ、異界のお話ね！という感じの会

次回予告！

石〇はこんな事で終わらない！

ついに暴拳に出る！

というわけで次回

「全面戦争 急」

次回更新…月曜予定！

全面戦争 急 (前書き)

前回までのあらすじー！

・ストーンフィールド死亡

全面戦争 急

SFはと言うと、死後の世界で凄い展開に巻き込まれていました。

「…わたしは…わたしはまだ…まけるわけにはいかない…」

『何で平仮名？ま、君の心のどす黒さっぷりには私も感服だよ、すこしふしぎ君。』

「それはSFエスエフのりゃくだ…わたしはストーンフィールド…りゃくしてSFだ…」

ついに頭が狂ったのか、独り言を呟き始めたSF。

だが声の主はSFだけではない…もう一人。

『君の身体、甦らせてあげようか？』

「な…!?!？」

『ただし、君が幻想郷を支配するのが絶対条件だけどね。どうする？』

「わたしは…よみがえりたい…そして…すべてをわたしのためのうえでおどろかせたい…」

『素晴らしい考えだ。君とは仲良く出来そうだよ。私はロギア。…ストーンフィールド、君と共に行こう。』

まさかの展開に、作者もあんどくりです。

「ははは…あはははははは…！」

此処に幻想郷史上最凶の悪が降臨した。

「…懲りない奴ね。」

桜はSFが死んでいない事に気付いた。

「…奈落。あの薬はどうしたの？」

「ルーミアに渡した。」

「あれ、あなたが飲むからこそ効果あるのに…まあいいわ。今の内に逃げなさい。」

「は？」

いまいち事態が飲めない奈落に、桜はこう返した。

「まだ終わってないわ。あのクス、死んでない。正直言っわ、きつと今回はやばいかも。」

感じるどす黒い何かが、桜に危機感をもたらした。

「だが桜、お前を置いていく訳には…！」

奈落は反論するが…

「ありがとう。でもね…私が1番動けるんだから、私が動くのが筋よ。行きなさい。でないと私は力付くでもあなたを放り投げなきゃいけないわ。」

こうなった桜はもう折れない。

奈落はルーミアを抱え、せめてもの一言を言う。

「…後で戻る！それまでどうか…！」

一瞬躊躇い、奈落は桜から離れていった。

「…その後ですらないかもだけど。ねえ…？」

桜は現れた者を一目見て、呟いた。

「ロギア。」

「残念だが本体はこちらだ。」

奈落とルーミアの前に現れた、さっきまでの敵。

「ストーンフィールド……!!」

『久しぶりだ、双月奈落。その名の通り、狂気に堕ちてしまえばよ』

かったものを。』

SFの口を借り、もう一人が喋る。

それはかつて奈落を狂気に堕とした張本人だった。

「テメエ…！ロギア！！」

『可哀相に。中途半端な狂気しか操れなくなってしまった弱き者よ…』

「それはテメエの事だ、ロギア！！」

奈落は吠えた、それは狂気だけでは強くなれない、それを知っているからこそその怒りだった。

『煩いね。仕方ない…力の差を突き付けないと解らないようだね。ストーンフィールド、君の力で消し去ってあげな。』

「解った…暴拳『零波動』」

何か来る。

そう感じた奈落は咄嗟にルーミアを空間断絶で守った。

次の瞬間には、奈落の身体から血の噴水が。

ルーミアは無事だった…しかし、手負いの奈落には威力が大きすぎた。

奈落はコマ送りをしたかのようにゆっくりと地面に膝をつき…前に倒れた。

「クハハハハハ！…弱い、弱過ぎるぞ！」

SFは歪んだ笑い声を響かせる。

「…」

奈落にはもう、立ち上がるだけの力すら残っていないかった。

地面が紅に濡れる。

紅は土に染み込んで、土の色を変えていく。

「…死んだか。」

SFはただ何も感じずに、次の行動…ルーミアを狙う行動に出る。

結界を何回か攻撃する。

「…ふむ、なかなか堅いな。さて、どうしたものか…」

結界にはヒビ一つ入らない。

SFは少し思考を巡らせていた。

…それは、次なる敵に隙を見せてしまっているのと同じ。

「影符『影縫』…!!！」

突然、SFの身体が影に縛られた。

「ルーミアの姉貴には手を出させない…！」

真樹が、ルーミアの雪辱を晴らすべくSFに立ち向かう瞬間だった。

全面戦争 急 (後書き)

次回予告！

真樹・桜の秘めたる力が明らかに！

そして！

ついにあのキャラがこの事態に立ち上がる！

というわけで次回

「奈落は死んでない、今回は死にかけたただけなんだよ」

桜「奈落って噛ませ犬だよな？」

真樹「そうでしょうね」

奈落「覚えてろよお前ら…！」

次回更新：火曜予定

奈落は死んでない、今回は死にかけたただけなんだよ（前書き）

前回までのあらすじー！

・奈落がボコボコにされた

奈落は死んでない、今回は死にかけたただけなんだよ

「な、何だ…！？身体が動かない…！？」

SFはもがいているが、蜘蛛の巣の原理のように、もがけばもがく程影の枷がSFに食らい付く。

「俺の能力、『自らの影を操る程度の能力』の一つ…影縫はお前の身体から放たれる魔力や霊力、妖力に反応する。つまりお前の力が強ければ強い程…お前は動けない。」

「小癩な真似を…！！」

しかし、SFは動けない。

「やりたくないんだが…またルーミアの姉貴にからかわれるし…けど背に腹は変えられん…やるか。絶鬼、羅鬼^{トウキ}。やるぞ。」

真樹の影が2つに分かれ、影はSFの両腕を押さえる。

「憑依…」

真樹の身体に、何かが入っていく。

「さくさく…さくさくいきますの…」

声が女性のものになった真樹は、右手に小刀を握り、左手に鬼の面を握り。

鬼の面を着けた真樹は、小刀を両腕で握り、SFの心の臓を目掛けて走り出す。

「憑依『血肉えぐり』」

ぶしゅつ。

SFの身体に突き刺さる小刀。

返り血を浴びた真樹の見た目は、まさに狂人。

「たっぷりえぐってあげますの。」

小刀を上下左右に動かし、身体をえぐる真樹。

「絶鬼…羅鬼…止め。」

影も刀を握り…

グサツ、グサグサツ。

S Fの身体に刺さる3本の刀。

「さようなら…ですの。」

瞬間、S Fの身体から血が舞う。

「ぐ…が…」

SFは力無く倒れた。

「良かった。これで終いだ。」

「……とても思ったかね？」

「!?!?」

そこには、傷一つないSFが。

「君が『さようなら』だ。暴拳『零波動』」

回避する間も、真樹にはなかった。

真樹も、一撃で倒れた。

「くくく…弱いな。」

同様の事が、桜の方でも起きていた。

「はっ、はっ…」

「もう終いかね？私はまだぴんぴんだが？」

「くっ…！」

桜は先程からSFを瞬殺しているのだが、その度にSFは甦り、桜の力が弱まってきていたのだ。

「おしまいだよ。暴拳『零波動』」

ついに桜も陥落し…戦闘不能に。

「素晴らしい…素晴らしいぞ！この力！ハハハ！見ろ、相手がゴ
ミのようだあ！ハハハハハハ！！！！」

S Fは至上の快楽に浸った気分で零波動を放つ。

それは幻想郷の殆どを包み、数々の者を瀕死に追いやった。

「私の！私の時代が！！今来るのだあ！！ハハハハハハ！！！！」

もはや幻想郷は終わりなのか。

紅魔館

「ぼっちょ！このままじゃ此処もまずいわ！」

レミリアが焦る。

「皆の避難は終わりました！何時でも行けます！」

「解ったわ。幻想郷を救うぼっちょ…！かっこいい！」

頬を真っ赤にして悶えるセルティ。

「セルティ！？しっかりして！」

「はっ！まずいまずい…カリスマがなくなる所だったわ。」

「準備はいい！？行くわよ！」

紅魔館からの勇者…レミリア・ぼっちょ・セルティ・咲夜・美鈴の
5人が戦闘体勢を取っていた。

「行こう！皆を助けに！！」

5人は飛び立った。

一方。

「ざけんなあ！！」

なんとかかいとが零波動を跳ね飛ばす！！

「凄いやかいと！！」

「これは凄いわね…」

かいとのおかげで、あきらと幽香は無事だった。

幽香はあその後、紫を縛り上げ放置したらしい。

「俺の能力『全てを拒絶する程度の能力』だ！一回こっきりだが事象をなかったことに出来る！あきら！この変テコ攻撃しやがる奴は何処に居る！？」

「あつちだ！」

「OK、なんかよくわからんがこれ、やばいぜ！幽香、戦えるか！？」

「私は支配者よ？幻想郷の壊滅の危機に動かないわけがないじゃないかい。」

「…ならいける！行くつぜ、あきら、幽香！」

「ああ！」

「ええ！」

これが、後に幻想郷の歴史に永久に刻まれる出来事になる。

人はそれをこう呼んだ…

「まるきゅーの乱」と…！…！

奈落は死んでない、今回は死にかけたただけなんだよ（後書き）

次回予告！

あえて何にも言わない！（おい

というわけで次回

「まるきゅーの乱 壱」

あきら「やっと3人揃ったな！」

ぼっちょ「本気を出してやる！」

かいと「死にさせこの少女の敵め！」

次回更新：火曜夜or水曜

まるきゅうの乱 巻 (前書き)

前回までのあらすじー！

・ついに3人集結

まるきゅーの乱巻

「ハハハ！」

もはやただ笑うだけのSFにとんでもツッコミが入る。

「何笑ってんじゃハゲえ！！！」

脇腹を両足で蹴飛ばすかいと！

「何だね？私に裁かれに「具現『修羅の世界』！！！」

さらにボコボコに殴られるSF！

「人の話は最後まで「矛盾『クラッシュヤークロス』！！！」

揚句の果てには引きちぎられたSF！

「「「完全勝利！！！」」

おい志村！後ろー！

「神である私に刃向かうとは…実に愚か」「じゃかましいわあ！
！…！！」「」「」

あきららはSFの腹を、かいと顔面を、ぼつちよは男に必ずある急所をぶん殴る！！

「ぎいやあああ！痛い！痛いー！！！」

SFは痛みの余り跳びはねる！

主に急所へのダメージがでかいぞ！

「ふざけんじゃねえぞこの糞ジジイ！！何が非実在青少年だ！ teme
エも非実在人物だろうがあ！」

確かにこの小説はフィクションだがっ！

「それ私じゃない、私の親戚「喧しいわー！！」「」

必死の弁論も虚しく、SFはあきらみに思いつ切り蹴られる！

「テメエの一存で幻想郷が滅びかけたのは紛れも無い事実だ！裁くのはテメエじゃねえ、俺達だ！！」

「何を言うか！子供は大人によって管理されなければならない！この世界もそうだ！そうしないと子供は勢いに任せて暴走してしまう！」

「それは違う！！」

ぼっちょが叫ぶ！

「あなたたち大人はいつもそうだ！まるで子どもを自分の傀儡のように扱って！失敗した、だから何なのさ！失敗するのをあたかもいけないことのようにして！それを正すのが大人じゃないのか！」

「やはり貴様らも規制されるべき人間か！！！暴挙『零波動』！！！」

SFは零波動を放つ！！

「護法『神秘の守り』!!」

あきら、かいと、ぼっちょを包む神々しいベルが、彼等を守る!

「テメエには解らねえさ!時代は変わり行くものだってなあ!!」

「そつだ!俺達はこの世界を守りたい!だから!!」

「吹き飛ばええええ!!!!!!」

それぞれの想いを乗せた拳が、SFに突き刺さる!!

「ぐぬうつ!?!」

「まだだっ!!」

あきらの身体が銀色に輝く!

『あんな奴、ぶっ飛ばしてしまいなさい!』

「諏訪子さん…神奈子さん…!」

『貴方なら…正統なる最強の吸血鬼…ツェツペリンの末裔なら…運命なんか覆せる!』

『頑張つて!ぼっちゃんら必ず勝てるから!』

「レミリア…セルティ…!」

『お前なら、幻想郷中に平和をもたらせるよ!目茶苦茶な力、見せてやりな!』

『私は寺子屋の子ども達と共に、あなたを応援するわ!』

「妹紅…慧音…!」

声は大きくなり…さらに対話は続く…!

まるきゅーの乱 巻 (後書き)

次回予告

「まるきゅーの乱 式」

次回更新：水曜

まるきゅーの乱 弐

『俺の息子よ…』

「父さん…！」

『済まないな…幻想郷がピンチだったのに、俺達は行けなくて。』

「…いいんだ、父さん。僕は必ず生きるから！あいつに勝って、早苗さんと添い遂げる！」

『それでこそ俺の息子だ！ぱーっと一発、やってこい！』

「おっ…！」

『かいと！全部終わったらあんとと戦う！』

「チルノ…！」

『あたいが最強だって所、見せてあげるんだから!!』

「そうだな!」

『あきら君。』

「幽々子さん…!?!?」

『必ず帰ってきなさい!これは私だけじゃなくて、妖夢の願いでもあるんだから!』

「…はい!」

『あきら、絶対に帰ってきて…!』

「妖夢…!」

『…お願いだから…!』

「解った！俺は必ず帰る！」

『…うん！』

『ぼっちよ君…全部終わったら…』

「解ってます。…だから、僕はいつを…！」

『はい！』

『かいと…あたし、待ってるから、帰ってくるまでずっと待ってるから！』

「萃香…！」

『だからかいとの力、見せてあげて！』

「ああ！」

『まだ…まだ、終わらない…。』

幻想郷中、全員の姿が、一瞬にしてあきら達の周りに現れた。

「頑張れー!!」

「あんな奴に負けるんじゃないよ!」

「いつけー!!」

周りの想いが、一つにまとまっていく。

「な…何なのだ…これは…!」

SFは有り得るはずのない光景に恐怖していた。

そして、それをやってのけた3人の人間にも。

かいたの両腕から伸びた蒼い巨大な刀は、SFを真つ二つに!!

「再生させる暇を与えるな!!ぼっちょ!!」

「…ヴォルティス・ツェツペリンの名の下に…最大の攻撃でもてな
そう…神雷槍『ハルバード・ヴォルティス』」

ぼっちょが掴んだ槍には、バチリ…バチリと雷が纏っている!

「行け」

投擲した槍は、真つ二つになったSFの下半身を消し飛ばした!!

「あきら!頼んだ!!」

「頼まれた!狂撃体術『無獄』…!!」

あきらの姿が消える!!

「ぬっ!?!」

「奥義『夢幻泡影』:!!」

拳を飛ばし、SFの上半身の半分を吹き飛ばす!!

「まだ終わっちゃいないのか!?!」

「私は…私はまだ倒れぬ:!!」

「懲りない奴だ!俺達の力、見せてやろうぜ!!!」

「」
「」
「おう!!!」

まず飛び出したのはぼっちょ!!

「本気でやっちゃっていいんですか!？」

「いいよ!ぶん投げて!」

「ええーい!」

ポイツと投げたハルバードは異常なまでのスピードでSFに向かう!

「ぎゃああああ!」

SFはもう体力が一桁の勢いだ!

「かいと!」

「用意は出来てるぜえ!!! E・D・E・Nセフィロトクラッシュャー
!」

かいとの右腕には巨大な白い槌が!

「チルノ！パーフェクトフリーズだ！」

「解った！パーフェクトフリーズ！」

カチーン！と凍ったのは…

かいとの槌！！

「これで俺の武器は完璧になる…！！」

氷が割れ…！！

「オリハルコン濃度100%の究極の武器い！！とくと御覧あれ！！」

SFにセフィロトクラッシャーが刺さる…！！

「まだかつ！あきらめ！！」

ミワセウス、別名アルセ〇スはあきらを背に乗せ、空を翔ける!!

「我はあきら・ぞんぼるとお!!悪を断つ剣なり!!」

あきらは刀を一本取り出し!!

「斬艦刀・三国無双!!」

「「「なんじゃそりゃあああ!!」」

あきらはSFの真上に!!

「チエストおおおおおお!!!!!!!!!!」

刀はSFを粉碎!!

「我が斬艦刀に!!断てぬものなし!!」

「「「おおおお!!!!!!!!!!」」

しかし、未だにSFは消滅せず…

「まだだ…まだ…！」

「皆の者」

ミワセウスが語りかける。

「異界には、最強と言われる呪文が存在する…！」

そして神様お得意のテレパシーでその呪文を伝える。

「オオ、皆で叫ぼう！」

「さくろー！」

「せーのっー!!」

「っっバルスっー!!!!!!!!!!」

「ウボアアアアア!!! 目があゝ、目がああああああ!!!」

SFの影が…幻想郷から消滅した。

まるきゅーの乱 弐 (後書き)

次回予告…

最終話!!

というわけで次回

「まるきゅーサーガは永遠に」

次回更新…水曜夜or木曜

まるきゅうーは永遠に(前書き)

前回までのあらすじー！

・SF消滅

今回最終話！

まるきゅーは永遠に

SFが消滅して3日。

その間に八雲紫・四季映姫の二人は『何もしてなかった』として支配者の権限を剥奪されてしまった。

…まあ彼女達の名誉の為に補足すると、紫は幽香に亀甲縛りされて身動き一つとれなくて、四季映姫はセルティの幻術に嵌まっていたからなのだが…。

というわけで、残りの支配者勢：すなわち幽々子・幽香・霊夢・そして生存が確認された桜は議論を交わし…

暫定的に、魅魔・奈落・幽々子・幽香・霊夢・桜、補佐役としてあきらとぼっちょが支配者として動く事になった。

ちなみにかいとはと言つと…

「紳士は危険^{ロコン}」という満場一致の多数決で支配者にはなれなかった。

「うそおおおん!？」

かいは血の涙を流していた…

「どうしてなんだ!?俺は幻想郷を救った一員だぜ!?なのになんで!？」

「「「いやー…流石にロリコンを支配者にしたら色々問題ありそうだし…」」」

支配者全員の共通意見は、かいとに相当なダメージを与えた。

「テメエら裏切りやがったなあああああ!?!?!?!」

そんな笑い事があつたが、彼等には一つ、問題があつた。

「で、あなた達は異界人なわけだけど…元の世界には戻らないの?」

霊夢のもつともな質問に、真つ先に返答したのはかいとだ。

「戻らないね！俺にはハーレムを作るって夢がある！それが叶うまでは戻らない！」

「はあ…無理だろうけどせいぜい頑張りなさい。で、ぼっちょはどつするの？」

霊夢がかいとの未来を的確に突いた気がするがスルー。

「僕は戻ります。今回の事を両親に説明しないと…」

「そうよね。あなたの両親、昔幻想郷に居たらしいしね。それがいいと思うわ。」

「あ、でも全て終わったら戻ってきます。」

「それは頼もしいわね。…あきらまは？」

「俺は此処に居ます。ぼっちょが戻ってる間、此処をかいとの魔の手から守らないといけませんし。」

…え？なんで一旦だつて？

この物語…まだ続きがあるんですよ。

そうなんです、続編とさえいいのでしょうか…とにかくまだ続きがあるんです。

でも、彼等の目線で語るととんでもなく短い話になってしまいますので…

別のある人に主役になって貰いましょう。

「あ…あれ…？此処…何処？」

なんて可愛らしい少女の声の主、彼女が次の物語の主役なのです。

ただ…彼女は…

「うそおおおお！！？」

人間ではありません、ましてや人の形をした妖怪や魔法使いでもありません。

「毛玉だー、食べちゃおー。」

「いいやあああ…！！！！！！」

そう、喋る毛玉。

彼女が、次の主人公なのです。

まるきゅーは永遠に（後書き）

また次回作で会いましょう！

駄文だらけのこの小説にご声援ありがとうございましたっ！！

感想などございましたらどしどし受け付けてます！

続編タイトル

『毛玉レベルの人が幻想入りしちゃいました〜まるきゅー第二部〜』

カミングスーン！（年内にはお届け出来ると思います）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6863o/>

東方凶狂書～まるきゅー×3の夢物語～

2011年1月2日16時57分発行